

である。元來此の空といふ語が種々に解せられるので、其の浅い方の解し方では此の句の眞の意味は分らぬ。空とは空無の意にも解せられる。即ち何もないといふ意味に取られることもある。例へば『一切の努力が空に歸した』といふが如き場合は、切角努力したが何の結果も得られなかつたといふ意味である。佛教に於ても斯ういふ意味で空といふ語を用ゆることもある併しそれは小乗教に於ての用ゐ方である。大乘佛教の精神からいへば凡ての存在するものに存在の意義があるので、一として空無に歸すべきものは無い筈である。空とは空無の意味ではない。大乘佛教でいふ所の

空とは差別を超越する意である。

例へば『空理を説く』といふのは『平等の理を説く』といふやうに解すべきである。又例へば『色即是空』といふのも『種々の姿形は皆假のものである。一も實體はない。一も心を止むるに足らぬものである』といふやうにも解せらるゝのであるが、それは至て浅い解釋の仕方である。色とは種々の姿形のこと、即ち所謂現象のことであるが、此の現象が偶然に生じたのではない。當に現はるべき理があつて現はれたのである。されば此の現象を精しく究めて行く時には其處に或る一定不變の原理の存在を認め得べきである。空とは即ち之をいふのである。

されば『色即是空』といふのは『何物も頼むに足らぬ。假の姿にすぎぬぞ』といふやうな消極的、厭世的の語と見るべきでなく『形に現はるゝ所はいつも變化して定まらぬけれども、その底に永恆不變のもの、存在することを見なければならぬ』といふやうな意味に解すべきものである。

されば『因縁所生の法を即ち空なりと説く』といふのも淺く解すれば『何事も皆因縁によつて生ずるにすぎぬ。因縁以外に實體として認むべきものはない。されば何事にも深く心を止むるに足らぬ』といふ意味になるが、それでは大乘佛教の精神とは一致せぬのである。因縁によつて甲より乙を生じて、乙より丙を生じ限りなく流轉し、限りなく變化して行く。これが吾等の眼前の事物の有る儘の姿である。併し深く考へて見れば斯る變化の中を一貫したる何者かなければならぬ。實際の例に就いて見れば、池の水の上に太陽が照つて居る。此の太陽の熱によつて池の水の一部分が蒸發して水蒸氣となる。池の水は因で太陽の熱は縁で、此の因と縁との所生が即ち水蒸氣である。此の水蒸氣は空氣中に混じて後、低い温度にあつて至て微細なる水の粒となる。これが即ち雲である。水蒸氣は因で低温度は縁で、此の因と縁との所生が即ち雲である。此の微細なる水の粒が又空中を通過して雨となつて下に落ち、また元の池へ戻る。雲は

因で、空中を落ちるのが縁で、此の因と縁との所生で元の池の水となつたのである。此の變化は唯だ因縁の引き續きにすぎぬ。而して池の水と、水蒸氣と、雲と雨とはそれ々に皆異つた形を取つて居るけれども、其の異つて居るといふのは畢竟異つて現はれたといふにすぎぬので、之を通觀すれば唯一種の水に外ならぬのである。斯く變化の中を通觀して『唯一種の水』を認めたのが即ち『空を説く』といふことである。されば空を説くとは

變化の中を一貫する所の不變化のもの

を認め得たことである。『達人は大觀す』といふのも要するに斯ういふ見方をいふのであらう。此の理は人生の凡ての事に就て見ても、全く同様である。

自分の友人に政治界に於て相當に活動して所謂名士といふ中に數へられて居る、某といふ人があるが、此の人は東北の或る村の出身である。一二年前に久々で故郷へ歸つたが其の時の事を委しく自分に物語つた。『故郷へ歸つたところが、元の小學校の同窓の人々が集つて盛なる歡迎會を開いてくれた。其の席上で手織木綿の着物を着た一人の百姓が恐る恐る自分の前へ來て挨拶し、私は某といふ者で御坐りますと名乗つた。名乗られて思ひ出したが、それは自分が小學校で同級であつた男である。自分もその男も共に優等生として、同級の間ではいつも幅を利

かして居たものである。然るに自分は小學校を出ると共に東京へ上り、多くの人の引立てを受けて高等教育をも終り、今日では社會で相當な地位を得て居る。彼の某といふ男は小學校の教育を受けたゞけで百姓となり、土に塗れて今日まで過して來た。それで自分を東京から來た名士として大に尊敬し、宛も家來が主人の前へ出たやうな謙遜な態度で挨拶をしたのである。彼は以上の事實を語り終つて、さも感慨に堪へぬやうな様子で『今日のところ彼と自分とは非常に價値のちがふ人間のやうに、元の同窓の人々に思はれて居る。併し

彼と自分と地位を換へたら如何なつたであらう。

彼が早くから東京へ出て充分の教育を受けたら、今日の自分より以上の者になつて居たであらう。自分が田舎に引込んでばかり居たら、彼の如き百姓男になつてしまつたであらう。自分は彼より豪いのではない、唯彼より運が好かつたゞけの事である。唯運がよかつた爲に彼より尊敬を受けるといふのは耻かしいことだ』といつた。尙は彼に之に附け加へて『併し世間的の地位は今非常にちがふけれども、誠心を以て各自の業に盡せば共に國家に貢獻することは出来る。彼も自分も畢竟するところは同じやうな者だといつて宜い』といつた。實際此の友人と彼の田舎の老農夫とは其の素質、其の天分に於て優劣は無かつたのであらうが、其の値ふ所の縁

が異つた爲に異つた結果になつてしまつたものと思はれる。友人が能く此處に氣付いて「彼と自分と地位を換へたらと……」反省し、又「畢竟するところは同じやうな者だ」とまで考へたのは感ずべきことである。彼は因縁所生の法の中に於て能く空を認め得たものといふべきではないか。

第三の句は「亦是に假の名を爲る」といふのであるが、假とは種々差別の義である。吾等は吾等を圍む所の凡ての事物にそれ／＼の異ひを認めて、それ／＼に其の特色をあらはすに相當なる名稱をつけ、常に之を區別して居るのである。斯く様々の區別を附けて居ればこそ活きた社會の運用が出来て行くのである。是に假の名を爲るといふのを「いろ／＼區別して名を附けるが、何れも假のものだから深く心を止むるに足らぬ」といふ風の意味に取つてはならぬ。假の名を立つることが必要なのである。平等を認むることが必要であると同様に差別を認むることも亦必要なのである。松の木を苗を海邊に植えて置けば長するに隨つて荒い沙風を受けて、面白く屈曲した木振となる。それと同じ苗を餘り風も當らぬ山間の地に植えて置けば、スクスクと真直に育つのである。同じ松ではあるが全く同じものではない。その縁のちがふために、それ／＼異つた木振になつたのであるから、之を異ふと見るのが正しいのである。伊丹の鬼貫

の句に

木枯のはてはありけり海の音

といふのがある。冬になつて恐ろしく強い風が野山を吹き過ぎると、色づいた木の葉は皆之に吹かれて落ちてしまふ。それで此の如き風に木枯といふ名がつけられてあるさうであるが、此の風が野山を通りすぎて、海に吹き入ると、海の水は之に煽られて波立ち、トウ／＼と鳴り響くのである。同じ風であるが、木の間を吹き過ぎる時の音と海へ入つてから立つ音とは、それ／＼に異ふ。此の異ふ所に自然の趣があつて、歌にもなれば句にもなるのである。

杜子美は詩聖として知られた人であるが秦州より蜀に入つた時、晝の如き山水の間を跋涉して多くの名詩を得たが、その中の一首の結末に

磊落として星月高く、蒼茫として雲霧浮ぶ。大なる哉乾坤の内吾が道長に悠々。

とある。杜子美は憂國の志士であつたが志を當世に得ずして不遇の間に一生を終つた。殊に安祿山の亂によつて天子は蜀に出奔するといふやうな恐ろしい時代であつたので、一家眷族も散々になるといふ有様で、有らゆる艱苦を嘗めたものである。併し彼は道を信ずることが厚かつたので、如何なる艱苦の中に於ても決して其の君に盡し國に盡すの心を渝へなかつた。世の中

が如何に變化しても道が亡び盡すことはないといふ信念は、彼の生涯を一貫して居た。されば今蒼茫たる雲霧の中に星月の高く天に懸れる有様を見て、天地の大なることを今更の如くに感歎し、斯る天地の盡きせぬ限り、吾が道も決して亡びぬであらうといふ信念を一層強め得たのであらう。彼は變化極まりなき奇景に對して、千萬年を一貫して變らぬ道の存することを殊に痛切に感じたのである。人は天地の大なる力に包まれて生存して居る。人の道は天の道に基いて立てられたものである。彼が天地の大なることを感じたる刹那に於て、吾が道長に悠々と讚歎する念を起したのも尤もである。

山は峙ち水は流れ、雲は動き星は輝いて居る。それ／＼に皆異ふけれども、相集つて天地の大なることを示し、悠々として長に行はるゝ道の貴きことを感ぜしむるのである。此の世の中に全く同じものは無い。十八世紀の或る哲學者がいつたやうに、木の葉でも全く同じ形をしたものは一枚もないのである。

角あるも丸きもまじるさざれ哉おなじ渚の波にさらせど

といふ野村望東尼の歌もあるが、河原に立つて小石を拾つて見ても、同じ形のもの一つもない。併し其の相異なる物を集めたる天地は『一の大なる調和』を吾等に示して居るのである。

たゞ雜然として物が皆異つて居るのではない。其の千様萬態に異なる中に秩序が存し統一が存して、調和せる相を示して居るのである。其の一方の物の中には美しくないものもあり、餘り價值のないやうなものもある。併し何れも此の天地間の一大調和を形作るためには役立つ居るのである。人生のことも亦其の通りである。

其の例を史上の事實に取つて見やう。治承四年に頼朝が伊豆に兵を擧げ、翌年義仲が兵を木曾に擧げ、一たび全滅に歸した源氏の勢力を又盛り返したのは如何にも華やかな事蹟であるが、其の源氏の勢力に敵し得ずして滅亡した平氏の人々が最後まで睦みあひ扶けあつて、其の逆運に殉じたことも亦吾等に深き感銘を與へる。昔の川柳に

平家なり太平記には月も見ず

といふのがある。其の滅亡の際にも月に向つて歌を詠んだり、或は笛を吹いたりして風雅の嗜みを忘れなかつたのは流石に平家である。之を太平記の中に見えた武士達が月見の一つもせず唯だ戦争ばかりして居たのに比べて見ると遙かに立勝つて居ると稱讚したのである。勝つた源氏は鎌倉に幕府を開いた。其の所謂鎌倉武士の間に發達したる剛健質實の氣風が日本の武士道の大成に大なる力となつたのは誰もよく知る所である。併し負けて亡びた平氏の人々の行ひ

も確かに後世の人に種々の教へを與へて居る。勝つ者も敗るゝ者も、共に日本の史上に大なる光彩を放つ者と稱せらるべきであらう。

又徳川氏が久しく三河に在つて武田今川等の有力者の間に挟まれ散々に苦勞を重ねて居るうちに、次第に底力を養つて、終に天下を統一するに至つたる堅忍不拔の精神は充分の稱讚に値するものであるが、吾等はまた豊臣氏の末路をも冷やかに看過することは出来ぬ。豊太閤が死んだ翌年前田利家が死んだ。是れで天下の形勢は略ぼ定まつた。斯うなれば誰も其の實力に於て徳川氏に敵するものは無くなつたわけで、家康その人が斯く自信したばかりでなく、何人も之を認めなければならぬ事であつた。慶長五年關ヶ原の合戦は即ち前田利家の死んだ翌年である。此の合戦によつて石田三成も亡び、愈々徳川の天下と定まつた。元和元年の大阪落城は關ヶ原の合戦から十五年の後である。此の十五年の間豊臣氏の爲に力を盡したる加藤清正その他の人々も、恐らく結局は徳川の天下だといふことは知つて居たであらう。又徳川を相手に戦つた石田三成も必ず勝つといふ自信は無かつたかも知れぬ。凡て豊臣氏のために盡した人々は成敗得失の打算を離れ、たゞ太閤の恩に報ぜんが爲に盡したのである。それは

鞠躬盡瘁死して後已まん、成敗利鈍に至りては臣の明かに能く逆め觀る所にあらざる也

といった諸葛孔明と全く同じ心であつたと思はれる。勝つた徳川氏は固より吾等の稱讚に値するが、亡びて行く豊臣氏のために無益なる努力を惜まなかつた人々に對しても、吾等は讚歎を惜まぬものである。

徳川氏の成功の基礎となつたものは、言ふ迄もなく三河武士の努力である。彼等は至て地味な氣風の武士であつた。主君のためには如何なる苦勞も辭せず、いつも忠實に地味に働いて居た。家康が如何に豪傑でも、斯ういふ頼もしい臣下の力に依らずして大事を成すことは出来なかつたであらう。吾等は特に此の點に心が惹かるゝのである。又最後に大阪に籠城して、勝敗を全く眼中に置かず、唯だ亡き太閤への報恩の爲に戦つた、真田幸村とか木村重成とかいふ人々の心は固より貴いが、地位も身分も無い雜兵等が此等の人々と心を一にして戦つたことが又非常に貴く思はれる。其の籠城した人々の中で大野治長は姦佞邪智の者であつたと傳へられて居るが、その從僕に關する逸話がある。大阪落城の後治長の從僕の某といふ者は、治長の女の末だ幼年であつた者を介抱して京都に隠れて居たが、露はれて徳川方に召捕られた。彼は大阪城中の事に就て種々に問ひ質されたが、知らぬ知らぬといふだけで、何事も語らなかつた。併し何も知らぬといふ筈はないと嚴しく調べられた。其の時彼は容を改めて『大阪城中の方々は

皆立派な武士ばかりでありました。自分のやうな下郎に大事を漏されるやうな浅はかな方は一人もありませんでした。如何に御尋ねになつても、申上ぐべき事はありません」といつた。此の一言には徳川方の人達も感じ入つて、訊問はそれ切りになつたといふ事である。是れは果して事實であつたか如何か分らぬが、斯様な逸話の傳はつて居ることは、徳川氏の世に時めいた際に於ても、

敗れた者に對する世間の人の同情

が可なりに濃かであつたことを證すべきである。

佛教に就ての話説を離れて、あまり多く餘事に就て語りすぎたやうであるが、要するに世間に於て種々の異つた地位に在る人、種々の異つた境遇に在る人、種々の異つた立場に在る人が皆それ／＼に存在の意義を有して居るといふことを明かにしたい爲であつた。勝つた者にも負けた者にも皆それ／＼の美しさがある。表に現はれて働いた人にも、陰に隠れて居た人にも又それ／＼の價值がある。此の意味を史上の例によつて證するつもりであつた。宛も天地の間の大なる調和を形作るために、一塊の石も一枚の木も葉も皆それ／＼の役を果して居るやうに、種々なる人々の働さが人類史上にそれ／＼の光彩を添へて居るのである。それが過去の歴史に

於てのみさうであつたのでは無く、今の世の中に於ても全く同様である。人々は互ひに其の價值を認めあひ、互ひに其の力に感謝しあふべきものである。春の野に立つて遠くを眺めると、遠くの方に立つて居る人の姿が霞んで美しく見える。併し向ふの人は又此方の姿を「霞んで美しいナア」と思つて眺めて居ることであらう。大隈言道の歌に

春の野に橋打渡る我が身をば霞にそへて人や見るらむ

とあるのは如何にもよく此の趣を描き出して居る。世の中の凡ての人がいつも此の心を以て相對して居れば宜いのである。

人々が皆それ／＼に異つた働きをして居るから、人生に進歩もあれば發達もあるわけである。但し異ふといつても、人としての共通の性質は皆もつて居るのである。それをよく辨へて、種々の異つたものに皆それ／＼の存在の價值を認めなければならぬのである。前に池の水も、水蒸氣も雲も雨も皆盡く水であるといふ例を引いたが、その一種の水が或は雲となり或は雨となり、或は元の池の水に返るところが即ち天地自然の妙用である。若し此の變化がなければ天地化育の功は行はれぬ。同じ水であつて、而も異つたものとなつて働いて居るのが貴いのである。人生の事も亦其の通りである。同じく佛性を具へたる人であつて、而も種々なる天性

をもち、種々なる境遇に生れ、種々なる働きをする故に、人生に無限の變化があり、絶えざる進歩と發達とが見らるゝのである。

差別にのみ囚はるゝことは正しくないが、差別を輕んずることも固より正しい考へ方ではない。

されば中觀論の偈の第三句に『亦是に假の名を爲る』とあるのを、種々の差別を立て種々の名目を立て、居るのは詰らぬことであるといふ意味に解してしまつてはならぬ。其の相別れ相異つて存在する所の一々の物に皆深き意義を認めなければならぬのである。

斯く平等的方面と差別的方面に、それ／＼深き意義あることを認め、之を統一して觀るのが即ち中道なので、其の偈の第四句に『亦是れ中道の義』とあるのがそれである。同中に異あり、異中に同ある。即ち是れが中である。彼の『中庸』にも此の意を述べて、

中なるものは天下の大本なり、和なるものは天下の達道なり。中和を致して天地位し萬物育す。

とあると共に、また

天地の道は一言にして盡す可きなり。其の物を爲ること貳ならず、其の物を生ずること測ら

れず。……詩に曰く、惟れ天の命、於穆として已まずと。蓋し天の天たる所以をいふ也。

とある。是れも天地化育の道が種々變化して測る可からざるものであると共に、其の變化の中を一貫して變らぬものが有ることを説いたものである。『中道の義』といふのもまた之と趣を同するのである。竹庵禪師の詩に『朱簾暮に捲く西山の雨』とあるのは殊に面白い。これは王勃の詩の中の句をその儘に用ゐたのである。

王勃は唐代に於ける最も優れた詩人の一人であるが、まだ青年時代に洪洲を過ぎた時に、滕王閣に於ける宴會に偶然出席した。滕王といふのは唐の高祖の子であつたが、此の洪洲の刺史であつた時に此の閣を作つたので、其の名が其儘に閣の名となつたのである。王の死んだ後も閣は残つて居て、文雅の士の集會所となつて居た。王勃は此處を過ぎて偶然にも多くの文雅の士の催した宴會に列し、滕王閣の序といふ長篇の文を作ると共に一詩を賦したが、其の詩の中に閣上より望める風景を叙して、

畫棟朝に飛ぶ南浦の雲、朱簾暮に捲く西山の雨。

といひ、その結句に至つて

閣中の帝子今何にか在る、檻外の長江空しく自ら流る。

といった。竹庵が此の詩の句を活用したのである。

王勃の意は「閣は昔ながらの閣であるが、閣を作つた人は既に亡き人となつた。風景は昔ながらに美しいが、此の風景を賞した人は今此處に居らぬ。今此處に集つて共に此の風景を賞して居る吾等とても、又相逢ふことは出来ぬかも知れぬ」といふやうな頗る感傷的のものであるが竹庵は之を全く翻して、「人は亡くても風景は昔ながらの風景である。又亡き人の佳景を賞したと同じ心を以て、後の人も同じ景色を賞するのである。變ると思へば物事皆變るが、變らぬ方を見れば少しも變らぬ。此の兩方面を兼ね具へた所に天地の妙用を見るべきである」といふ意を以て「朱簾暮に捲く」の句を用ゐて居る。世は無常であると觀て感傷的になるのも一種の考へ方であるが、其の無常なるものゝ中に常 住なる道の存することを見なければならぬ。嵐山の花を賞した景樹は

なほる河かへらぬ水に影見えてことしも咲ける山櫻かな

と詠んだ。その意は「花は年々同じやうに咲くが一たび流れ去つた水はまた返らぬ。人もまた其の通りである」といふやうな頗る感傷的なるもので「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」と昔の詩人が詠じたのとほゞ同じ心と思はれる。是れも確かに事實には違ひない。併し

此の事實にのみ囚はれてはならぬ。

咲いた花の散るのを見れば寂しい、盈ちた月の缺けて行くのを見れば寂しい。併し前にもいつたやうに、花は春毎に必ず咲くのである。月は必ず盈ちて又必ず缺け、又必ず盈つるのである。花の咲かぬ春はない、又花の散らぬ春もない。月が盈ちたまゝで缺けぬといふことも無ければ、缺けたまゝで盈ちぬといふこともない。「必ず」といふ所を捉へて考へて見れば、無常の中に常 住なる性質が一貫して存することを疑へなくなる。自分は徳川時代の俗曲をいつも大なる興味をもつて讀むのであるが、曾て梅川と忠兵衛との死を決して大阪を駈落する一段を寫したものを讀んだ時に（それは河東節の本であつたかと思ふがハッキリとは記憶せぬ）梅川の語として、

雪は白くてお月さんはいつでも圓い

といふ句のあるのを見て思はず手を拍つて感歎した。是れは人生に如何なる變化があつても降る雪はいつでも白く、月はたとへ缺ることがあつても必ず又圓くなるといふことを例に取つて、自分達の身體は死んでも、愛しあふ心は永久に變らぬといふことをいつた迄のものである。又それが實際梅川といふ女のいつた事でも何でもなく、此の謠の作者の拵へたものに過ぎぬのは

いふ迄も無い。併し之を此の作者が多く若い男女が愛に殉ずる時の心を察して、彼等に代つて言つたものと見れば非常に面白い。一時的の愛に殉ずることは馬鹿らしい事である、所謂『若氣の至』として嘲笑すべきことにすぎぬ。併し彼等は兎も角も『身體は死んでも愛しあふ心は永く亡びぬ』といふことを信ずるが故に、喜んで死ぬのである。彼等は兎も角も一心に思ひ詰めた爲に、一種の『永恒なるもの』を捉へ得たのである。吾等は徒に彼等を嘲つてはならぬ。寧ろ吾等が眼前の變化窮まりなき事物にのみ心を勞して、何等永恒のものを捉へ得ぬことを、彼等に對して耻づべきではないか。

畢竟する所は變化と不變化との兩面を併せ觀、無常と常、住との兩面を併せ觀なければならぬといふことである。大海の水が波を起す。その一つの波のみを見て海の濶いことを知らぬのは愚であるが、併し一々の波より外に別に大海があるのではない。大なる樹に枝も葉も澤山ついで居る。其の一枚の葉をのみ見て樹の大なることを知らぬのは愚であるが、併し此の葉と枝との外に別に樹があるのではない。樹に着いて居るから葉は青々と茂つて居るのであるが、葉はまた空中から養分を取つて樹を養つて居る。塵の多く立つ街に植ゑられた樹は、其の葉が塵のために遮られて空中から養分を取ることが出来ぬので、往々にして樹が枯れてしまふのであ

る。斯う思ふと一枚の葉も輕んずることは出来なくなる。併しながら

葉は何處までも葉であり、幹は何處までも幹である。

之を混ずることは出来ぬ。葉も幹も共に大切なものではあるが其の中に輕重の差が無いわけではない。葉を二枚や三枚取つても樹は枯れぬが、幹を斬れば樹は直に枯れてしまふ。小さいものでも輕んじてはならぬが、大なるものが更に重ぜられなければならぬ事を能く辨へなければならぬ譯である。

繰返していふ、小さいものを輕んじてはならぬが、大なるものゝ更に貴いことを忘れてはならぬのである。低いものも侮つてはならぬが、高いものを貴ふことを忘れてはならぬのである。煩惱の凡夫も佛と成り得べきものであるから、決して憎んではならず又決して棄てはならぬ。併し佛菩薩を凡夫と同じやうに思ふのは以ての外のことである。禪宗の方に傳はつた話の中には随分奇抜なのがある。例へば昔の高僧が佛像を打毀して、それを燃して自分の尻を温めたいふやうな話がある。斯ういふ話には非常に深い意味が含まれて居るので、輕々しく其の形に現はれた所のみを眞似たならば大變なことになる。徒に高遠なる理想のみを懷いて、自分は凡夫であつても佛菩薩と更に隔りはないなど、考へるならば、自分の一生を誤るのみならず、又

世間の人を誤るもので、其の罪は非常に大きい。道元禪師は此の如き徒を戒めて、たとひ會に誇り悟を豊にして警地の智通を獲、道を得心を明にして衝天の志氣を擧げ、入頭の邊量に逍遙すとも、幾んど出身の活路を缺闕す。

といった。警地の智通とは、チラリと見たばかりで本當に能く分つたやうに思ふことである。衝天の志氣とは自分が佛菩薩と同じやうな者に直になれると思ひ込んで居ることである。出身の活路とは即ち煩惱を離れ盡して、眞に活きかひのある活き方をするので、それが出来なければ如何に自分だけ悟つた積りでも何の役にも立たぬのである。

慧心僧都が此の事に就て説いた所は頗る其の要を得て居る。それは往生要集の中の語であるが、

煩惱と菩提とは體これ一なりと雖も、時用異なるが故に染淨同じからざること水と氷との如く、又種と果との如し。その體は是れ一なりと雖も時に隨ひて用に異なるあり。これに由りて、道を修する者は本有の佛性を顯はし、道を修せざる者は終に理を顯はすこと無けん。とある。唯一つの心の中から煩惱も起れば佛のやうな貴い智慧も出るのであるから、體は一つともいへるのであるが、其の煩惱を除いて智慧を明かにするには極めて多くの努力を経なければならぬ。

氷も水も同じであるといつても、氷に熱を加へずして水とすることは出来ぬ。種から草が生え、その草に花が咲いて果となるには相當の隔りがある。其の隔りとは即ち修行をするの必要をいふのである。それを『道を修する』といつてあるのである。吾等はいつても平等と差別との兩面を考へ、其の一方に偏することの無いやうに努めなければならぬ。佛と凡夫とを全く別のものと思つてはならぬが、又同じものと思つてもならぬ。春と冬とは續くのであるが、春は春であり冬は冬である。溪河の水は大海の水と相連るけれども、溪河と大海とはそれ々に異つて居るのである。傳教大師の『法華去惑』の中に、

凡そ差別なきの平等は佛法に順ぜず、惡平等の故なり。亦平等なきの差別も佛法に順ぜず、惡差別の故なり。

とあるのは吾等の爲に最も貴い教訓である。此處に惡といふのは全からざることである。即ち偏れることである。平等と併せ考へてこそ初めて差別を立てたかひがあるのである。若し差別のみを考へて居るならば差別を立てたかひは無いのである。又差別と併せ考へてこそ初めて平等觀を立てたかひがある。若し偏に平等のみを考ふるならば空理空論になつてしまふ。それは生命を失つた平等論である。何れも間違つた考へ方である。正しい觀方はたゞ中道に依るべき

である。但し平等觀も差別觀も無用といふのではない。其の一方にのみ偏するのが悪いのである。平等觀と差別觀とが相俟ち相扶けて中道に入ることが出来るので、天台大師は二觀を方便と爲し、中道に入ることを得。

といつたのである。

此の空假中三種の觀方を名けて三諦といふのである。諦といふのは前にも説明した通り『確かで間違ひがない』といふ意である。即ち徹底的に見定むることである。平等的方面をシツカリと見定め、差別的方面をシツカリと見定め、又之を統一したる中道をシツカリと立つべきである。此の空諦、假諦の二を又眞諦、俗諦ともいふので、唐の妙樂大師は之を説明して中諦は一切法を統ぶ。眞諦は一切法を泯す。俗諦は一切法を立つ。

といつた。一切法といふは一切の事物のことである。吾等の眼前に横はる所の一切の事物は、無限に相異り、無限に變化するのである。之を其の儘に觀るのが俗諦である。其の種々雑多な變化の中を一貫する不變のものを認むるのが眞諦である。前者は差別觀、後者は平等觀。而して之を統るものが中諦である。中道を知るものは即ち一切の事物の實相を知るものである。されば妙樂は

一色一香中道にあらざるは無し。

ともいつた。小さい茶碗の水にも月の影は明かに映る。小さい蒲公英の花一輪にも春の盛はよく知らるゝのである。月といふものを全く知らぬ者が茶碗の水に映つた月影を見ても、それを月影とは知らず、たゞ何か圓い物が映つて居るとのみ思つて居るであらう。併し月の美しいことをよく知つて居る者は、その月が如何に微かなる露にも其の影を宿すことを特に貴く思ふであらう。大空に澄み渡る月の光りにあこがれて『いづちまで行く我が心ぞも』と詠じた西行は其の月が小さい露の珠に一々其の影を宿して居るのを見て、數ならぬ庭の小草の白つゆを求めて宿る秋の夜の月と詠んだ。其の大なるものを明にし得た者にして初めて其の小さいものにも貴さの具はつて居ることが分るのである。

蒲公英や菫の花でも小さい兒が見れば、たゞ黄色な花とか紫色の花とかいふだけのものである。それが詩人とか俳人とかいふ人々の眼に映る時には全く別の趣を帯びて見える。芭蕉は四十二歳の時に奈良から京都へ出て近江の湖水のあたりまで吟行して、飽くまで春景色を賞し、大津へ出る途中に於て

山路来て何やらゆかしすみれ草

と詠じた。奈良も京も春の景色はまことに麗らかに美しいが、山陰に咲いて居る菫の小さい花にも春の色は充分に現はれて居る。併しながら木樵や山賤のやうな、葦より外に花らしい花を見たくとも無い者の眼には、すみれの花がそれ程美しく見えぬのである。妙樂大師のやうに佛教の精髓を究め、佛菩薩の貴い道を充分明かにし得た人にして、初めて一色一香も中道にあらざる無しといふことが斷言し得らるゝのである。吾等は凡夫であるから容易に其の邊までの事を見定むることは出来ぬけれども、其等の先覺の人々の示す所に従つて修養を續けて行けば、必ずや得る所があるであらう。

大道を究め得た人は決して小事を忽にしなかつた。それは其の所謂小事を遺憾なく果すことが即ち大道に叶ふことを知つて居たからである。孟子が大人と小人との別を説き、『其の大體に従へば大人たり、其の小體に従へば、小人たり』といつたことは前にも擧げたと思ふが、其の大體に従ふとは本心の命ずる所に従ふことで、小體に従ふとは周圍の事物の爲に動さるゝことである。併し孟子はまた

飲食の人は則ち人之を賤む。其の小を養ひて以て大を失ふが爲なり。飲食の人にして失ふ所

なくば、則ち口腹豈にたゞ尺寸の膚の爲のみならんや。

といつて居る。飲食の人といふは肉體の欲のみを充すことに専な人のことである。その飲食の人は肉體の満足以外のことを考へぬから賤しい者と見られて居るのであるが、若しそれにのみ囚はれぬならば、口腹の欲は必ずしも賤むべきものとはいはれぬ。道を行ひ義を守り務を盡すために身を養ふのであれば、身を養ふことほど貴い事はない。小事に囚はれて大事を忘るゝ者は愚であるが、小事にすら力を打込むことの出来ぬものが大事に當つて其の重任を盡すことの出来やう筈はない。

又人生は果てもなく複雑なものである。常に變化して休まぬものである。小事と思はれたところが非常に大なる結果を生ずる場合もある。大事と見えたことが案外大事ともならず終る場合も少くない。例へば胸が痛むとか腹が痛むとかいふ時には誰でも直に薬を飲んで、少しも早く其の痛みを癒すことに努める。指の先に小さい傷のついた時などは、格別の痛みもないからツイ其儘に棄て置く。然るに此の小さい傷から恐ろしい病菌が入つた爲に、生命にかゝはる様な患ひとなることも往々にしてある。世間の事にも此の類が決して少くない。畢竟小事として輕んずべきものは無いと思はなければならぬ。道を學ぶこと久しく、自ら其の徳を養ふことの厚い

人は、いかなる小事に力を盡すのにも皆深い意義を見出し得べきである。何となれば如何なる小事を果すのも、人として當に爲すべきことを爲すのであつて、即ち之によつて活きがひのある活き方が出来るからである。特に大事に當つて自己の力量を現はさうと待ち設けて居るには及ばぬことである。

千利休といへば茶道の大宗師として崇めらるゝ人であるが、利休は故らに風流がらぬのが眞の風流であると、常に其の門下の人に教へて居た。或る時某といふ諸侯が利休に一封の金を送り、「近日茶會を催すつもりであるが、其の節用ゆるために何でも一品買ひ調へて送つて貰ひたい」と頼んでやつた。利休のことであるから茶碗か水指か、何か珍しい器を送つてくれるであらうと楽しんで待つて居ると、數日の後に利休から送つて來たのは茶巾に用ゆる奈良晒であつたといふ。人を招いて茶會を催すのに珍しい器がなくても主人のもてなし方一つでは愉快に其の會を果すことは出来る筈である。ところが若し茶巾が汚れて居て客に不快の感を起させたならば、如何に珍しい器を並べて見せても馳走にはならぬのである。此の大切なる心得を教ゆるために、茶巾とすべき麻布を送つたのは流石に利休である。特に異を立て人の注意を惹かうとするのは未だ至らぬ者のすることである。平凡な事の中にいくらでも深い趣が認められなければ

ならぬ。佛法を學ぶ者も亦常に此の事を忘れてはならぬ。

眼前の些事を處理することが出来ずして、世を導き人を救ふことの出来やう筈はない。

其の些事を處理する際に於ても、その人の身に具はれる所の徳は遺憾なく其の光りを放つべきである。

能く萬有の實相を觀得たものは、如何なる境界に在つても其の宜しきに適へる行ひが出来るのである。即ち心に自在を得るのである。

施爲に障無きを名けて自在と爲す。(唯識演秘)

といふは自在といふことの意義を能く悉したる説明である。尙ほ自在を二種に分けて觀境自在と作用自在とした説もある。(華嚴大疏) 其の第一の觀境自在といふのは一切の事物を觀察するに於て些かも誤りなきことである。其の觀る所に誤りがないから、其の身を處し事を斷ずるに當つて一々其の宜しきに適ふので、それが即ち作用自在である。大乘の敎へを學んで能く之を活用した人の事蹟は、眞に吾等をして感歎措く能はざらしむるものであるが、今其の一例として彼の蒙古來襲の際に於ける北條時宗の事蹟を擧げて見やう。

時宗のことは前にもいつたことがあるが、其の十八歳にして執權となつた時には、既に蒙古

から降伏を勧むる牒狀が到來して居たのである。其より十三年の後即ち弘安四年に至り蒙古の大艦隊の全滅したことは誰もよく知る所であるが時に時宗は三十一歳であつた。此より三年の後、三十四歳にして彼は死んだのであるから、其の生涯が殆んど全部此の國難を處理するため捧げられたといつても宜いのである。彼は最初から如何なる事があつても決して國威を傷けまいといふ確乎たる決心をして居たが、さりとて強めて戦端を開くことを好んだのではない。其の最初に建長寺の蘭谿を導師として國家安穩の祈禱をした時の願文には、
 専ら祈らくは弟子時宗、永く帝祚を扶け、久しく宗 乘を護り、一箭を施さずして四海安和に、一鋒を露はさずして群魔頓息せん。

とある。是れは佛法を奉ずる者として當然の態度である。併し國威を傷けてまでも平和を保たうといふのではない。それで彼の横暴なる態度が愈々明かになるに及んで、時宗は決戦の覺悟を極めた。殊に文永十一年十月蒙古の兵船九百艘が壹岐對馬を荒して肥筑地方に押寄せ、殘虐の限りを盡したのを見て、時宗は『彼等は獨り吾が日本の敵たるのみならず、其の所行は全く鬼畜の如きものである。之を懲さずして棄置くことは出来ぬ』と思ひ定めた。此より彼の態度は一層積極的となつた。たゞ押寄せ來る敵を防ぐといふのでなく、更に進んで敵の根據地を衝か

うといふ計畫まで立てた。

其の間に於て時宗は常に經を讀んだり坐禪をしたり、高僧等の教へを聽いたりして、少しも修養を怠らなかつた。其の教へを受けた人々の中で殊に大なる感化を彼に與へたものは宋から來朝した高僧子元であつた。弘安四年に至り蒙古が大舉して來冠した際には、龜山上皇が身を以て國難に代らんことを伊勢の大廟へ祈らせられた程であるから、舉國一致して敵に當るべき覺悟は固まつた。此時に時宗は自ら指を刺して血を出し、金剛經、圓覺經、般若經等を書寫して佛前に供へ、子元を導師として祈願を籠めた。その願文には

一句一偈一字一畫、悉く化して神兵と爲ること猶ほ天の帝釋が彼の修羅と戦ふが如くならん。……彼の魔悉く降伏して生靈皆安きを得ん。

といふが如き語がある。彼は此の意氣によつて能く其の大任を果したのであるが、彼の人物の非凡であつたことは、彼の死んだ時に子元が讀んだ下火の語に

老僧公に托して以て殘生を了せんとす。料らざりき我に一著を先んじて去らんとは。世相期し難く空華落ち易し、一笑身を翻して兜率に相見ん。

といひ、又其の事蹟を讚歎した文の中に、

齒四十に満たずして功業を成就すること却て七十歳の人の上に在り。看よ他の國を治め天下を平定するに喜怒の色有るを見ず、矜誇衒耀の氣象有るを見ざるを。……奇なるかな此の力量有り、此れ亦佛法中再來の人なり。

といつたのに依つても察すべきである。子元はまだ吾が國へ來朝せぬ前に、蒙古の兵に死を以て脅された際に、白刃の下に在りながら平然として『電光影裏に春風を斬る』と吟じたほどの人である。此の人に斯くまで推賞せられ景慕せられたる時宗の人物の偉大であつたことは想像に難くない。彼は非常に優れたる天分をもつて居た人であらうが、其の幼年の頃から佛教の信仰をもつて居たことが其の人物を大成せしむるに大なる力となつたに違ひない。

時宗は最も勇敢なる武將であつたが、又極めて情に敦い人であつた。彼は少しも戦功を立てたことを自ら誇るの念無く、却て此の戦のために多くの戦死者を出したことを深く悼み、自ら金光明經を書寫し又十六羅漢の像を造立して戦死者の靈を弔つた。又之に續いて圓覺寺の禪林の落成した時には地藏菩薩の像一千體を造立して大法會を行つたが、此の時には獨り我が軍の將士のみならず、蒙古の將士の爲にも冥福を祈つた。人は各その國に忠なるべきである。國難を防がんが爲に生命を捨てたる我が將士の貴ぶべきはいふ迄もないが、蒙古軍の戦死者も亦天

晴なる勇士として尊敬せらるべき者である。勿論蒙古軍の殘虐な行ひは憎むべきものであるが、既に戦争が終つた上は一切其の罪を忘れて、其の戦死者の爲に冥福を祈つてやるといふは、佛法を信ずる者として立派なる態度である。彼は又終生深く父の恩を思ひ、父時頼の冥福を祈るために自ら法華經、圓覺經等を書寫し、また釋迦牟尼佛の像を造立したといふことも傳はつて居る。尤も時宗は幼年の時から

大に父の感化を受けて居たもの

と思はれる。北條氏は時政以來歴代の執權が相應に信心はして居たやうであるが、まだ佛教の教理に就て研究したものなどは無かつた。然るに時頼が執權になつた時には禪の興隆すべき機運が漸く熟して居た。彼は寛元四年から執權となつたが、それは榮西が宋より臨濟の禪を傳へてから五十五年の後、道元が曹洞の禪を傳へてから十九年の後で、其の頃宋から蘭谿とか圓爾とかいふ高僧も來朝した。時頼は其等の高僧を師として眞面目に修行した。殊に兀庵が來朝するに及んでは最も熱心に其の教へを受け、終に允可を受くるまでになつた。其の時彼は、感涙を流して師を拜し、

弟子二十一年旦暮に望み、今一時に已に満足す。

といつたと傳へられる。此の人を父として時宗のやうな人が出たのも偶然ではない。それにしても時宗が生涯父の恩を思ふこと至て深かつたのは感すべきことである。彼が敵軍の戦死者を弔つたといふ事も、此の至孝の行と相俟つて大に光彩を放つものといふべきである。佛は一切衆生を救護することを常に念とせられたのであるが、決して凡ての人に向つて親疎遠近の別を捨てよと教へられたことはない。今までも幾度かいつたことであるが、人倫を離れて別に佛法が存するといふことは無い。

吾が親に仕へ吾が妻子を愛することを知らずして、世のため人の爲に力を盡すといふは虚偽である。其の近親の者に對する愛情を推し及ぼせば一切衆生を救護する働きともなるのである。釋尊は伽耶城外の菩提樹の下に於て成道せらるゝと共に一切衆生を悉く吾が子と見て、之が救護の爲に永く力を盡さんことを決心せられたのであるが、幾くもなく優陀夷に向つて、其の出家の際に『若し佛道を得ば還つて父母を度せん』といふ志であつたことを告げられ、

今佛道を得て徳已に成れり。必らず當に國に還りて本誓に違はざるべし。
と仰せられた。決して吾が親を措いて一切衆生を救ふ爲に力を盡されたのではない。
言ふ迄もなく、佛の御心を以て吾が心とせんことを理想とする者は、一切衆生を救護するた

めに力を盡すことを大なる悦びとすべきである。されば優婆塞戒經には布施を行ずる時の心得を説いて、

乞ふ者に告げよ、汝今眞に是れ我が功德の因なり。我今慳貪の心を遠離するは皆汝が來り乞ふの因縁に由ると。

といつてある。布施することは彼の爲ではなくて我自身の爲である。貪ると慳むとの念が絶えなければ常に自ら苦むの外はないが、其の貪ると慳むとの念を去らうとするには、常に努めて布施を行ずるより外に道はない。最初は人に布施することに憍惜の念が伴はぬわけには行かぬが、努めて布施を行ずる間には之に大なる悦びを感じるやうになる。それに伴つて慳貪の念が吾が胸中より次第に掃はれて、非常に朗らかに明るい氣分になれるのである。斯うなるのは人に布施したお蔭であるから、乞ふ者に對して感謝せよと教へられたのである。是れ程に布施を奨勵せられたのであるが、而も同じ經の中には

先づ父母に供養すること能はず、又妻子を惱まして以て困苦して布施する者は假名の施にして義の施と名けず。斯の如き施は憐愍なく報恩を知らずと名く。

といつてある。是れ善を行ずるに當つて常に親疎遠近の別を誤らぬことが大切であるといふ教

訓であつて、吾等の共に深く心に銘すべき所である。

『假名の施』といふは『名は布施であつても實は布施でない』との意である。眞の布施は他人に對する深き同情の發露したものでなければならぬ。たゞ物を與へたから善いといふのではない。即ち

悲心を以て一人に施す功德も大なること地の如し。(大丈夫論)

とも説かれてある如く、悲心即ち他の人の苦みに同情する心が布施となつて現はるゝが故に貴いのである。若し眞に悲心のある人ならば、常に自分と共に起臥する所の親や妻子の苦み悩むのを見て之が爲に心を痛めぬ筈がない。若し之が爲に心を痛めぬ人は冷酷なる性質の人である。冷酷なる性質の人が他人の爲に力を盡すとか、布施を行ずるとかいふのは決して其の本心から出た行ひでなく、大に世間に對して求むる所があるからである。即ち人に對して恩を賣る心から出たものである。此の如きは

己を欺き人を欺くものであるから、大なる罪といはなければならぬ。

即ち之を假名の施と斷ぜられたる所以である。又義の施でないといふのは、『正しき意味に於ける布施でない』といふ意である。

父母は吾を養育して、世に立つことを得せしめたものである。此の大恩を思ふものは、此の大恩に報ぜんことを念としなければならぬ。妻子も亦常に吾が爲に心を盡し、吾に悩みのある時には共に心を痛むるのである。吾は之に對しても報ずる所がなければならぬ。此の如き念を擴めて即ち他人に對する善行となつてこそ、佛の御心にも叶ふのである。時宗は生涯父の恩を忘れぬほどの人であつたればこそ、必死の覺悟を以て國難に當り、能く國恩に報ずることも出来たのである。又斯く報恩を念とする優しい心を以て其の部下の將士の靈を弔ひ、更に敵の將士の冥福を祈るまでになつたので、

我が佛法の中には心を以て主と爲す、一切の諸法心に由らざるはなし。

と心地觀經に説かれたのは如何にも尤もと思はれる。百喻經の中に或る愚人のことが説いてある。彼は或る時多くの客を迎へて饗應することを思ひ立ち、それには牛乳を澤山に得なければならぬと思つた。併し日々乳を搾つたなら之を貯ふべき器もなく、又久しく貯へて置くうちに腐るであらう。之を牛の腹の中に貯へて置いて、必要な時に一度に搾る方が宜いと思案し、乳牛を捉へ母子處を異にして繋いで置き、一月を経て客を迎へた時に牛の乳を搾つて見たが乳は一滴も出なかつた。此の喩を説かれて後之に解釋を加へられて、

人大に富んで然る後に大に施さんと欲し、更に布施を爲さず。施さんとする時水火盜賊の爲に奪はれて一錢をも施すこと能はざるもの猶ほ此の牛乳の如くならん。

とある。此の譬喩はまことに吾等に適切である。大に富んでから大に施さうと思ふのは誤りである。施す心があれば極めて僅かなりとも日々に施すべきである。其の僅かな施が積り積つて大なる功德を作るのである。獨り布施のみならず、凡ての善行が此の通りである。

徒に天下國家の爲に盡さんことを念とするのみで、眼前の瑣事を忽にし、一家一族の苦を除き勞を省くことを思はぬものは、眞に能く佛法を學べる者とはいはれぬのである。彼の時宗の事蹟を思ふと共に、又思ひ出されるのは渡邊華山のことである。華山が憂國の志士であつたと共に、南宗畫の名手であつたのは誰もよく知る所であるが、其の少年時代に在つては非常なる貧しい暮しをして居た。華山は其の貧しい中で鷹見爽鳩の門に入つて學問を勵んで居たが、貧を救ふためには何か實際の役に立つことをしなければならぬといふので畫を學び始めたのである。その事を華山は四十六歳の時に書いた退役願書の中に次の如く記して居る。(華山は田原藩の藩士で、後には國政に與るやうになつたが、この時退役を願ひ出たのである。)

儒者に相成候とて金の取れ候儀は無之、いづれも貧を救ふ道第一なりと申すにより、爽鳩先

生を頼み芝の白芝山と申す畫工へ入門仕候。此時十六歳の時に候。然所貧人にて附届不行届とて僅か二年にて師家より斷りを受け申候。

其後も益々畫を勵み、非常なる困苦を凌いで研究を續けた。其の困苦の有様は彼が自ら

半紙を調へ候手段無之、初午燈籠の畫を作り、百枚にて一貫の錢を取り日本橋二丁目遠江屋麴町天神たこやにて憐を乞ひ、冬分に相成候へば右を以て紙筆を調へ申候。

といつて居るので能く察せられる。此の困苦の中に於て彼は學問の研究をも捨てず、又當時田原藩の財政が困難であつたのを何とかして整理しなければならぬといふことも充分に考へて居たやうである。其の事は彼が

私二十六歳正月元日鈴木孫助宅にて打寄りいたし、私申候は、何と上斯の如き御困難、各方も拙者も今より心がけ候へば、御政道を扶植致すべき道可有之と契約致候。

見よや春大地もとほす地蟲さへ
と申句仕候。

といつて居るので明かである。併し自分の専ら志とする所は
急にしては親の貧を助け、緩にしては天下第一の畫工と相成可申一事に思を定め申候。

とある。殊に老母に孝を盡すことが何より大切と考へ、四十六歳にして退役を願つたのも全く其の爲であつた。即ち

然るに私一昨年より益疲勞仕り、何分にも不慮の病にても生じ可申様に存じ、昨年弟死後は猶更の儀に御坐候。萬一母より先に一大事にても出来候ては、死しても遊魂天に歸し申さず、せめて御退役の儀にても相願ひ候て一年にても保養仕度候。

といへるに依つて其の心事は悉されて居る。實に貴むべき人物である。

其の一家の貧を救ひ、親に孝養を盡したいといふ至情が凡ての善行の本であつたと思はれる。此の如く至誠至醇の心を以て畫道を究めたが故に、彼の如き名手ともなり得たのである。此の如き心を以て國家の將來を案じたるが故に、蘭學を修めて世界の形勢を究むるにも至つたのである。それは天性にも依るのであらうが、又一には平生修養に力を用ゐた結果とも見らるゝのである。其の座右の銘には先づ第一に

萬卷の書を読みて千里の路を行く。

とあり、それに續いて

一事を成さんと欲する者は必ず一事を省くべし。第一は汎交俗談を謝するに在り。第二は他

事を成さずして寧ろ己の欲する所を全うす。

とある。而してなほ之に次いで

一里の山を作るには一月を期し、十里の山を作るには一歳を期す。大學の修身齊家治國平天下皆期する所有り。小成に安んじて怠るは士の本意にあらず。

とあり、最後に

志拙ければ畫醜く心淺ければ畫俗なり。醜俗を去らんと欲せば萬卷の書を読むに如かず。

とある。其儘に大乘を學ぶ者の語と稱すべきである。其の田原に幽居中、椿山に與へたる書簡の中に、

大厄を踏み來り候へども心に疚しからざる故實は何とも存ぜず。

といひ、又

久しく風塵の中に交り、其の汚に染まざる事畢竟愚者の一得と存じ候。

といひ、更に

閑を求めずして身閑なり。静を求めずして心静なり。閑静は書畫を生ず。山静にして草木生じ入静にして思慮出づ。畫なるもの人に耻ぢず、天に背かぬ様に出来候はゞ願欲する所のも

の得らる可く候歟。何事も自ら致すより外は有之間敷、其上は天命に御坐候。とあるによつて平生其の自ら養ふ所の如何に厚かりしかを想像し得べきである。殊に面白く思はれるのは、

僕常に風趣を以て人に教へ申さず、所謂偽君子を鑄造致候なり。徹底の場相去ること益遠く相成候。

といへる一語である。畫を作るに一の線をも一の點をも忽にせぬやうに充分意を用ゐて、其の出來上つた畫に高さ風趣が具はるならば、それは上乘である。併し細密なる用意を教へずして、専ら風趣のみを説く時には、亂雑疎略の畫を以て風趣の高きものと爲し、眞面目に筆を運ばぬ者のみが多くなる。即ち徹底の場を去ること遠き者のみとなる恐れがある。佛敎の修行でも全く之と同様である。戒を守るなど、いふことは末節であるといつて、徒に高遠なる理想のみを説いて居ると、放逸不謹慎なる悪い習はしのみが養はれて、眞の道を距ること極めて遠き結果となるのである。華山の着眼はまことに敬服すべきである。

彼は高遠なる志を懷いて居たが、常に深く自ら省みること忘れず、溫良恭謙の人であつた。其の詠じたる歌に

取りつみて世をすみがまの煙たきは己がたきそふ薪なりけり

とある。天を怨みず人を咎めず、己が一身に凡ての責を負うて辭せず、眞に君子とは此の如き人をいふのであらう。彼が幕府を誹謗したといふ廉を以て禁錮せられたのは全く冤罪である。而も彼は之に對して一言も不平を漏さなかつた。而して其の田原に幽居中に屢々門人等と信書の往復をしたことが幕吏の窺ひ知る所となり、主家の累の及ばんとするを知つて、彼は自殺して死んだのである。其の子に遺したる書面には、

餓死するとも二君に仕へてはならぬ。厚く祖母に事へなければならぬ。汝の母は不幸の人であるから、常にいたはり慰むることを怠るな。汝の父は罪人であるから墓標などを立てはならぬ。

とある。而して自ら不忠不孝渡邊登の七大字を書して自刃した。彼は果して不忠不孝の人であつたか。

彼の父は多病であつて早く死んだが、彼の母は其の自殺の際まで生きて居た。それは實に健氣な婦人であつた。母は華山が自殺したと聞いても少しも狼狽せず、靜かに其の室に入つて華山が喉を刺して死んで居るのを見て、『是れは武士の作法に違つて居るが……』といつた。それ

からなほ委しく調べて見ると、華山は切腹して後に白布を以て其の痕を卷き、衣紋を正してから喉を刺したのであつた。母は之を見て莞爾として『これでこそ吾が見である』といひ、竊かに涙を拭つた。華山は自ら稱して不孝の子といつて居るが、彼の母は吾が子の壯烈なる最期を見て満足したのである。彼は決して不孝の子ではなかつた。又其の國家の將來を憂ふるの至誠よりして、海外の形勢を究めなければならぬといふ念を起し、同志と共に蘭學の研究に力を盡したのが幕府の嫌疑を招く元となり、終に累を主君に及ぼすことを恐れて自殺したのは、眞に國士として終始一貫したるものといふべきである。誰か彼を以て不忠の臣とする者があらう。華山は實に忠孝兩全の士でありながら、不忠不孝として自ら責め、身を殺して其の罪を償つたのである。孔子の高弟子夏は『賢を賢として色に易へ、父母に事へて能く其の力を竭し、君に事へて能く其の身を致し、朋友と交り言つて信あらば、未だ學ばずといふと雖も吾必ず之を學びたりと謂はん』といつた。華山の生涯の事蹟を見るに、能く菩薩道を實行したものと稱すべきである。彼は特に佛教に就て深く修行したといふことも聞えぬ。其の中年以後は佐藤一齋に就て學んだのであるから、大體陽明學が其の思想の根柢となつて居たのであらうが、其の行ふ所はよく菩薩道に一致して居る。まことに華山の如きは

未だ佛法を學ばずと雖も之を學びたりと謂つてよい者である。

多くの經論を読み、佛の大慈悲を説きながら、其の親に仕ふることも知らず、其の家を齋ふることも出来ぬものは之に對して深く自ら恥ぢなければならぬ。

此の渡邊華山の事蹟を見ると、彼の北條時宗の場合と同じやうに『心一つが凡ての本である』といふことが明かに分るのである。其の少年時代に家の貧を救つて親の心を安んじたいと思つた至醇の情が擴められて、國に盡すの大忠節ともなり、畫道に精進する心ともなつたものと思はれる。彼の事蹟は今に傳はつて居る。彼の筆に成つた畫も多く今に傳はつて居る。其の事蹟を知り、其の畫を見る時に吾等は大なる教訓を與へられ、吾等自身の心も淨く明るくなつたやうに感ずる。前に一度引いたこともあるが大集經の中に、

我淨ければ施度も亦淨し。施度淨きが故に願も亦淨し、願淨きが故に菩提も亦淨し、菩提淨きが故に一切の法亦淨し。

とあるは、如何なる場合にも應用せらるべき語である。吾等は心の根本から立て直さなければならぬのであるが、それには眼前の小事を輕んぜず、常に善を積み徳を成ずることに力を用ひなければならぬ。道元禪師が學道用心集の中に『佛道は必ず行によつて證入すべきこと』を説

して、俗に曰く、學べば乃ち祿の中に在りと。佛言はく、行ずれば乃ち證其の中に在りと。未だ嘗て學ばずして祿を得る者、行せずして證を得る者を聞くことを得ず。……若し學ぶに非ずして祿を受けば、誰か先王治亂の道を傳へん。若し行に非ずして證を得ば、誰か如來迷悟の法を了せん。識る可し、行を迷の中に立て證を覺の前に獲ることを。

といったのは如何にも吾等にとって良い教へである。證といふのは即ち證悟のことで、即ち佛の貴い道を悟ることである。佛の教へを如何に多く聞いても、又經論の類を如何に多く讀んでも、それだけで悟れるものではない。自ら之を實行して見て初めて悟れるのである。

例へば吾等の眼の前に如何に多くの美味が列ねてあつても、吾等はそれを眼に見ただけで其の味を知ることが出来ぬ。その味を知らんが爲には自ら之を口に入れて舌を以て味はなければならぬ。若し之を味ふべき舌がなければ美味の美味たる所はいつ迄も分らぬのである。出曜經の中に賢愚の別を説いて、

愚者は終身の間明智の人に事ふるも亦た眞の法を知らず。猶ほ食ヒの終日物を酌むも終に鹹酢を知らざるが如し。智者は須臾の間賢聖の人に事ふるも直に眞の法を了す。猶ほ口舌の一

端物に觸れて立どころに甘辛を知るが如し。智者は一句を尋ねて百種の義を演出す。愚者は千句を誦するも一句の義をも解せず。

とあるが、ヒには味覺がないから如何なる美味をも辨へ知ることが出来ぬ。多く讀み多く聞ても更に覺る所なき者も亦それと同様である。多くの事を知る者が必ずしも智者ではない。一文不通の者が必ずしも愚者ではない。假令極めて僅かなる語であつても、佛の貴い語をよく味つて其の意の在る所を知り、之を其の身に實行することに力を用ゆるものが即ち智者である。實行して見て初めて『成程此處だ』といふことが分るのである。道元禪師のいふ通り『行を迷の中に立て』得るならば必ず『證を覺の前に獲る』ことが出来るであらう。

迷とは凡夫である、覺とは佛である。

其の凡夫である間によく志を立て、佛の教へを實行しやうと心懸くるものは、能く佛の意の在る所を悟つて凡夫の境界を離るゝことが出来るのである。

共に佛性を具へて居ることを知ると共に、其の人其の人の天性なり境遇なり、乃至智解の度なり皆一々に異ふことをも知らなければならぬ。さうして自己の力量に應じ、自己の境界に應じて能く學び能く思ひ、能く之を實行することに努めなければならぬ。凡聖不二といふは平等

観である。凡夫も佛も共に佛性を具へたものであることは疑ひがない。凡聖相距ること遠しといふは差別観である。凡夫と佛とが天地ほど隔つて居ることは事實である。併し凡夫が自分の凡夫であることを知つて、佛の境界に近づくべく努め勵んで怠らぬ時には一步一步と佛の境界に近づけるのである。此處をよく捉へなければならぬ。自分は凡夫であるから如何に努めても佛や菩薩に近きものにはなれまいと、自ら輕んじ自ら侮るのは間違つて居る。さりとて少しばかりの智解を得たのに慢じて、佛も菩薩も自分とあまり異はぬものだと考へてもならぬ。卑屈でもならぬが又驕慢でもならぬ。天台大師が修行者に對して

凡に始まるが故に疑怯を除き、聖に終るが故に慢大を除け。

と説かれたのは最も良い敎訓である。此の事は前にもいつたが、此處に又繰返していはなければならぬ。佛も菩薩も皆元は凡夫である。即ち「凡に始まる」のである。それ故に自分は到底悟れまいなど、自ら疑つて卑怯な心を起すことなく、自分の如き凡夫でも努めて已まなければ菩薩ともなり佛ともなれるのであると確信して、毎日の行を勵むべきである。併し眞の聖者といふのは佛のことで、其處まで到達するのは容易なことでないから、少しばかりの智解を得たのに自ら慢じて、『モウ此邊で充分だ』などと、思つてはならぬ。自ら侮ると自ら慢ずるとは、共に

道に入るために大なる障りとなるものである。兩者は共に一方に偏つた者である。

自ら侮る者も自ら慢ずる者も共に愚者である。

愚者は大集經にある通り、千句を誦しても一句の意も分らぬものである。

同じ語でも幾たびか繰返して味ふ間に、次第に其の深さが加はつて来る。自分の此の拙い講述の中に於て、佛の語や聖賢の語を多く引いたが、同じ語が幾度も出て来る。併し語は同じ語であつても、其の深さが漸く加はつて来ることに注意されなければならぬ。佛の御心は終始一であるが、其の吾等に與へらるゝ所の敎へには種々の別がある。吾等が其の敎へを解する所の程度にもまた種々の等差がある。華嚴經の中に佛の説法に就て、

佛の證したまふ所の法は一なり。然も何が故に無量の刹土を現じ、無量の衆を化し、無量の音を演べ無量の身を現じたまふと問はゞ、答へていはん。地の性は一なれども衆生は各別に住す。地には一の異念もなきなり。又火の性は一にして能く衆の物を焼く。其の火焰には分別なきなり。又大海の水は一にして波濤は千萬の形に現はるゝも、水には別なきなり。又風の性は一にして一切の物を吹く。風には各別に吹くが如きの念なきなり。日に雲翳無ければ普く十方を照して光。明に異性なきが如く、諸佛の法も此の如し。

とある。佛は平等大慧をもつて法を説かるゝのであるが、其の教へは聽く者の機根に應じて説かるゝが故に千萬無量である。併し如何なる場合に於ても『一切衆生を皆佛にする』といふ大目的を達せんが爲の説法であるから、其の一言一句と雖も深く之を味ふ時には、吾等の具有する所の佛性を開發せしむべき力の無いものはないのである。

吾等の一生はあまり長いものではない。如何に長壽の者と雖も百年を過ぐる例は殆んどない。併し此の長からぬ一生の間に於て能く學び能く思ひ能く勤むれば、永遠の生命に關する大問題が解き得らるゝのである。若し何の爲す所もなくして空しく過ぐる者は、一日を送れば一日だけ死に近づくのみである。

一生空しく過して、得る所無からしむること莫れ。常に無常の火の諸の世間を燒くことを念ひ、早く自ら度せんことを求むべし。(佛遺敎經)

とは吾等にと取つて尤も適切なる戒めである。度するといふは煩惱の中を脱して、眞に意義ある生活に入ることである。草徑集の中に雲間の月を詠じたる歌、

今一重雲をいづれば雲もなき空なるものを知らぬ月かな

といふのがある。月に雲のかゝつて居るのを見ると如何にも悶かしく思はれる。あの雲を一つ

出離れてしまへば、雲のない空であるのに、月はさうとも氣附かずに、いつ迄も同じ所に居る。どうかして知らせてやりたいと、頻りにあせつて居る心が誠によく詠まれて居る。佛が吾等衆生を見そなはず御心も亦此の如くであらう。

されば佛は折にふれて種々の譬喩を設け、手近い事柄を縁として吾等の努力を勧め、吾等の懈怠を戒められた。或時釋尊は一人の道人と共に樹の下に憩はれたが、水の中から龜が這ひ出して其の樹の方へ近づいて來た。時に樹の側に一の水狗があつて食を求めて居たが、彼の龜の近づくのを見て之を噉はうとした。龜は直に其の頭と尾と四の脚とを甲の中へ藏してしまつたので、水狗は噉ふことが出來ず、遠くへ離れて行つた。そこで龜は又脚を出して歩き出した。水狗が之を見て又近づくと、龜は又直に甲の中へ藏れてしまふ。斯ういふことを幾度か繰返して居るうちに水狗はとうとう諦めて立去つたので、龜は其の生命を全うすることが出來た。釋尊は彼の道人を顧みて『世の人は此の龜に如かず。無常を知らず六情を恣にして外魔に乗ぜらる』と諭され、また偈を説いて、

六を藏すること龜の如くにし、意を防ぐこと城の如くにせよ。慧と魔と戰ひて、勝てば則ち患無し。

といはれたので、道人は自分の平生を振返つて見て大に悟る所があつたと。是れは法句經の中に出て居る。

又或時數人の弟子と共に牧場の側を通過された。此の牧場の主は千頭の牛を養ひ、充分に草を與へて能く肥え太らせ、日に一頭づつを殺して其の肉を賣つて居たが、その時既に五百の牛を殺してしまつた。併し残りの五百頭は自分もやがて殺さるべき運命をもつて居ることに氣附かず、跳り上つて面白さうに戯れて居た。釋尊は之を見て弟子達に向ひ、

此の牛愚痴にして伴侶盡きんとするも方に共に戯喧す。人も亦是の如し。一日過ぎ去れば人命轉た滅す。思惟して度世の道を勤め求めざるべからず。

と仰せられたので、弟子達は皆感悟した。これは阿育王譬喻經に出て居る話である。

又出曜經の中には有名なる『山海空市何れも死を防ぐことは出来ぬ』といふ話が出て居る。昔四人の梵志があつて（梵志とは遁世して道を求むる者のことである）相集つて語りあつたが、『死の來るや豪族をも避けず、我等今より隠れて死を避けん』といつて其の一人は高く空中へ登つた。次の一人は大海の中に入った。次の一人は須彌山の中に入った。他の一人は故らに騒がしい市の中に住んだ。併しながら山海空市何れに住む者も皆久しからずして命終つて死ん

だ。佛は此の事を説いて、『人々皆限りある生命であるから一日をも空しうせずして道を求めなければならぬ』と教へられた。此等はたゞ一二の例であるが佛が無常を説かれたのは吾等をして失望せしめんが爲でなく、吾等に此の無常なる世に在つて常住の道を求めしめ、限りある一生の中に於て限りなき生命の問題を解くことを得しめんが爲であつたのである。生物も多くある中に吾等は人と生れたのである。而も多くの人の中に於て吾等は佛の教へを聽くことが出來たのである。吾等は此の幸を空しくしてはならぬ。賀茂真淵の歌に、

たまたまに人とある世を憂き時はそむかまほしと思ふはかなさ

とあるが、實際累ひの多い世の中であるから、世を遁れたいといふやうな氣も時には起るものである。併し其の累ひの多い中に於て自己を鍛へてこそ福を積み徳を成ずることが出来るのである。吾等が日々に遭遇する瑣事を處理して居る間にも、吾等の具有する佛性が漸くその光りを發して行くのであると思へば、吾等はいつも感謝の念を以て其の累ひ多き中を通らなければならぬ

六、佛と佛弟子

吾等は佛の在世を距ること二千數百年の後に在つて、親しく佛の御教へを聴くことの出来ぬのが如何にも残念に思はれる。併し佛の遺されたる法は儼として今に存するのである。吾等が誠心を以て此の法を究むるならば、たとへ佛に値ひ奉らずと雖も、値ふと異なる所はないのであらう。釋尊は末世に出て佛法を弘むる者を稱へて、

當に知るべし是人は如來と共に宿するなり。(法華經法師品)

と仰せられ、又其の吾等に遺されたる法に就ては、

此の中には已に如來の全身有す

と仰せられた。印度では昔から多くの人に崇め尊ばれるだけの徳のある人が死んだ時には、其の遺骨を埋めた處へ塔を建て追慕の意を表する習はしであつた。然るに釋尊は其の吾等に遺されたる法が混びずして世に弘まりさへすればそれで満足であるとして、

復た舍利を安んずることを須めず

と仰せられた。佛恩の洪大なるに感激するものは唯だ専ら此の貴い法を其の身に實行し、また之を世に弘むることに力を用ゆべきである。此より外に報恩の途はない。

支那の昔の傳説に孔子が、青年時代に周に行つて老子に禮を問はれたといふことがある。其

の時に老子は之に對して、

子の言ふ所は其の人と骨と皆己に朽ちたり、獨り其の言の存するのみ。……吾之を聞く、良

賈は深く藏して虚しきが如く、君子は盛徳ありて容貌愚なるが如しと。子の驕氣と多欲と、態色と淫志とを去れ。是れ皆子が身に益なきなり。吾が子に告ぐる所は是の如きのみ。

といつたといふ事である。是れは後世に至つて涅槃した話で、事實ではないやうである。併し此に所謂老子の言は大に味ふべきである。人に知られやうとか世に持囀されやうとかいふ念があつては道を學ぶことは出来ぬ。又古人の説いた所の形貌のみを學んだのでは、眞に其の道を學ぶ者とはいはれぬ。吾は信仰のある者であるとして、人に誇示するやうな心では、いつ迄も凡夫の境界を脱することの出来やう筈はない。西洋でも耶穌教の信者の中には『自分は耶穌の教へによつて、自分が罪の子であることをよく知つて居る。世間の人は多くの罪を犯しながら其の罪を自覺せぬけれども、自分は充分に之を自覺して居る』と口癖のやうにいふ人も少くない。詩人クーバーは此の如き人を評して
彼等は自分が謙遜であるといふことを誇つて居る。
といつた。まことに皮肉な語であるが、痛快である。

吾等は貴い佛の敎へを信じて、之を吾等が日々の行ひの上に實現することを身の悦びとすべきである。自分の智解に誇るといふやうなことが些かなりともあつてはならぬ。如何に多くの事を知つて居ても、自分で實行の出来ぬことを人に向つて説き誇るべきではない。釋尊の吾等に遺されたる敎への貴いのは、それが唯だ敎へとして完全無缺であるからといふだけではない。それが釋尊の御實行になつたことを説かれたのであるから貴いのである。

釋尊御一代の御事蹟がその儘に最も貴い説法である。

釋尊は御自身に實行せられなかつたことを一つでも説かれたことは無い。されば昔から釋尊御一代の事蹟を八相と稱して語り傳へて居る。御一代の事蹟を細くいへば限りもないが、之を大別して八相といつたのである。

釋尊は前にもいつた通り淨飯王の子として御生れになり、八十歳にして御入滅になつたのであるが、其の八十年の御生涯を大別して所謂八相としたので、それは

- 一に降兜率。
- 二に入胎。
- 三に出胎。
- 四に出家。
- 五に降魔。
- 六に成道。
- 七に轉法輪。
- 八に入滅。

をいふのである。(是れは天台大師の分け方に従つたのであるが、大乘起信論に於ては、入胎の

次に住胎を加へ、降魔を省いてある。)先づ降兜率といふのは、釋尊は以前に兜率天に住せられたのであるが、此の娑婆世界に生を享くべき時機に逢つたので、白象に乗じて天より降られたといふのである。兜率といふのは上足とか妙足とかいふ意で、即ち一切の苦勞を離れたる所といふことである。印度の古代に於て信ぜられたる所に依ると、これは種々なる善き行ひを積んだ人が其の報として生を享くべき所である。此の兜率天より娑婆世界へ降られたといふのが即ち佛の佛たる所以である。前にもいつた通り娑婆とは堪忍の義である。此の世は種々の苦に充ちて居て、堪忍しなければ到底住むことの出来ぬ所である。

苦の無い所から苦の多い所へ態々降られたのが即ち佛である。

佛の出現は一切衆生を救はんが爲に外ならぬ。一切衆生を救ふためには有らゆる苦を忍ばなければならぬ。佛は其の苦に甘んじて、唯だ一切衆生を救はんことをのみ志とせらるゝのである。斯ういふ思想は儒敎の方にもある。古の賢人伊尹は有莘の野に耕し、獨り其の道を樂んで、當世に求むること無く、湯王が三たびも使を遣はして招聘したけれども、出て仕ふることを肯んじなかつた。併し暫くして自分の考への足らなかつたことに心附いた。さうして

我吠叡の中に處りて是に由りて堯舜の道を楽しまんよりは、吾豈に是の君をして堯舜の君たら

しむるに若かんや。吾豈に是の民をして堯舜の民たらしむるに若かんや。吾豈に吾が身に於て親しく之を見るに若かんや。天の此の民を生ずるや、先知をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむるなり。予は夫の民の先覺なる者なり。予將に斯道を以て斯民を覺さんとす。予が之を覺すに非ずして誰ぞや。

といひ、湯王の爲に宰相となり力を國政に盡したといふ。道を學ぶ者は誰も皆此の志がなければならぬのである。

又釋尊が白象に乗つて兜率天から降られたといふのであるが、白色は眞理を現はすのである。されば普賢菩薩も白象に乗つて居ると傳へられる。例へば法華經の勤發品には普賢が大乗を信ずる者の前に現はるゝことを説いて、

我爾時に六牙の白象王に乗じ、大菩薩と俱に其の所に詣りて自ら身を現じ、供養守護して其の心を安慰せん。

とある。白象に乗つて身を現じ、大乘を信ずるものを安慰するといふのは、自身に完全なる智力を具へて、絶對の眞理を明かに覺れるが故に、之を彼に傳へて、彼の心に安慰を與ふるとの義である。釋尊が白象に乗つて此の娑婆世界に降られたといふのもそれと同じ意味である。即

ち釋尊は絶對の眞理を吾等に傳へ、吾等の苦を除き吾等の惑を除かんがために此の世に出現したまへる者である。

次に入胎とは摩耶夫人の身に宿られたこと、出胎とは四月八日に誕生せられたことである。釋尊が吾等と同じ土の上に、吾等と同じく人の兒として御生れになつたことが吾等には何よりも有難いのである。譬へば空に七色の虹の橋が懸つて居るのを見ると誠に美しい。併し吾等は唯だそれを美しいと仰ぎ見るだけである。如何にしてもそれに近づくことは出来ぬ。然るに富士の山は高く天際に聳えて居るけれども、その絶頂は吾等の踏んで居る地面と續いて居る。吾等は此處から一步二歩と歩を運んで、やがて其の絶頂に到達することが出来るのである。若し佛が空に懸つた虹の様のものであつたなら、吾等はそれを仰ぎ見て驚歎するより外はないであらう。さうして吾等が餘りに遠くそれと隔つて居ることに失望を感じずるのみであらう。然るに吾が釋迦牟尼佛は富士の高嶺の如き佛である。これが吾等に取つては何よりも有難いことである。釋迦牟尼佛は淨飯王の子として印度に生れ、吾等と同じ様に人生の問題に就て疑惑を起し、その疑惑を解くことが出来ないで種々に苦悶し、種々の難行苦行を積んでやうやくに其の解決が出来て之を吾等に傳へられたのである。而して

其の覺られたまでの道程を最も明かに吾等に示して居られることが何よりも有難い。此の如きは他の宗敎を開かれた人々に於て全く例の無いことである。

耶蘇はガリラアの貧しい大工の兒として生れ、此の世の凡ての人を救ふために神によつて此の世に送られたといふ自覺を得て、凡そ三年の間説敎して、磔にかゝつて其の生涯を終つた。其の吾等に遺された教へは極めて貴いものである。(自分なども若し佛敎といふものが無かつたら、多分耶蘇敎徒になつて居たことであらうと思ふ。)併し其の神の子としての自覺を得たまでの徑路は明かに示されて居らぬ。其の少年時代からイスラエル人の間に傳はつた歴史や傳説を熱心に研究したことは分つて居る。又豫言者ヨハネの説法を聽いて感激したこともよく分つて居る。けれども大工の兒が救世主としての自覺を得るまでの徑路が明細には示されて居ないのである。又マホメットは幼年の時から孤兒となつて具さに艱苦を嘗め、三十を過ぎてから冥想到に耽るやうになり、終に神によつて此の世に送られた者だといふ自覺を得てイスラム敎を創めたのである。併し彼は此の如き自覺を得るまでに通つて來た思索の徑路を少しも吾等に示して居ないのである。孔子は三十歳の頃から教へを説き初め、七十三歳にして世を終るまで懇に教へて倦まず、儒敎の祖として仰がるるのであるが、定まつた師といふものは無く少年時代か

ら非常に苦心努力して、殆んど獨力を以て先王の道を究められたものと思はれる。併し如何なる疑問に就て最も多く苦しんだか、如何にして其の疑問を解いたかといふやうなことに就て、孔子は殆んど何事をも吾等に語らぬのである。然るに獨り釋尊のみは

凡夫から佛になるまでの苦心努力の跡を委さに吾等に説き示して居られるのである。

而して吾等に對して、『自分の指示した道を、自分の歩いた通りに歩いて來れば、人によつて遅速はあるにしても後には必ず自分と同じやうに佛に成れるぞ』と告げられたのである。吾等に取つて是れ程有難いことは無い。

實に佛が人の子としてお生れになつたといふ一事のみを考へても、吾等は限りなく洪大なる敎訓を受けたことを感ずるのである。續いて其の出家といふ事が又吾等に極めて大なる敎訓を與へる。其の出家前後の事情に就ては前に一通り述べたから此處に繰返すことを避けやうが、其の太子たる地位を棄て一平民となつて學者の門を叩き、其の教へを受けやうといふ決心は實に立派なものである。高い地位に在る人には兎角驕慢の念が起り易い。日々に耳に入るものは稱讚の聲のみであつて、耳に逆ふ忠言を述べやうとする者は極めて稀である。されば張蘊古が

『大寶箴』の中に、

普天の下に主として王公の上に處り、土に任じて其の求むる所を貢せしめ、寮を具へて其の
 倡ふる所を陳せしむ。是故に恐懼の心日に弛み邪僻の情轉た放なり。
 といつたのは、獨り王者のみならず、凡ての地位と權勢とを有する者に尤も適切なる訓戒であ
 る。

法華經の譯者として知られて居る鳩摩羅什は龜茲國の人であるが、その父鳩摩羅炎は元來印
 度の人で、龜茲國へ來て國王の妹を娶り羅什を生んだのである。羅什は幼年の時から極めて聰
 明であつたが、國王の妹の子であるから其の生活も至て裕であるし、又常に多くの人の尊敬を
 受けて居た。母は殊に賢婦人で、吾が子が後に必ず立派な人物となるべきことを知つて居たが
 餘りに其の境遇が良い爲に心が驕つて、其の聰明なる天性を損ふに至らんことを恐れ、
 羅什を伴つて辛頭河を渡つて隣國に移り住み、後之に勸めて印度に遊學せしめた。羅什が大乗
 の教へを弘むる爲に偉大なる功勳を樹つることの出來たのは、其の非凡なる天分にも依るが、
 一には母の教育の賜といふべきである。彼をして其の得意の境遇に久しく居らせたら、或は彼
 の如くに大成せずして終つたかも知れぬ。流石に釋尊は御自身に其の高い地位を棄て、一平民
 となつて學者の忌憚なき説を聽かうと思ひ立たれたのは、誠に貴いことである。

而も出家の志はありながら親や妻に歎きをかけるに忍びぬ爲に、二十九歳まで王宮の生活を
 續けて居られたといふは、如何にも優しい心である。斯くあつてこそ、一切衆生を救はんが爲
 に絶えず苦心せられたことが一層貴く思はるゝわけである。其の出家を斷行せらるゝに當つて
 も決して親や妻や臣下のことを考へられなかつたのではない。即ち前にもいつた通り、自分が
 修行を積んで人生の眞の意義を知り得たなら、之を親にも妻にも臣下等にも傳へて、彼等をし
 て共に意義ある生活に入らしめやうと考へられたので、一時歎きをかけても、後に至つて之を
 償ふことが出來るといふ確信が出來て、出家を斷行せられたのである。

一切世間恩を知りて恩に報ずる、佛に過ぎたる者なし。
 と般若經にいつてある。又眞の孝道に關して次の如くに説いてある。

若し父母無信ならば信心を起さしめ、若し無戒ならば禁戒に住せしめ、若し性慳ならば惠施
 を行ぜしめ、若し智慧なき時は智慧を起さしむ。子能く是の如くにして方に報恩といふを得
 べし。(毘奈耶律)

眞の孝行とは親の心を安んずることである。されば親に人生の眞の意義を教へて、眞の安心を
 與ふるをこそ眞の孝行といふべきである。又妻や子に衣食の不足を感じしめぬのみが夫たり親

たる者の情ではない。妻にも子にも人生の眞の意義を教へて、毎日を満足して送ることの出来るやうにしてやつたなら、初めて眞に頼もしい夫であり、有難い親であるであらう。釋尊の出家は恩愛に背いての出家ではなく、恩愛を全うせんが爲の出家であつた。佛法を學ぶ者は先づ此の事を充分に考へて置かなければならぬ。人倫を無視したる信仰は佛の御心に叶はぬものである。

釋尊は出家の後六年を経て成道の日に達せられたのであるが、最初は多くの學者に就て其の教へを受け、種々の苦行をせられたのである。併しそれは人生の大問題を解決すべき力のないものであると見究められて、尼連禪河の東岸に庵を結び乞食生活をしながら、獨り冥想到に耽つて居られた。難行苦行を経ずして悟ることの出来るものではない。何事でも努力せずして成功するといふことは無いが、殊に人生の大問題を解かうといふやうな事が、さう易々と出来やう筈はない。世間には多くの書を讀み、或は多くの人の説を聽きそれを唯だ比べ合せて一種の人生觀を立て、「自分は悟つた」と思つて居る人も少くないが、唯だ多くの事を知つたばかりで悟れるものではない。何の苦心も努力もせず、暇があつたから書物を見た。暇があつたから人の説も聽いたといふくらゐの事で人生に對する徹底的の考へが定まると思ふのは大なる間違ひである。

ある。暇があるから面白半分にやるといふは

畢竟戲論にすぎぬものである。戲論をいかに久しく續けて居ても、凡夫は元の凡夫である。

要するに眞面目なる努力が缺けて居ては良い結果の得られるものではない。大日經疏には斯る徒を評して、

散亂の心を以て種々の身口を動作し、但だ前人を悦ばしめて而も實義無し。

といつてあるが如何にも痛快である。前人を悦ばすといふのは、多くの人を相手にして、其等の人の稱讚を博し喝采を受くることである。世間の人は概して深い事を考へて居ないのであるから、其等の人をアツと言はせるぐらゐの事は別に困難ではない。併しそれは意義のない事である。即ち實義無きことである。

釋尊は人生の眞の意義を明かにし、自ら活さがひのある毎日を送ると共に、多くの人に其の覺り得たる所を傳へて、共に活さがひのある毎日を送らせたいと思つて苦心努力せられたのである。されば最勝王經には

唯だ獨り如來のみ實際の法を證したまふ。戲論永く斷ゆるを名けて涅槃と爲す。

といつてある。實際の法といふのは即ち人生の眞の意義である。萬有の存在する所の根本の原理である。それは戯論によつて知り得らるべきことでは無い。如何に多く讀んでも多く聽いても、其等を比べ合せて深く考へて見れば種々の疑問が起つて来る。その多くの疑問を自分で解くより外に誰も解いてくれるものは無いのである。是れは決して樂な事ではない。難行苦行といふのにも外的のものと内的のものがある。斷食をするとか、睡らずして夜を明すとか、火に入るとか水に入るとかといふのは外的の苦行である。其等も身心を鍛錬するのに役に立つものには違ひないが、其等の事を唯だ續けて居さへすれば悟れると思ふのは間違ひである。釋尊は此處を觀破せられて内的の苦行に移り、六年を過されたのである。是れは非常なる勇氣といはなければならぬ。中庸に『或は生れながらにして之を知り、或は學びて之を知り、或は困んで之を知る。其の之を知るに及びては一なり』とあるのを朱子が註して、

困知勉行は勇なり。……生知安行の資を企て幾及すべからずと爲し、困知勉行を輕んじて成す有ることを能はずと謂ふ。此れ道の明ならず行はれざる所以なり。

といつて居るが誠に道理ある語である。困んで知るといふ勇猛心がなくては何事も成就するものではない。釋尊が六年に亘つて冥想を續け、苦心努力の結果成道を得られたのは、まことに

貴いことである。吾等は仰いで之を範としなければならぬ。其の苦心努力は唯だ一切衆生を救護すべき力を得んが爲であつたのである。無量義經を讀むと、靈鷲山に集つた諸菩薩が釋尊の非常に久しい間苦行を積まれたことを共に稱へて、

是故に今自在の力を得て。法に於て自在にして法王と爲りたまへり。我復た咸く俱に稽首して、能く諸の勤め難きを勤めたまへるに歸依したてまつる。

といつて居る。

さて六年の努力が酬ゐられて愈々成道となるのであるが、其の成道の前に降魔といふことがある。これは獨り佛法に於てのみならず、世間一般の事に於ても能く考へられなければならぬことであるが、何事を爲しても今少しで成就するといふ場合になつて心が緩むものである。久しく旅をして居た人が自分の家へ歸る時に、家が眼の前に見えて來ると、自然と急ぎ足になる。今迄は久しい間辛抱して居たが、モウ少しといふ所で辛抱が出来なくなるのが人情の常である。輕業師が小さい兒を仕込んで、高い竿の上へ登つて種々の藝をさせる。其の藝を一通り終つて、竿を下る時になつて『シツカリしろ』と聲をかけるのである。それは終りになつて心の緩むのを戒める爲である。此の心の緩みが即ち魔である。

此處で心を引締めて魔に打克てば、何事でも成就するのである。

釋尊の降魔の圖といふものが傳はつて居るが、それは惡魔が釋尊の成道を妨げやうとして、或は鬼の姿となつて之を脅し、或は美女の姿となつて之を誘惑せんとするのを、釋尊が盡く叱咤して追ひ拂はれるさまを寫したものである。併し是れはたゞ標象的のものにすぎぬ。眞の惡魔は心の中に在るのである。智度論には魔といふ語を『命を奪ふ者』と解し、更にそれを説明して、

智慧の命を奪ふ、是故に殺者と名く。

といつてある。玄應音義には

此に翻して(梵語を漢語に翻譯してといふ意である)障と名く。能く修道の爲に障礙を爲すが故なり。

とある。要するに成道の妨げとなる所の種々の惑が即ち魔である。淨土修證儀には、佛法に於て深く修行を積んだ人のことを説いて

清淨の功德を以て境と爲すが故に永く魔事を絶す。心に邪念なければ則ち聖境現前し、光明發顯す。

とある。惡魔を拂ひ盡したとは、即ち心に全く邪念がなくなり、清淨になり盡した有様をいつたのである。

求むる所は唯だ人生の眞意義を知ることである。絶對の眞理を捉へることである。此より外に何事をも想つてはならぬ筈である。併し釋尊とても人であるから、種々の追憶や種々の想像が其の心の中に湧き起つたことであらう。王宮を忍び出て後、父の王から使が来て父や妻の歎き悲しんで居るさまを具さに訴へたが、其等の事も心に浮んだであらう。又其後六年の間種々様々の難を忍び苦を嘗めたことも今更の如くに思ひ浮べられたであらう。尙又今より世間に立つて道を説く時に、讚歎し歸依する者の少からず有るであらうといふことも豫想されたであらう。併しながら多くの迷へる者に對して正しい道を説くのであるから、種々の迫害にあふことも勿論豫想されなければならぬ。此等の様々の念が一切掃ひ盡されて、専ら思惟を續けられ、十方無量世界を觀じ、三世を觀じ、三世を貫ける因果を觀じ、所謂一切種智を得られて、

此の三界は皆我が有なり。其の中の衆生は悉く吾が子なりと覺知せらるゝと共に、

悉多太子は釋迦牟尼佛と成られたのである。

なければならぬのであるが、迷ひの底に沈んで居る一切の人を教化することは難中の至難である。それには種々無量の方便を用ゐなければならぬ。それ故に釋尊は成道後三七日の間、如何なる方便を用ゐて教化の實を擧ぐべきかに就て考察せられたのである。法華經方便品の中に於て釋尊は其の當時のことを説いて、

我始め道場に坐し、樹を觀じ亦經行して、三七日の中に於て是の如き事を思惟しき。我が所得の智慧は微妙にして最第一なり。衆生の諸根鈍にして樂に著し癡に盲られたり。斯の如き等類如何してか度す可きと。

とあり、假令眞實の事を説いても信ずる者は容易にあるまいと考へて、我寧ろ法を説かずして疾く涅槃にや入りなまし。

とさへ思はれたが、又思ひ直して、種々の方便を以て漸次に教へ導かうと決心せられたといふ。此の決心がつくと共に、

是の思惟を作す時に十方の佛皆現じて、梵音をもて我を慰諭したまふ。善哉釋迦文、第一の導師。是の無上の法を得たまへども、諸の一切の佛に隨ひて方便力を用ゐたまふ。

といふ如く、方便を以て漸次に教へ導いて、結局眞實の道を覺らせるのが即ち佛の慈悲である

と思ひ定められたのである。其の方便の教へは種々無量であるが、大別すれば三種となる。即ち所謂三乗である。併し結局は菩薩道を行じて佛と成ることが目的である。即ち

復た三乗と説くと雖も但だ菩薩を教へんが爲なり。

といふのが佛の御本意である。

釋尊は此の覺悟を以て再び世間に立戻り、此より御入滅に至るまで四十餘年の間一日も怠らずに説法をせられたので、此の事を方便品には

萬億の方便を以て宜しきに隨ひて法を説きたまふ。

といつてある。佛の説法せらるゝことを轉法輪といふのであるが、其の輪といふ名は轉輪聖王の感得したる輪寶に比するのである。轉輪聖王のことは前にも概略いつたが、最も高德の王が世に出現した時には天より之に輪寶を授けらるゝといふことが古代の印度人の間には信ぜられて居たのである。輪聖王は此の輪寶を奉じて天下を巡り、一切の敵を破摧して天下を平にするのである。佛も亦此の如く、常に正法を説いて一切の人の惑を破り、皆共に正しき道に入らしむるのである。妙樂の止觀輔行には此の意を説いて、

輪には二の義を具す。一には轉ずるの義なり。二には摧破の義なり。四諦の輪を以て轉じて

他に度與し、結惑を摧破すること王の輪寶の能く壞り能く安んずるが如し。といつてある。又嘉祥の書いた法華義疏の中には、流圓演通して一人に繋はらず、故に稱して輪と爲す。累として摧かざる無し亦是れ輪の義なり。

とある。一人に繋はらずとは、即ち千萬人を通じて守らるべき教へといふ意である。累として摧かざる無しとは、即ち一切の煩惱を打ち破ることである。天台の法華文句には、佛の心中の化他の法を轉じ、度して他の心に入る、を轉法輪と名く。とある。即ち佛が悟りたまへる所を説かれて、他の凡ての人を、感悟せしめ、其の有らゆる惑を除かるゝことである。

釋尊の轉法輪は四十餘年に亘り、聽く者の機根に應じてそれ／＼に適當なる教へを興へられたのであるが、其の聽く者の種類は老若男女貴賤尊卑の別なく、殆んど人間の凡ての階級を網羅して居る。其の徳に感じて絶對に歸依した者は固より多かつたが、迫害の數も亦決して少くはなかつた。その中で殊に大難とも稱すべきものが九度もあつた。或は石を推し落されて生命を失はうとせられたこともある。或は厳しい寒さ暑さの爲に御身を痛められたことも幾度かあ

る。或は罵られ或は譏られ、有らゆる艱苦を凌ぎつゝ、貴い教へを弘められたのである。併し斯る艱苦にあふのは豫て覺悟のことであつたから、少しも驚かれなかつた。若し世間の人の意を迎へて説くならば、多くの歸依者を得ることは決して困難ではなかつたであらうが、釋尊は飽くまでも正しい道を説いて世間の人達を覺醒せしむることに努めらるゝと共に、其の弟子達を戒めて、

慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり。……彼が爲に惡を除くは即ち是れ彼が親なり。——

涅槃經
と仰せられ、有らゆる艱苦を物ともせずして正法を弘められた。是れ皆一切衆生を吾が子と視たまふ慈悲心に出るものである。

無量義經の中には大莊嚴菩薩その他多くの人が釋尊を讚歎せんが爲に胡跪合掌し、一心に聲を同うして偈を説いたことが記されてある。その偈の始めには、
大なる哉大悟大聖主、垢無く染無く所著無し。天人象馬の調御師、道風徳香一切に薰ず。云々。

とある。此の『天人象馬の調御師』といふのは釋尊の説法の自在なることを稱へたのである。

印度に於ては馬と象とが人を乗せたり車を挽いたりするために使はれたのであるが、其の象や馬を訓練するのは御者の役である。釋尊は最も巧なる御者の如くに有らゆる人々を教へ導いて、皆正法に歸依せしめられたのである。法句譬喻經に依れば、或時釋尊は象師に向つて、野生の象を訓練する方法を問はれた。象師は之に答へて『其の方法は三つあります。それは先づ強い鐵の鈎を象の口に鈎けて、之に絆をつけます。次には食物を多く與へないで常に飢えさせて置きます。第三には杖を以て之を打つて痛みを與へます。鐵の鈎によつて口の強さを制し、食物を少くすることによつて身の強さを制し、杖を以て打つことによつて其の心を伏するのであります』といつた。釋尊は之を聞かれて

吾も亦三法ありて一切の人を調へ、亦自ら調へて無爲に至ることを得しむ。一には至誠にして口業を制御す。二には慈貞を以て身の剛強なるを伏す。三には智慧を以て意の癡蓋を滅す。此の三事を以て一切を度脱し、三惡道を離れて自ら無爲なるを致さしむ。

と仰せられたとある。無爲とは即ち煩惱の無くなつた境界をいふのである。釋尊が一切の人をして、身口意の三業に於て悉く過無きに至らしめんと努力せられたのは、眞に感歎すべき事である。

其の説法の自在にして悉く聽く者の機根に適して居たのは、其の大慈悲心が元となつて居たからである。『大學』に

心誠に之を求むれば中らずと雖も遠からず。未だ子を養ふことを學びて而る後に嫁する者有らず。

とある。鄭玄は之に註して

子を養ふ者心を推して之を爲せば、赤子の嗜欲に中るなり。

といつた。子を養ふことの經驗を積んでから嫁入する者はないが、嫁入してから子を生めば、その子に對する愛情が起るから、養育の仕方を様々に工夫して能く育て、行くことが出来るのである。心を推すとは自己の誠心を推して其の子に及ぼす意である。佛の説法の無礙自在なるも亦之と同じ理である。佛は特に雄辯術を研究されたわけでもなく、又故らに聽く者を喜ばさうとして説かれたわけでもないが、如何にもして一切衆生を救護しやうといふ御心が即ち發して無礙の大雄辯となつたのである。後世に至つては、衆生を救はうといふ慈悲心をもたぬ者が、たゞ聽く者を感動させやうといふ目的で種々に辯術を研究するのであるが、其の術の最も巧なものは一時聽く者の喝采を博することは出来るけれども、永く其の心に印象を留むること

は出来ぬ。返す返すも凡ての根源が心一つであることを忘れてはならぬのである。

八相の最後として擧げられたのは入滅である。釋尊は八十歳の二月十五日の夜を以て拘尸那城外なる醯蘭若河の畔に於て入滅せられたのである。其の最期に近くまで説法を續けられたことは前にも述べたが、世を導き人を救ふことを吾が天職と信じたまへる御心が終始一貫少しも渝らなかつたのは眞に尊ぶべきの至である。此の入滅といふ一事が吾等に與へられたる最大の教訓であることは、法華經壽量品の中に譬喩を用ゐて極めて懇に説かれてある。即ち有名なる良醫の喩である。一人の智慧聰達なる名醫があつて多くの人の病を救つて居たが、或時用事が出来たので、多くの兒等を其の家に殘して遠方へ旅立した。兒等は父の不在中に誤つて毒藥を飲み、頻りに苦惱して居たが、其處へ父が歸つて來た。兒等は父の姿を見て大に喜び、毒を除くべき藥を與へんことを乞うた。父は早速に藥を調合して、

此の大良藥は色香美味皆悉く具足せり。汝等服す可し。速に苦惱を除きて復た衆の患無けん。

といつた。兒等の中には直に之を服して健康を回復した者もあるが、之を服することを嫌つた者もある。經文には其の理由を説明して、

毒氣深く入りて本心を失へるが故に、此の好色香ある藥に於て美からずと謂へり。とある。如何に良い藥でも、飲む心がなければ其の効は現はれぬわけである。

父は彼等が全く本心を失つたのを見て深く之を憫み、何とかして此の藥を服せしむべき方法を講じなければならぬと考へた。そこで再び旅の用意を整へて其の家を去るに當り、兒等に向つて、

是の好き良藥を今留めて此に在く。汝等取りて服す可し。差えずと憂ふること勿れ。

といひ置いて他國へ赴いた。さて他國より使を其の家へ遣はして『汝の父已に死しぬ』と申送つた。之を聞いた諸子は驚き且悲み『若し父が居たなら常に我等を憐んで救護を與へられたであらうが、今は父を失つて誠に頼りの無い身の上になつた』と思つて、今迄父の命に背いて居たことが大なる罪であつたと初めて氣がつき、父の與へた藥を服用した。即ち經文には、常に悲感を懷きて心遂に醒悟し、乃ち此の藥の色香味の美きことを知り、即ち取りて之を服するに毒の病皆癒ゆ。

とある。父は兒等が皆健康になつたと聞いて直に家に歸り、親子再び對面して共に喜んだといふのが話の大略である。

此の譬喩に於て父の名醫は即ち佛のことで、其の諸子とは即ち吾等凡夫のことである。良き薬といふのは大乘の教へのことである。諸子が毒薬を飲んで苦惱に陥つたといふのは、吾等の心が煩惱に昏まされて居るために、此の世に苦みの絶えぬことである。此の薬は名醫の調合したる最良の薬であるから、之を服しさえすれば如何なる病でも癒えぬといふことは無い。即ち「速に苦惱を除きて復た諸の患なけん」とある通りである。併し之を良き薬と思はずして、服用することを嫌ふものが多い。若し大乘佛教を信じて之を實行する者が多くなれば、世間の有らゆる難問題の解決は必ず出来るのであるが、之を信ぜんとする者の甚だ少いのは、即ち「毒氣深く入りて本心を失へるが故」である。さて此の父が他國へ行つて、使をして「汝の父は死んだ」と其の諸子に告げしめたといふは、即ち釋尊の入滅に譬へたのである。釋尊は此の譬喩を説かれると共に、自らその入滅の意義を説明して、

若し佛久しく世に住せば、薄徳の人は善根を種えず、貧窮下賤にして五欲に貪著し、憶想妄見の網の中に入りなん。若し如來は常住にして滅せずと見ば、便ち憍恣を起して厭怠を懷き、遭ひ難きの想と恭敬の心とを生ずること能はず。

と仰せられた。佛には何時でも逢ふことが出来る、佛の教へは何時でも聽くことが出来ると思へば、謹んで之を聽く氣が起らぬのである。これが凡夫の常である。然るに佛は吾等を捨て入滅せられ、再び親しく其の教へを聽くことが出来ぬとなれば、初めて平生怠慢に過ぎた罪を覺り、一心になつて佛の遺したまへる教へを學ばうといふ氣も起るのである。其の結果として衆生既に信伏し、質實にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜ま

ず。

といふやうにもなり得べきである。それは彼の名醫の兒等が父の死を聞いて、初めて父の處方の薬を飲む心が起つたのと同様である。

父は其の子を覺醒せしめんが爲に遠い旅へ出たのであるから、その子が薬を服用して健康になつたと聞けば直に歸つて來て之と面會して、共に喜びあふのである。佛も亦此の如くである。吾等の心の持ち方一つで何時でも佛を見たてまつることが出来るのである。前にもいつたことであるが、佛を見るといふのは吾等の眼の前に佛の姿が見えることではない。佛と共に居り共に住むといふ感じが起ることをいふのである。佛と共に居り共に住むものは即ち寂光淨土に住む者である。淨土を西に向つて求むるにも及ばず、東に向つて尋ねるにも及ばず、此の娑婆世界に淨土が實現せらるゝのである。壽量品に

我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり。

とあるのは即ち此の娑婆世界のことをいふのである。又

諸の有ゆる功德を修し柔和質直なる者は、則ち皆我が身此に在りて法を説くと見る。

ともいつてある。吾等が佛と遠ざかつて居るのは、吾等の心に煩惱が勢力をもつて居る爲である。若し吾等にして能く大乘の敎へを學び、心の煩惱を掃ひ盡すことが出来れば、吾等の心の底に潜んで居た佛性が漸く其の光りを發し、吾等の心も佛の御心に近きものとなる。その時吾等は佛と共に住むことが出来て、永く安穩なるを得べきである。

佛の入滅に就ての説明は此の如くであるが、之を移して吾等も互ひ同士の中の死別にも深き意義を見出し得べきである。野村望東尼は女丈夫として世に知られた人であるが、其の夫貞貫を失つた翌年の命日に、人々と共に夫が生前のことを語りあつて、

ともすれば君が御氣色そこなひて叱られし世ぞ今はこひしき

と詠じた。叱られた其の時には悲しくも情無くも思つたであらうが、亡き後になつて見れば、

それさへ懐かしく思はれるのが人情である。若し人生に死といふものが無かつたら、吾等はどれ程我儘になるか分らぬ。互ひに何時死別をするか知れぬ身であると思へば、堪へ難いことも

堪へ忍び難いことも忍び得らるべき筈である。此處へ自分の幼い時の經驗などを持出すのは如何かとも思ふが、自分は九歳の時に弟を失つた。その時弟は四歳であつた。平生は至て健康な兒であつたが、急性の腦膜炎にかゝつて僅か一夜で死んだのであつた。其の前の日に懇意な家から美しい錦繪を何枚か貰つたのを二人で分けたが、自分は兄であるといふので弟よりも多く取り、弟がモウ一枚くれといふのを肯かなかつた。弟は泣きながらも諦めておとなしく寝たが、其の翌朝はモウ冷い亡き骸になつて居た。自分は前の日に弟と争つたことが非常に大きな罪であつたやうな氣がして、獨りでいつ迄も泣いて居た。『斯んなことになるのなら、繪などは残らずやつたのに……』と思ふと堪らなく悲しくなつた。今でも其の時の事を思ひ出すと寂しくなるが、此の悲しい事實は自分によい敎訓を與へてくれた。

互ひに我儘をしあつたり、争ひあつたりするのは畢竟死別といふことのあるのを忘れて居る爲ではないか。死んで行く人は生き残つた者に大なる敎訓を遺して行くのである。『今私は死んで行く。生き残つた貴君方も、何時私のやうに死んで行くか分らぬのである。其の時に後悔のないやうに、今互ひに譲りあひ扶けあつて、愉快に毎日をお送りなさい』と、たとへ言葉に出しては言はずとも、其の死といふ事實によつて敎へて行くのである。九月九日に友人と共に、

六、佛と佛弟子

二六七

高い臺に登つて宴を催した老詩人杜子美は

明年の此の會知んぬ誰か健ならん。酔うて菜莢を把りて仔細に看る。

と吟じた。互ひに明年はまた相逢ふことが出来ぬかも知れぬから、せめては此の一日を愉快に飲んで過さうといふ心である。吾等も互ひに私心私情を去つて、明るく朗かな氣分を以て毎日を送り、互ひに後悔のないやうにしなければならぬ。死によつて與へらるゝ所の敎訓はまことに大なるものである。

尙ほ吾等が死といふことによつて教へらるゝのは、懈怠の罪の大きいことである。吾等は何時死ぬか知れぬ者だといふことを一通りは心得て居るが、まさか今直に其の死といふ事が自分の身に迫つて来やうとも思はず、毎日をウカ／＼送つて居る。

昨日まで人の事ぢやと思つたが己が死ぬとは此奴堪らぬ

といふ歌があるが、實際『お前は今死ぬぞ』と宣告された時の感じは斯んなものであるかも知れぬ。毎日をウカ／＼送るうちに、何事も宜い加減にして置けば宜いといふやうな愚かな心持になつてしまふ。智度論に

一切の諸賊の中に懈怠の賊に過ぎたるは無し。

とあるが、何事にも魂を打込んでするといふこと無く、毎日を殆んど無意義に過す者が多いので、人生に眞の進歩といふものが殆んど見られぬのである。併し何人も懈怠が善い習はしだとは思つて居ないのである。唯だ今日の如く明日も生きて居られる、明日の如く又明後日も生きて居られると思つて、爲すべき事を後へ後へと送つて居るために、いつか斯ういふ緩んだ氣分になつてしまつたのである。斯く懈怠に毎日を送つて居る吾等の眼の前に死といふ事實が突然現はれて来て、昨日まで共に談笑して居た人が今日は影も見えなくなつてしまふと、吾等は初めて『成程』と思ひ當る。これは『人は誰も死ぬものだ』といふやうな一片の理屈でなく、眼前に死といふ事實が突き着けられたのであるから、眼が覺めずには居られぬわけである。

緩んだ氣分で日を送つて居れば、百年生きても何も生きがひのある事は出来ぬ。魂を打込んでやれば、一日でも大きな働きが出来るものである。昔から鬼神が現はれて力を添へたといふ様な話は、何れの道にも夥しくある。例へば三條小鍛冶宗近が刀を鍛へた時に、稻荷が若い男の姿となつて現はれて向ふ鎧を打つたとか、或は博雅三位が逢坂山で琵琶を弾いて居た時に、空中で歌を詠む聲がして琵琶が自然と鳴つたとかいふ類の話が多く傳はつて居る。此等は何れも魂を打込んで其の業に勵んだ爲に、其の平生の實力以上の事が出来たことをいつたものであ

らう。確かに其の當人も『神の助けがあつた』と感じたに違ひない。一生涯に一度も魂を打込んで仕事をしたことが無いために、自分にどれ程の實力があるのかも知らず、常に自ら侮り自ら輕んじて、一生を終る人が少くない。

まことに哀むべき次第である。お互ひに『此の一日の重んずべきこと』を何時も忘れぬことが肝要である。

死といふ事實を眼前に見た者は『貴い一日を空しくするな』といふことを最も力強く教へられたわけである。涅槃經には

人命停まらざること山を下る水よりも過ぎたり。今日存すと雖も明日亦保ち難し。云何ぞ心を縦にして惡法に住せしむる。

とあるが、死んで行く者は生き残つた者に斯ういふ意味の教訓を最も力強く與へて行くのである。『私は死んで行くが貴君は後に生きて居る。併し貴君も何時私の如くにならぬともいはれぬから、今貴君に與へられたる生命を出来るだけ善く送らなければならぬでせう。貴君の貴い一日は再び來ませぬぞ』と、假令言葉に出しては言はずとも、その死といふ事實によつて教へて行くのである。

死によつて吾等の與へらるゝ教訓は此の如くに大なるものである。されば吾等は死んで行く人を送つて、深き感謝の念を以て合掌すべきである。たとへ小い兒が死んで行くのでも、斯う考へて見れば意義の深いことである。自分は年の若い頃から幾度か赤兒の死んで行くのを見て、『長く生きて居て幾分なりとも世の中の爲に盡すことが出来れば生れて來たかひもある。生れて來て間もなく死ぬくらゐなら生れて來ぬ方が宜かつた。まことに是は無意味なことである』と思つた。併し斯う思つたのは間違ひであつた。たとへ生きて世の爲人の爲に力を盡すことが出来なくても、その死によつて大なる教訓を與へて行くのであるから、吾等は赤兒の死をも恭しき感謝の念を以て送つてよいのである。平凡な人の死でさへも此の如くに深い意義がある。況してや八十年の間一切衆生を救護するために努力せられた釋尊の入滅が吾等に與へられたる教訓は實に莫大なものといはなければならぬ。以上は所謂八相の極めて簡單なる説明であるが、此の如くに觀じ來ると、釋尊御一代の事蹟が即ち連續的の說法と申すべきである。されば大乘起信論には

其の願力に隨ひ、能く八種を現じて衆生を利益したまふ。

といつてある。能く釋尊の御一代を知るならば、佛敎の佛敎たる所以は能く解し得らるゝであ

釋尊の御徳を仰ぎ慕つて絶對の歸依者となつた者も少くないが、御父の淨飯王も、御子の羅睺羅も、叔母であつた憍曇彌も、夫人であつた耶輸陀羅も共に皆其の教へを受けて歸依者となつたのは殊に貴いことである。一體少年の時から知つて居る者が歸依するといふことは頗る難事である。豫言者は其の故郷に容れられぬといふのが通例である。耶蘇もこの事を認め居る。馬太傳には

其の故土にいたり會堂にて教へしに、人々奇みいひけるは、此人の智慧と異なる能は何處より來るや。これ木匠の子にあらずや。其母はマリア、其兄弟はヤコブ、ヨセ、シモン、ユダに非ずや。其妹等は皆我等と偕に在るに非ずや。然るに此人の凡て此等の事は何處より來りしや。遂に厭うて之を棄つ。イエス彼等にいひけるは、豫言者は其故土、其家より外に於て尊まれざることなし。

とある。是れが普通の人情であつて、少しも不思議なことではない。其の生ひ立に就て少しも知らぬ人の中に立つて説法する時には、宛も『天より降つて來た者』の如くに感じて、驚異と讚歎との情を以て之に向ふから、其等の人々を感化することは比較的易いのである。然るに少年

の時のことを知つて居る者は、此の馬太傳に記された人達の言のやうに考へ易いから、之を感化することは非常に困難なのである。然るに釋尊は成道の後間もなく鹿野園に至つて、以前に臣下であつた五人の者を弟子としたまひ、尋いで故郷に歸つて一家眷族を盡く弟子としたまはたのである。是れは絶大の徳を具へられた人でなければ到底出來ぬことである。

此の如くに絶大の徳を具へて居られたから、釋尊の御弟子は何れも之に心服して、斯る師の下に屬することを無上の悦びとして居たのである。迦葉は師恩の厚きに感激して、

世尊は大恩まします。希有の事を以て憐愍教化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。手足をもて供給し、頭頂をもて禮敬し、一切をもて供養すとも皆報ずること能はず。若は以て頂戴し兩肩に荷負して、恒沙劫に於て心を盡して恭敬し、又美膳と無量の寶衣と、及び諸の臥具と種々の湯藥とを以てし、牛頭栴檀及び諸の珍寶にて塔廟を起て寶衣を地に布き、斯の如き等の事を以て供養すること恒沙劫に於てするも亦報ずること能はず。(法華經信解品)

とまでいつたが、彼と心を同化する者は無論夥しくあつたであらう。但し顔淵が孔子を稱へて『之を仰げば彌高く之を鑽れば彌堅し』といったやうに、同じ御弟子の中でも其の信解の

力の殊に優れた者ほど釋尊を仰ぎ慕ふ心が殊に深かつたと思はれる。今の吾等も佛教を學ぶこと漸く久しければ、次第に渴仰の念を増すに違ひないのである。

此の迦葉に就ては特に美談として傳ふべきことがある。迦葉は元來富貴の家に生れ、榮華の生活を續けて來たが、其の生活の全く無意味であつたのに氣附いて釋尊に歸依し、頭陀第一を以て稱せらるゝに至つた。而して釋尊の御弟子も多くある中で、迦葉は特に長老として人々に敬重せられて居た。頭陀行に就ての委しいことは前に述べたから今は繰返さぬが、一言でいへばそれは少欲知足の生活である。頭陀とは抖擻と譯するのであるが、抖擻とは『打ち拂ふ』といふ意である。衣食住等に就ての有らゆる欲望を打ち拂つて、簡易質素なる生活に満足を感じずやうに修行を積むことである。佛弟子たる者は皆佛の御心を以て吾が心としなければならぬことは屢々述べた所である。佛は大慈大悲の御心を常に渝ることなく有せらるゝのであるが、簡易質素の生活に満足し得ぬものは決して慈悲心を有する者とはなれぬ。如何に微細な物でも之を作るには多くの苦心を要するのである。吾等の身のまはりには在る一切の物は皆多くの人の努力の結晶といふべきである。唐の李紳の農を憫むの詩に
禾を鋤して日午に當る。汗は滴る禾下の土。誰か知らん盤中の殮。粒々皆辛苦。

とあるのは能く世間に知られて居るが、實際吾等の食する穀物の粒々は皆農民の辛苦の所産である。獨り穀物のみならず、一切の物が皆さうである。されば吾等が種々の物を濫費するのは之を作る爲に費されたる多くの人の苦心努力を無視することである。即ち自己の欲望を満足せしめんが爲には、如何に多くの人を勞しても構はぬといふ、極めて冷酷なる心である。此の如き心と一切衆生を救護しやうといふ慈悲心とは決して兩立せぬものである。

他の人に對して求むる所の多い者は、他の人を救護せんが爲に力を盡すことの出來やう筈はない。されば涅槃經の中に少欲知足に就て説明して、

少欲なる者は求めず取らず、知足なる者は少しきを得て悔恨せず。

とある。又無量壽經の中には

少欲知足にして染と恚と痴と無し。

とある。又法華經の勸發品には久しく菩薩行を積める高德の人々のことを擧げて『當に知るべし是の人は佛善哉と讚めたまふ。當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛の手をもて其の頭を摩らるゝことを爲ん。當に知るべし是の人は釋迦牟尼佛の衣に覆はるゝことを爲ん』とあり、其の他種々と其の行ひの世に優れたる點を數へて、その終りに

是の人は少欲知足なり。

といつてある。此等の諸經に照して見ても、少欲知足の人でなければ佛の境界に近づくことの出来ぬのは明かである。随つて頭陀第一と稱せられたる迦葉が多くの佛弟子の中に於て重きを爲して居たことも、如何にも尤もと思はれるのである。

此の迦葉が韋提訶山の石室に居た時に、その徳を慕つて集つた者が五百人に達し、皆迦葉と同じく頭陀行を勵んで居た。華手經には其等の人々を稱して、

少欲知足にして遠離の行を樂へり。

とある。遠離とは即ち煩惱に累はされぬやうになることである。迦葉は斯く多くの人々に歸依せられたることを深く悦ぶと共に、佛恩の重いことを今更の如くに思ひ出した。『自分が斯く多くの人を教へ導くことの出来るやうになつたのは、全く佛の御蔭である。何を以て此の恩に報ずることが出来やう』と頻りに考へて居るうちに、何とかして佛に對して此の感謝の念を述べなければ氣が濟まなくなつて來た。時に釋尊は竹林精舎に在して多くの弟子の爲に法を説いて居られた。迦葉は竊かに韋提訶山を去つて竹林精舎に至り、釋尊の説法して居られる所へ出たが、其の氣高い御姿を面のあたり拜すると共に、萬感胸に充ちて一言も口へは出なかつた。釋

尊も迦葉の入來つた姿を見て限りなき満足を感じられた。『此の迦葉は能く吾が教へを信解して、今は多くの者を教へ導き得るやうになつた。まことに感すべき者である』と御考へになつて、手を擧げて迦葉を招かれ、

善來迦葉、久しくして乃し相見たり。汝當に此の如來の半座に就くべし。

と仰せられた。迦葉が恐る恐る近づくと共に、釋尊は御身を少し片寄せて、迦葉と相並んで獅子の座に就かせられた。如來の半座を分たれたのは、迦葉は後に必ず佛の境界に達し得べきことを證せられたのである。迦葉も言はず、釋尊も言はず、默然として並び坐せられたのであるが、善き師を得たる迦葉の感謝の念と、善き弟子を得られたる釋尊の満足の情とは自ら其の顔に現はれた。之を見たる多くの弟子達も唯だ感激して、言を出す者は誰もなかつた。

道を求むる心が如何に篤くても、善き師に逢はなければ其の志を達することは出来ぬ。然るに善き師に逢ふことは頗る難い。又如何に心を盡して道を説いても、善き弟子を得なければ吾が説を後に傳へることは出来ぬ。然るに善き弟子を得るのも決して易いことでは無い。師弟が斯くまでに相得て、相許すといふは何よりも慶たい次第である。尤も釋尊には迦葉以外にもなほ多くの善き弟子があつた。されば釋尊も此事に就て大に満足せられ、常に其の有力なる弟子

達を稱揚せられた。富樓那を稱揚して、
精勤して我が法を護持し助宣し、能く四衆に於て示教利喜し、具足して佛の正法を解釋して
大に同梵行者を饒益す。(法華經五百弟子受記品)

と仰せられたるが如きは其の一例である。獨り佛の在世の御弟子のみが此の如くに貴いのではない。後世の者と雖も佛の説法の眞意を覺り、之を吾が身に實行すると共に、之を世に弘むることに力を盡すものは、皆佛の御心に叶へる者といふべきである。涅槃經に依れば、釋尊の御入滅に際して、多くの御弟子が悲歎のあまり、『今少し長く此の世に御留りにならぬものか』と申した時に、釋尊は

汝等是の語を爲すべからず。我が今所有の無上正法は悉く以て摩訶迦葉に付屬す。是の迦葉は當に汝等が爲に大依止となるべし。

と告げられたとある。大依止とは凡ての人達の依りとなつて、之を教へ導く者のことである。併し此事は獨り迦葉に止るのではない。眞によく大乘を學んで菩薩の道を勵むものは、皆一切衆生の大依止となるのである。

佛法が世に弘まつたに就ては、有力なる佛弟子の功勞をも亦大に認めなければならぬ。第一

佛が如何に深遠なる教へを説かうと思召しても、之を聞いて能く解する者がなければ説かれやう筈がない。されば佛は適切なる問を發して、佛の説法の機會を作つた者に對して、いつも其の功徳を稱へて居られるのである。其の大莊嚴菩薩に對して、
善哉善哉大善男子、能く如來に是の如き甚深無上の大乘微妙の義を問へり。當に知るべし汝能く利益する所多く、人天を安樂し、苦の衆生を抜く、眞の大慈悲なり。(無量義經)

と仰せられし如きは一例である。釋尊が御弟子達の間に應じて説かれたればこそ、其の説かれた所が經典となつて後に遺り、永く吾等の力となるのである。されば吾等は佛の貴い説法の機會を作つた人々に對して深く感謝しなければならぬわけである。其の貴い教へを世に弘むる爲に力を盡した人々の功徳に至つては、今までも繰返して述べた所であるから、此には多言せぬであらう。『如來の所遣として如來の事を行ずるなり』と、法華經法師品に説かれた所によつて充分に悉されて居る。

尚ほ吾等が非常に有難く思ふのは、釋尊が御弟子達と常に艱苦を共にせられたことである。釋尊は父王を始め多くの臣下等の歸依をも得られたのであるから、元の王子の身分に戻つて華やかなる生活をしやうと望まれたなら、必ず多くの者も喜んで其の御望みを叶へたに違ひな

い。又最初王宮を出て修行の旅に登られた時に王舎城を過ぎられたが、時に頻婆沙羅王は態々之を途中に迎へて『何故に御出家になつたのであるか。若し父王がいつ迄も健在である爲に、王位を嗣ぐ時が急に來ぬのを悶かしく思つて出家されたのならば、吾が國の半を君に捧げやう。それでも不足と思はるゝならば、此國を盡く讓つてもよい。それでも猶ほ不足ならば、四隣の略取すために我が多年訓練したる兵を用ゐられよ』といつた。釋尊は之を謝して『自分は人生の眞の意義を知らんが爲の出家である』と語られたので、王は大に感じ入り『然らば覺を得られた時には必ず我を教へ導きたまへ』といつて別れた。果して釋尊成道の後に至つて、此の王は韋提希夫人と共に之に歸依して、佛法の弘通に出来る丈の力を盡さうと誓つた。その外にも舍衛城の長者須達如き有力な人が多く釋尊に歸依した。されば釋尊にして安樂なる生活望まれたなら、其の御望みを叶ふるために喜捨するものはいくらも有つたのである。而も釋尊は一切左様な望みを持たれなかつた。釋尊は御弟子に

乞食の生活を勧められ、御自身も其等の人々と艱苦を共にせられた。

是れは今日から考へて見ても誠に有難いことである。釋尊は其の御弟子を教へ導くために、強いて自ら貧苦の生活に入られたのである。

佛の十號といふものがある。是れは吾等凡夫に取つて特に佛の尊く思はるゝ點を數へ上げたものである。その中に『應供』といふのがある。應供とは『供養を受くべき者』といふ意である。佛は大慈悲を以て一切衆生の爲に教へを説かるゝのであるから、一切衆生は之に對して深く感謝するのが當然である。供養は要するに感謝の意を現はすものであるから、佛は當然供養を受けらるべき者である。併し佛の御弟子達はまだ修行中の者であるから、自分達はまだ人の供養を受くべき身分ではないといふ謙遜の心を常にもつて居なければならぬ。一粒の米一寸の布と雖も努力しなければ出來ぬものである。それを人が持つて來てくれるのを待設けて居るやうな簡ではいかぬ。自分で人の門に立つて、禮を盡して之を乞ふべきである。それで佛弟子たる者は乞食によつて生活するのが原則となつて居たのである。

物を貰ふのに斯程まで禮を盡すのは、物を重んずるのではない。物を作る人の努力を尊重するのである。

併しながら佛は決して人の好意を無にすることをなされなかつた。若し深く佛に歸依した者が手厚い供養をする時には、御自身に之を御受けになつたのみならず、御弟子達にも供養を受くことを許された。唯だ平生の生活に於ては乞食といふことが原則となつて居たのである。そ

れで釋尊御自身も御弟子達を獎勵し鞭撻するために、彼等と共に乞食をせられたのである。時としては終日鉢を持つて人の門に立つても施すものが無く、鉢を空しうして戻られたこともある。又或時は馬の飼料にする麥を與へられて、忍んで之を食せられたこともある。是れ皆御弟子達を慈まるゝ貴い御心に出たものである。

釋尊の門に入つて教へを受けた者には富貴の人もあり貧賤の人もあったが、一切其等の區別は設けられなかつた。前に戒律に就て説明した時にもいつた通り、受戒の前後によつて其の座席が定められるので、その他には何の別ちもなく、

四河海に入りて復た河の名無し、四姓沙門と爲りて皆釋種を稱す（増一阿含經）

といふ精神がよく貫徹して居たやうである。併し印度に於ける階級思想は非常に根柢の深いもので、釋尊が之を匡正するには随分骨を折られたやうに見える。例へば十大弟子の一人なる優婆離は下賤の家に生れた者であつたので、王族などは彼と席を同うして釋尊の教へを聽くことを恥とし、之が爲に佛門の繁昌にも影響したので、阿難は大に心配して、優婆離を遠ざけては如何であらうかと申出たが釋尊は斷乎として之を斥け、『彼は下賤の者であるが、正法を護り戒律を持つことに於て衆に優れて居る。彼の如きは、多くの人の供養を受くべき者である』と仰

せられた。又諸の弟子に對して、

豪貴の族種より出家せるものにして、自ら貴しとし他を賤しとする者は真人にあらず。法を行ずること如法にして、眞諦の法に趣向し、自ら貴しとせず、他を賤しとせざる者は真人なり。（中阿含經）

と教へられた。

併し是れは佛法を學ぶ上に於ての教訓である。世間に於ける階級の差を輕視せよといふのは決して無い。『國に君なきは猶は體に首無きが如し、以て久しく立ち難し』と自愛經にあることは前にもいつたが、其の他國王の重んずべく尊ぶべきことを説かれた經文は實に夥しくある。例へば心地觀經に於ては國王の尊きことを稱へて三十三天の諸の天子等恒に其力を與へて護持す。

といひ、又

其の國界に於ける山河大地は、大海の際を盡して國王に屬す。

といひ、更に又

世間一切の堂殿は柱を根本とするが如く、人民の豐樂は王を根本と爲す。國王若し正法を以

て治めざれば人民依る所なし。

といつてある。又王の十徳を數へ上げてあるが、其の十徳とは

- 一に能照。二に莊嚴。三に興樂。四に伏怨。五に離怖。六に任賢。七に法本。八に持世。九に人主。

である。一に能照とは、王たる者が能く其の智慧を以て世間を照し見て、能く治むることをいふのである。二に莊嚴とは、徳ある王を上にかみ戴いて居る國は其の國威が四方に輝き渡ることをいふのである。三に興樂とは、國王がよく其の國を治めて國民を盡く安樂ならしむることをいふのである。四に伏怨とは、國王の力によつて一切の怨敵が盡く降伏することをいふのである。五に離怖とは、國王の徳によつて一切の國難が皆除かるゝことをいふのである。六に任賢とは、國王が能く賢者を擧げ用ゐて國事を任すことをいふのである。七に法本とは、國王の徳が本となつて國に正法が行はれ、國民皆其の土に安んずることをいふのである。八に持世とは、王の徳によつて世を安穩に持つことをいふのである。九に業主とは、國王の徳によつて國が安く治まれば種々の事業が起るから、王を凡ての事業の主といふのである。十に人主とは、國王は一切の人民を治むるものであるから、之を人民の主と稱するのである。

前にも度々いつた通り、出家の弟子は佛の教化を賛けて正法を世に弘むることを其の職とするものであるが、佛は決して凡ての人の出家を望まれたのではない。在家の人々が佛法の精神を其の身に體して各自の業を勵み、政治經濟その他百般の事が佛法の精神によつて運用せらるゝやうになることが佛の説法の究竟の目的である。出家の弟子の間には一切の階級的差別が排除かれてあるが、實社會に於ては階級が無視されて宜いといふことは決してない。秩序がなく統一が無くて國が安穩に治まらう筈がない。

國王は其の國の統一力を代表する者である。

それ故に國王が此の如くに尊び重んぜらるゝのである。人民は皆王を仰ぎ尊ばなければならぬのであるが、王位を保つて王となる人は、自ら此の如くに尊い位を保つべき徳が無くて、此の尊い位を辱めてはならぬといふことを平生常に懸念して、少しでも自己の修養を怠ることの無いやうに努力すべきものである。されば釋尊は王者に向つて、其の職の大切なることを忘れぬやうに、いつも教誡を興へられた。

王者の立つことを得るは民を以て國を爲せばなり。民心安からざれば國將に危うからんとす。是故に王者は當に民を憂うること母の赤子を念ひて心に離れざるが如くなるべし。――

尼乾子經

といふが如きは其の一例である。

守護國界主經には國王と國家との關係に就て、極めて適切なる敎へが説かれてある。釋尊は『國王を守護することに特に力を用ゆるのが佛の本意である』といふ事を頻りに説かれたので、秘密金剛手といふ者が疑を起して、

佛の所説の如くなれば、諸佛は常に平等三昧に住し、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如しと。今は云何ぞ但だ國界主を守護すと言ふや。(國界主とは王のことである) 諸有の貧窮孤獨の困苦にして依無く歸無く救無く護無き者を何ぞ愍念して守護したまはざるや。と質問した。之に對して釋尊の御答へには、

諸佛如來は平等三昧に住せざるにあらず、平等に由るが故に國王を守護す。善男子、譬へば良醫の小さき嬰孩を見るに、身疾病に縈り醫藥に勝へず。乃ち良藥を以て、母に之を服せしめ母の服藥の力乳に及び、由つて其の子乳を飲めば疾病皆除るが如く、諸佛如來も亦復た是の如し。一切を哀愍して國王を守護す。……國王は諸の衆生の與に日と爲り月と爲り燈と爲り眼と爲り父と爲り母と爲る。若し諸の有情眼無く燈無く日無く月無く父無く母無くば身

命存すべけんや。若し國王無くば安立すべからず。

とある。國王が佛法を信じて、慈悲の心を元として國を治むる時には國民が盡く其の慶を受くるのである。それは母親が良い藥を飲めば、その乳が赤子の病を癒す力をもつやうになるのと同じことである。故に佛は一切衆生を幸福にしたいといふ平等の慈悲心を有せらるゝが爲に、特に國王を守護し、國王が佛の正法を信ずるやうにと努力せらるゝのである。

尙ほ此處に注意すべき事がある。それは心地觀經に國王の十徳を擧げられた中に、伏怨といふ一項のあることである。伏怨とは國の怨敵を降伏せしむることであるが、怨敵を降伏せしむるには戰つて之に克たなければならぬ。然るに多くの經論を比べ、讀むと殆んど絶對無抵抗を以て最高の行であるやうに敎へられてある例もある。例へば

若し諍を以て諍を止めんとすれば竟に止むることを得ず。唯だ忍のみ能く諍を止む。是法眞に尊貴なり。(中阿含經)

といひ、或は

若し賊ありて利刀を以て節々に割截するとも心變易せず、口に惡言なく、當に割截する人に向ひて慈悲心を起すべし。(增一阿含經)

といふが如き戒めは屢々與へられてある。又佛弟子の中でも殊に高德の聞えのあつた目連は佛に先つて死んだが、それは佛法を敵として居た竹杖外道といふ一派の者共に襲撃せられ、散々に杖を以て打たれて終に死んだのである。その時阿闍世王が之を聞いて大に怒り、彼等を盡く探し出して焚殺せと命じたが、目連は之を止めて『吾が今日の死は前生に於て犯したる罪を償はん爲であるから、少しも悔むべきでない』といひ、安らかに最期を遂げたといふ事が傳はつて居る。

併し又此と正反對とも思はるゝやうな事も教へられて居る。前に戒律に就て説いた時にも其の一節を引用したと思ふが、例へば涅槃經の中には

正法を護持する者は五戒を受けず威儀を修せずして、刀劍弓箭鎗槊を持すべし。

とあり、又

若し五戒を受持する者有るも、名けて大乘の人と爲すことを得ず。五戒を受けざるも正法を護ることを爲すを乃ち大乘と名く。正法を護る者は當に刀劍器仗を執持すべし。

ともある。而して同じ經の中には有徳王が覺徳比丘を保護せんが爲に外道と闘つたことを擧げて、覺徳が之を讚めて、

善哉善哉王今眞に是れ正法を護る者なり。

といつたと記してある。此の相反したるが如き教へは何れも佛の説たまへる所である。之を深く味つて見ると、その形に於て相反したるが如くであるが、其の根本の精神に於ては能く一致して居るものである。即ち佛弟子たるものは唯だ慈悲の心を以て終始一貫すべきことである。故に如何なる迫害にあつても更に瞋恚の念を發せずして之に堪へ、たゞ斯る迫害を加ふる者の愚さに對して哀愍の情を起すといふは、誠に貴い行であるが、若し其の迫害によつて正法の流布が大なる妨げを受くる場合には、たゞ之を忍び之に堪へてのみは居られぬのである。即ち正法を護るが爲に戦ふ必要が起るのである。涅槃經に説かれたる所は即ちそれである。

此の戦には二種の大なる功德がある。

其の一は正法の流布を助くること、其の二は正法に敵する者に反省を促すことである。大なる罪を犯すのは畢竟其の思慮分別の足らぬ所から起るのであるから、之に對して瞋恚の念を起すべきではなく、専ら之を憫むべきのみである。併し憫むの餘りに之に何等の制裁をも與へぬならば、彼は何時まで自ら反省すること無く、益々其の非を遂げ其の罪を重ねるやうになるであらう。されば其の不正を赦して何等の制裁をも加へぬといふことは、決して慈悲とはいはれ

ぬのである。之に對して制裁を加ふることが眞の慈悲である。戰つて彼を懲すのも畢竟制裁の一種に外ならぬのであるから、佛は之を正當なる行として許されたので、其の心に『彼の覺醒を促したい』といふ慈悲の念が専ら動いて居るのであるから、たとへ表面に於ては殺生戒を犯した者の如くに見えても、之を大乘の人と稱して宜いのである。要するに他の迫害を堪へて居るのが菩薩道に叶ふ場合もある。他の反省を促さんが爲に之と戰ふのが菩薩道に叶ふ場合もある。章安大師の涅槃經疏に

出家在家の法を護るには、其の元心の所爲を取り、事を棄て理を存して匡に大教を弘むとあり、又

取捨宜しきを得て一向にすべからず。

とある。若し自己の勢力を擴張せんが爲に兵を興して他の國を伐つならば、大なる罪を犯したものと云ふべきであるが、正義のために戰ふことは大なる功德を積むことになるので、伏怨といふことを王の十徳の一に數へたのも實に之が爲である。

さて國王たる者は此の如くに重大なる責を有し、萬人の仰ぎ視る所となるものであるから、常に其の徳を養ふことを忘れてはならぬので、佛は國王たる者を戒めらるゝ所最も嚴重であ

る。例へば阿闍世王は最初佛法の敵であつたが後には其の罪を悔いて佛法に歸依し、最も熱心なる保護者となつた人であるが、釋尊は其の驕恣の念を起さぬやうに嚴しく戒められて、

汝は是れ國王、園苑に出遊するに象駕を嚴催す。……百姓所有の膏血を以て用て象馬に塗る。千戸の資財は象の費に充給すること能はず。(守護國界主經)

と仰せられた。王の乗る車は象又は馬が牽くのであるが、その象や馬は錦繡を以て飾られてある。これは皆百姓の出す所の租税によつて作られるのであるから、王たる者は之を忘れてはならぬとの戒めで『百姓所有の膏血を以て塗る』とは如何にも痛切なる言である。又法句譬喻經に國王の心得として、五事を擧げて

一には萬民を領理し枉濫有ること無し。二には將士を教育し時に隨ひて賞與す。三には善法を念ひて福德を絶たず。四には忠臣正直の諫を信ず。五には欲貪の樂を節し心を放逸にせず。

とあるが如きも甚だ適切なる教訓といふべきである。

華嚴經には國王の道に就て種々に説き示されてあるが、殊に賢王の日常の行事に就て説かれたる一節は懇切周到である。最初には、

賢王あり鶏鳴の時より起きて、先づ道場に入りて賢聖を敬禮し福祐を祈る。とある。道場は古今の賢聖を祀れる所である。國の治平なるは賢聖の遺せる道が能く行はるゝに由るものであるから、第一に之に對して感謝の意を表し、又自分も民と共に其の道を実行せんことを誓つて福祐を祈るのである。次に

祖宗を祀祭して恩徳に報せんことを思ふ。

とある。祖先の後を承けて王位を嗣ぎ、萬人の仰ぎ尊ぶ所となるのであるから、祖先の恩徳に報せんことを思はなければならぬ。論語にも『終を慎み遠きを追へば民の徳厚きに歸す』といふ曾子の語が出て居る。上に立つものが遠く祖先の徳を追慕し、祖先を辱めまいといふ心を常にもつて居れば、一般の人民も自ら敦厚篤實の風に向ふのである。其の次には、

人に孝敬を教へ萬方を冥益す。

とある。即ち教育の根本に就て思ひを凝すのである。教育といふものは直に其の効果の現はるゝものではないが、教育に力を用ゐなければ人の心は日に荒んでしまふ。人の心が荒んで來れば國は自然に衰へて行く。されば教育を盛にするには知らず識らずの間に萬民に利益を與ふる所以で即ち『冥益』である。冥とは目に立たぬ間に自ら効果を及ぼすことをいふのであ

る。教化に力を用ゆることが即ち王者の大任である。政治の根本、經濟の根本、有らゆる事業の根本は人物を作ることではなければならぬ。支那に於ても王者が天下を治むるには禮樂刑政に依るのであるが、禮樂を盛にして、人の心を正すれば、刑政は自ら正しくなる。これが王者の道である。刑政のみを整へて禮樂を後にすれば、表面だけは旨く治まるけれども、人の心が正しくならぬから眞の平和は得られぬので、これ即ち覇者の政である。孔子が『之を道くに政を以てし之を齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥無し。之を道くに徳を以てし之を齊ふるに禮を以てすれば恥有りて且格る』といはれたのは實に此事である。王者たるものは常に孝敬を教へて萬方を冥益することを念としなければならぬ。さて其の次に、

了りて後に朝に臨み、諸の大臣と王事を理め事を聴く。

とある。『王事を理め』といふのは政治上の萬般の事を親裁することである。『事を聴く』といふのは訴訟を聴くことである。即ち行政と司法との兩方面の事に裁決を與ふるのである。是れは勿論國を治むる上に於て極めて大切な事であるが、賢聖を敬禮し祖宗を祀祭し、萬方を冥益することを思ひ、而る後に政治の事を聴くといふは、本末輕重の別を明にする所以であつて、斯くてこそ眞に賢王と稱せらるべきである。此等の重大な事が凡て終つて、

此の二事了りて後に膳を進め、次に沐浴して園林に遊ぶ。

とある。即ち休養して身を健かにすることを謀るのである。國王一人の身は國家の安危の係る所であるから充分に自愛しなければならぬ。休養することも亦其の責任の一であると思はなければならぬのである。以上を以て國王の爲すべきことは一通り終つたのであるが、此處に最も大切なことは國王始め國政に與る者が常に修養に努めなければならぬ事である。これが即ち善政を行ふ根柢となるのである。因て經には此事に就て、

王殿に論座を敷き、國內の大智慧の沙門婆羅門を請ひ、正法を演說せしめて之を聽き、何ものか善、何ものか惡、何ものか正、何ものか邪、何をか行ふべき、何をか止むべきを諮問す。

とある。局に當る者は迷ふが、局外の批評は因はるゝ所がないから嚴正に出来るものである。故に政治に直接關係のない學者とか高德の人とかを請うて正邪善惡に就て憚る所なく談論せしめ、又政治上の事に就ての批評を求めらるゝのである。如何に智あり徳ある人でも、反省することを怠ると過に陥るものである。されば明治天皇の如き英邁の君主でもいにしへの書見るたびに思ふかな己が治むる國はいかにと

といふ様に常に反省せられたので、吾等は之によつて一層皇恩の尊いことを感ずる次第である。斯く局外の者の説を聽くことも必要であるが、又多年其の道に經驗を積んだ者の意見を聽くことも大切である。因て

時には宿舊の智臣、高德にして隠れたる者を集めて國政を詢ひ、其の得失を評せしむ。

とある。是れ亦國王としては缺くべからざる事である。此の如くに力を用ゐて怠らぬ故に、王徳増長して威は疆隣を伏し、群臣皆肅みて内外心を一にす。

といふが如き結果を得らるゝのである。以上は國王としての心得を説いたものであるが、此は獨り國王のみならず、凡て人の上に立つ者の共に平生心得なければならぬことである。

昔の國王の一身に負うた責任を、今日では各方面の人が分擔しなければならぬ。三千年の昔に比べて見ると、今日では社會が非常に複雑になつて居る。又國民一般の教育の程度が昔に比べれば非常に進んで居るから、上の命令一つで如何でも動くといふわけには行かぬ。どうしても各自に責任を分擔し、各自其の勢力の及ぶ版圖を堅實に發達せしめて行くやうに努むることが肝要である。家をもつた人は其の家を、店をもつた人は其の店を、會社の重要な地位に在る人は其の會社を健全に發達せしむるために、自ら身を以て衆を率ゆるの覺悟がなければなら

ぬ。苟くも人の上に立つ者は

釋尊が國王に對して教へられたことを皆自分の爲に説かれたものと考へて、之が實行に努力しなければならぬのである。斯くて初めて國家の健全なる發展が望み得らるべきである。

衆人の中に坐して衆人に羞ぢず、人の敬ふ所と爲るは心の淨端なるが故なり。

と正行經に説かれた所は甚だ平凡のやうであるが、凡て人の上に立つ者に尤も適切なる戒めである。

經典の中には又長者の其の從者に對する心得に就ても屢々説かれてある。併し其の根本精神に於ては國王に對する教誡と同じものであるから、一々之を擧ぐることを避け、善生子經の中に説かれた五ヶ條を其の一例として擧げて見やう。その五事とは

一には力に適して之を使ふこと。二には時に衣食を興ふること。三には味を分つこと。四には教を垂るゝこと。五には疾病の時に之を息ましむること。

である。第一に凡て人を使ふには其の適當なことに力を用ゐさせるやうにしなければならぬ。誰でも萬能なものはない。若し其の人に不適當なことに從事せしむれば、決して成績の擧るも

のではない。而して其の無能なるを以て、之を用ゆるに足らぬ者として斥くるは、人を辱むるものといふべきである。孔子の言に

君子は事へ易くして説ばせ難し。之を説ばすに道を以てせざれば説ばざるなり。其の人を使ふに及びては之を器にす。小人は事へ難くして説ばせ易し。之を説ばすに道を以てせずと雖も説ぶ。其の人を使ふに及びては備はらんことを求む。

とあるが、實によく人を使ふ道を説き盡してある。之を器にするといふは其の長所によつて之を用ゆることである。小刀は切るもの、錐は突くもの、器には各その適する所がある。人も亦其の通りであるから、之を器と思つて使へばよいのである。備はらんことを求むるといふのは何をさせても能く出来る人がほしいと思ふのである。これは到底望んでも得られぬことであるから、斯様な考へを以て人を使へば怨みを受くるより外に何の得る所なくして終るであらう。人の上に立つ人の何よりも能く心得なければならぬことである。

次に『時に衣食を興ふる』といふのは即ち之に生活の保障を興ふることである。特別に深い教養を積んだものは、たとへ衣食の資に困つても其の守る所を改めぬけれども、さういふ事を一般の人に向つて望むのは無理である。されば孟子も

恒産無くして恒心有るは、唯だ士のみ能くすることを爲す。民の若きは恒産無ければ困て恒心無し。苟くも恒心無ければ放肆邪修爲さざる無きのみ。

といった。人を使ふものは唯だ自分の用を足すために之を使ふと思つてはならぬ。自分の召使ひは即ち自分の弟子であるといふ考へをもつて、之を教へ導くことを怠つてはならぬのである。併し最初から立派な人物にはなれぬから、先づ生活の保障を興へて、其の邪道に陥ることを防ぎ、然る後に漸を追うて之を教へ導くやうにしなければならぬ。自分が多くの人の上に立つやうな地位に在るのは、即ち人の師たるべき天職を負うたものと考へて、常に自ら勵み自ら努むべきである。

其の次に『味を分つ』といふのは苦樂を共にすることである。自分が甘いものを食する時には召使ひにも甘いものを與へ、自分が苦いものを食する時には召使ひにも苦いものを與へるといふ心であれば、決して彼が背き離れるといふことはない。主人が樂をして居て召使ひの者にもみ苦しい思ひをさせるといふ事があると、他日彼に樂をさせてやつても決して感謝はせぬものである。三略の中に將帥たる者の道を説いて、

夫れ將帥は必ず士卒と滋味を同らし安危を共にすれば、敵乃ち加ふべし。

とあり、昔或る良將が戦地に在つた時に一樽の酒を之に贈つた者があつたが、其の將は之を河の中へ明けさせて、士卒と共に河の水を飲んだといふ逸話をあげ、

夫れ一簞の醪は一河の水に味すること能はず、而も三軍の士爲に死を致さんことを思ふは、滋味の己に及べばなり。

とある。なほ之に續いて

之と與に安く之と與に危し、故に其の衆合す可くして離る可からず、用ゆ可くして疲る可からず。其の恩素より蓄へ其の謀素より合へるを以てなり。

とある。人を使ふの道は此の如くでなければならぬ。上に立つ者には是れだけの情があれば、下に屬するものは如何なる困苦をも忍び得らるのである。

次に教へを垂るゝと、病のある時に休息を興ふことに就ては特に説明するにも及ぶまいと思ふが、人に教へやうとすれば先づ吾が身を正しくしなければならぬから、それが甚だ苦勞である。多くの人に敬ひ崇めらるゝ時は自然心が緩んで放縱な行を續け、自ら反省することが少くなる。此の場合に深く自ら戒慎すれば、下に屬する人々の行も自ら正しくなるわけである。書經には

滿は損を招き謙は益を受く。これ乃ち天の道なり。

とある又。王者が常に其の身を慎むことを説いて、

予兆民に臨むに、慄乎として朽索の六馬を馭するが若し。人の上と爲る者奈何ぞ敬せざらんや。

とある。斯く自ら慎むことを忘れぬ者にして初めて能く其の下を教へて、一般の風俗をも匡し

て行くことが出来るのである。次に従者たるものが其の主人に仕ふる心得に就ても種々に教へられてあるが、善生子經の中に擧げられたる十事が殆んど其の凡てを悉して居るやうである。其の十事とは

一には善く作爲し、二には善く爲に成し、三には受付審に、四には夜く臥し、五には早く起き、六にはよく學び、七には作務に勤め、八には家貧なるも慢らず、九には空乏の時にも離れず、十には門を出て長者を稱むるのである。

此の十事が具はれば人に事ふる道として全く遺憾なきものといふべきである。一に善く作爲するとは自分の爲すべき勤めを完全に果すことである。凡て『善く』といふのは完全の意味である。次に善く爲に成すといふのは主人の爲すことを輔佐するのである。成すとは即ち成就する

ことで、若し主人の爲すことに手落ちがあれば、之を側から補つて間違ひのないやうにするのである。次に受付審といふのは自分に任されたことに少しも曖昧な所のないやうにすることである。就中大切なのは金銭の出納である。金銭の出納に些かたりとも不明瞭な所があつては、他の事に如何に忠實でも、主人の信用は薄らぐに極つて居る。次に夜く臥し早く起きるとあるは、即ち勤勉力行の貴むべきをいふのである。第六によく學ぶといふは即ち修養に力を致すことである。英國の諺に

善き主人は善き僕の中から出る。

といふのがあるが、人に仕へて能く忠實に其の務めを果し、常に身を修め行を慎むものは、他日必ず多くの人の上に立つことが出来るのである。人に仕ふるは即ち自己を大成する爲であると思へば、如何に苦しくても満足して其の務めを果すことが出来る筈である。第七に作務に勤むるといふのは其の務めを果すのに少しも懈怠の念なきことである。初めは萬事に氣を附けて居ても、次第に家の中の様子に慣れると放慢の習はしがたく。久しくして愈々敬するといふ心掛けを失つてはならぬのである。次に主人の家が貧しくても慢らず、主人が空乏になつた時にも離れずして忠實に之に仕ふるといふは、普通の人情として能くし難いことであるが、是れが

眞に人に仕ふるの道である。終りに門を出て長者を稱むるといふは、たとへ主人に過があつても、他人に對しては之を隠すのが從者たる者の道である。

他人に對して主人の過を説くやうな者は、主人に對すれば必ず言を巧にしてその意を迎ふるに努むるものである。聖徳太子の憲法第六條に此の如き者を責めて、

其れ誑詐の者は則ち國家を覆すの利器たり、人民を絶つ鋒劍たり。亦佞媚の者は、上に對すれば好みて下の過を説き、下に逢へば上の失を誹謗す。…是れ大亂の本なり。

とあるが誠に痛快なる言である。陳子敗が孔子に向つて『昭公は禮を知れりや』と問うた時に、孔子は『禮を知れり』と答へた。併し昭公は吳より夫人を迎へて居るが魯國と吳國とは同姓である。同姓を娶らずといふが禮であるのに、昭公は之を犯して居る。それ故に陳子敗は孔子の答へを聞いて後巫馬期に向つて（此人は孔子の弟子である）『吾聞く君子は黨せずと、君子も亦黨するか』といつた。巫馬期は之を孔子に告げたが、孔子は

丘や幸なり、苟くも過あれば人必ず之を知る。

といひ、唯だ陳司敗の忠告を謝するのみで、敢て昭公の事には觸れなかつた。昭公は孔子の直接の主君ではないが、元來孔子は魯の大夫の家に生れた人で、昭公の弟定公に仕へたこともあ

るから、昭公の過を隠して自ら其の咎を受けたのである。此の如きを臣道の範と稱すべきであらう。

主 従の道に就て佛の教へられた所は夥しくあるが、以上を以て其の大略を知るべきである。次には父子の道であるが、釋尊自ら孝子の範であつたといふことは前にも屢々述べた。般若經に『一切世間恩を知り恩に報ゆるは佛に過ぎたる者なし』とあるのも、主として其の孝を盡された事に就ていつたのである。又増一阿含經には、恩を知らざる者を責めて、

設ひ彼我に近づくとも、我彼に近づかず。たとひ僧衣を被て我が左右に在るも、此人は猶ほ遠きが如し。

とある。凡ての恩の中に於て、殊に父母の恩を重しとせられたことは、『天地鬼神に事ふるは其の二親に孝するに如かず』（四十二章經）とあるによつても明であらう。又

一肩に父を荷ひ、一肩に母を擔ひ、其の壽量を盡して暫くも捨ること無く、衣食醫藥種々の所須を供給するも、なほ未だ父母の深恩を報ずること能はず。（本事經）

といひ、（壽量を盡してとは生涯の間といふ意である。）或は

一劫の間毎日三時に自身の肉を割きて、以て父母を養ふとも、未だ一日の恩を報ずること能

はず。(心地觀經)

とまでいつてある。尙ほ

善の極は孝より大なるなし。(忍辱經)

とあるに依つても、父母の恩を他の有らゆる恩より重しとせられたことが分るであらう。

此處で話が少しく傍徑へ入るやうであるが、此の君臣と父子との關係に於て吾が日本と他の國との間に根本的のちがひの有ることに注意して置きたい。君も父も共に重んずべきには違ひないが、若し其の間に等差を立てるとすれば父の方が重いと云ふのが支那や印度の思想である。支那に於ては三たび君を諫めて聽かれなければ仕を辭して去るのが士たる者の道である。父に對しては全く之に異り、若し諫めても聽かれなければ泣いて之に従ふより外はないと教へてある。孔子は君臣の道を説いて

君は臣を使ふに禮を以てし、臣は君に事ふるに忠を以てす。

といひ、尹氏の之を註したのは

君臣は義を以て合ふ者なり。故に君臣を使ふに禮を以てすれば、臣君に事ふるに忠を以てするなり。

とある。殷の紂王の無道なる際にも比干は諫めて殺され、微子は去り、箕子は佯り狂して奴となつて己が身を全うした。而して孔子は之を評して『殷に三仁有り』といつた。父子の關係に至つては決して斯様なものでなく、如何なる事があつても子として父を棄つることは出来ぬのである。舜は能く無道なる父に事へたので、至孝の範として知られて居るが、桃應といふ者が孟子に向つて『若し舜が天子となつた後に其の父が人を殺したら、司法の長官たる臯陶は如何するであらう』と問うたが、孟子は『之を執へんのみ』と答へた。更に『舜は之を禁ぜぬであらうか』と問へるに對して、『その職を果すのを禁ずることは出来まい』と答へた。『然らば舜自身は如何するであらう』との問に對して、孟子は

舜は天下を棄るを視ること猶ほ敝履の如きのみ。竊かに負ひて逃れ、海濱に遵ひて處り、終身欣然として天下を忘れん。

といつた。天子たる者が其の位を棄て、人を殺した大罪人と共に遠方の海邊に隠れて住むといふのは實に途方もない話であるが、父の身を全うする爲には斯ういふ途方もない事をして差支へないといふのが孟子の意見である。斯ういふことを賢人として知られた孟子が述べて居るのを見ても、支那に於て孝を如何に重んじたかは推知せらるべきである。君に對する忠に至つ

ては大に趣を異にする。

それは少しも不思議ではない。元來支那に於ては（獨り支那のみならず、吾が日本を除いて世界の凡ての國が皆さうである。）國王と雖も元は庶民であつて、唯だ徳があるとか智慧があるとかいふ事の爲に推されて王となつたのであるから、其の子孫に徳もなく智もない者が出れば忽ち其の位を失ひ、他の者が之に代るのである。武王は臣として其の君たる紂王を討つたのであるが、齊の宣王が孟子に『臣にして其の君を弑す、可なるか』と問うたのに對して、孟子は仁を賊ふ者之を賊といひ、義を賊ふ者之を殘といふ。殘賊の人之を一夫といふ。一夫の紂を誅せるを聞く、未だ君を弑せるを聞かず。

と答へた。是れは餘りに言ひ過ぎたやうであるが、支那の國體としては必ずしも不當の言ともいへぬのである。されば國王たる者は常に民心を失はんことをのみ恐れて居たのである。尤も國王たる者は天が之を護ると考へられて居たのであるが、天の護るか見棄てたかを知るのに、民心が之に歸せるか歸せざるかに依つて之を判するより外はないので、書經の中には天の聰明は我が民によりて聰明なり。といつてある。又

愛す可きは君にあらずや、畏る可きは民にあらずや。衆元后に非んば何をか戴かん。后衆に非んば與に邦を守るなけん。

ともある。此の如き國君が其の國民より絶對の歸依を受け得られぬのも不思議なことではな

50. 佛敎に於て國王の尊ぶべきことを教へてあることは前にいふ通りであるが、印度に於ても國王の徳が衰へれば其の位を失ふことは支那と同様である。轉輪聖王の出現といふことが古代の印度人の理想ではあつたが、さういふ理想的の王の出現したことは一度もなかつたのである。されば經典の中に國王を戒むる語は非常に多くあつて、例へば雜寶藏經の中には色に耽りて正しき道を敬はざると、酒を好んで民を惠まざると、博奕を好んで禮を守らざると、遊獵を好んで慈心なさと、惡言を好んで善言なさと、税を重くし罰を厳しくすると、義理に依らずして民の財を奪ふとを擧げて、

此の七の非法は王の身を危くす。
といひ、又佞人を近づけ諂を好むと、賢人を遠ざけ善言を受けざると、他國を伐つことを好んで民を養はざるとの三事を擧げて、

此の三の非法は國を危くす。

といひ、更に之に加へて

王若し此の非法を除かずば傾敗せんこと旦夕の間のみ。

とまでいつてある。要するに支那の儒教などで説く所と其の意を一にするものと見るべきである。

斯る國のみ世界に並び立てる中に於て、獨り吾が日本のみは全く其の國體を異にし、國民が國王を推したのでなく、皇祖が吾等の祖先を御率ゐになつて此の國を開かせられたのである。爾來今日まで君臣の關係は少しも變らず、歴代の天皇には何れも明治天皇が

我が祖我が宗は我が臣民祖先の協力輔翼に依り、我が帝國を肇造し以て無窮に垂れたり。と仰せられ、尙又

朕が親愛する所の臣民は即ち朕が祖宗の惠撫慈育したまひし所の臣民なるを念ひ、其の康福を増進し、其の懿徳良能を發達せしめんことを願ひ、又其の翼賛に依り與に俱に國家の進運を扶持せんことを望み

と仰せられたのと同様の歡慮をもつて吾等國民の上に立たせられたのである。實に吾等と皇室

とは君臣であると共に、父子の情を以て二千數百年來繋がれ來つたものである。吉田松陰が士規七則を作つて其の第一則に『凡そ生れて人と爲りては、宜しく人の禽獸に異る所以を知るべし』とて、

人に五倫あり而して君臣父子を最も大なりとす。故に人の人たる所以は、忠孝を本と爲す。といひ、其の第二則に至つて『凡そ皇國に生れては宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし』とて、

人君は民を養ひて以て祖業を續ぎ、臣民は君に忠にして以て父の志を繼ぐ。君臣一體、忠孝一致なるは唯だ吾が國を然りとす。

といつたのは能く吾が國體を知れる者と稱すべきである。釋尊の教へられた所は一々皆吾等の身に適切であつて、固より間然すべき所はないが、印度の人々を相手に説かれたもので、日本といふ特別の國に生れた國民に説かれたのでないから、忠孝一致の點にまでは説き及ばれなかつた。吾等は此處に意を致して、特に吾等自身の守るべき所を誤らぬやうにしなければならぬ。

以上は忠孝に就て釋尊の教へたまへる所を述ぶる序を以て一言したのみである。釋尊は印度

の一小國の王子として御生れになつたのであるが、決して印度國民のみを救はるゝことが其の天職ではなかつた。一切衆生を救つて悉く其の苦を離れしむることを志とせられたのである。觀無量壽經には

佛心とは大慈悲是れなり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝す。

とあるが、智度論には

一切衆生に於て自然に拔苦與樂の益を得しむるを無縁慈悲心と名く。

とある。即ち佛は特に、或る縁によつて人を救はるゝのでなく、一切衆生を盡く救はんことを志とせらるゝのである。されば吾等は釋尊を印度に降誕せられた佛と思つてはならぬ。吾等衆生の間に降誕せられたる佛と思ふべきである。尤も其の説法は印度の人を相手とせられたのであるから、印度の風俗習慣に合ふやうに説かれた所も多くて、其儘に吾が國に宛て嵌らぬ點もあるが、其の形に囚はれずして其の根本精神を辨へさへすれば、皆吾等に適切である。吾が日本は世界に冠絶したる尊い國體をもつて居るが、此の尊い國を護るべきために國民各自に充分の修養を積まなければならぬ。大乘の教へによつて修養すれば最も完全なる修養が出来る。若し忠孝一致の國たる日本人が皆大乘の教へを學んで其の心の煩惱を去り、能く忠を盡し孝を盡

すに於て遺憾なきに至つたなら、釋尊も満足せらるゝことであらう。

誠に親の子を思ふ情ほど切なるものは無い。心地觀經に兒を生む時の母の心を説いて、

十月の苦痛は生兒の一聲を以て忘る。

とあるが、能く親の心を言ひ悉してある。前にいつた吉田松陰が小塚原で死刑に處せられた時に、

親を思ふ思ひにまさる親心けふのおとづれ何と聞くらむ

と詠じたのは真によく親心を知るものである。若し親の情の斯くまでに厚きことを知らず、親の恩に報ぜんことを思はずして、世の爲人の爲に力を盡すといふ者があれば、それは人を欺き自ら欺くものである。釋尊が出家の際に『若し覺を得ば歸りて父母を度せん』と誓はれたといふことは前にもいつたが、大方便佛報恩經の中には、

父母に孝養し恩を知り徳に報ぜんが爲の故に今速に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得た

まへり。

とある。以て其の志の存する所を知るべきである。

親として子を思ふことは此の如くに厚いものであるが、若し親としての心得が完全でなければ

ば、其の愛情を全うし、其の子を眞に幸福ならしむることが出来ぬ。司馬溫公の勸學の歌に、子を養ひて教へざるは父の過なり。訓導して嚴ならざるは師の惰なり。父教へ師嚴にして兩ながら外る、無きも、學問の成る無きは子の罪なり。

とあるが、親が親としての責を盡さなければ、子が子たる道を辨へぬのも據ないわけである。誰も學ばずして能く道を知り得るものではない。されば經典の中に於て屢々親の子に對する心得が説かれてあるが今其の一例として六方禮經のを擧げやう。即ち

父母の子を視るに五事あり。一には惡を去りて善に就かしむ。二には書疏を教ゆ。三には經戒を持たしむ。四には婦を娶らしむ。五には家中の所有を與ふ。

とある。兒は稚くして正邪善惡の辨別のつかぬ者であるから、之を教へ導いて惡を去り善に就かしむることは固より父母の責任である。子を教へずして其の生涯の方向を誤らせ、家道が衰へ行くならば、祖先に對する不孝にもなる。深く憤むべきことである。

次に之に書疏を教ゆるは即ち智育である。次に之に佛の經典を教へ、佛の定められたる戒を守らしむるは即ち徳育である。智徳並進しなければ眞の教育とはいはれぬ。今日では學校制度が發達して居るから吾が子を學校に托してさへ置れば立派に教育が出来ると思ふ人も少くない

やうであるが、今日の學校制度が決して完全なものではない。又學生が學校に居る時間は一晝夜の三分の一以内で、その他は概ね學校の外に居るのであるから、たとへ學校が完全に近いものであつても、學校以外の影響の多いことは争はれぬ所である。學校に任せて置いて完全な教育が出来ると思ふのは大なる誤解である。是非とも父母たる者が其の子の稚い時から其の教育に充分力を用ゐ、青年期に達するまでに充分良い習慣がつくやうに努めなければならぬのである。三千年の昔に佛の説かれたことは、今日でも依然として凡ての父母に適切である。子を教へて嚴ならざるは慈悲の深い親とはいはれぬ。柳屯田の勸學の文に、

父母其の子を養ひて教へざるは是れ其の子を愛せざるなり。教ゆと雖も嚴ならざるは是れ亦其の子を愛せざるなり。父母教ゆれども學ばざるは是れ子の其の身を愛せざるなり。學ぶと雖も勤めざるは是れ亦其の身を愛せざるなり。

とあるは平凡なやうであるが、いつの世にも適切なる訓戒である。富貴の家の子に愚なものが多いは、生れながらに愚なのではなく、大概之を教ゆるの嚴ならざるに原因するものである。それは鍛へ方の足らぬ刀が鈍刀となるのと同様である。

次には婦を娶らしむとあるが、女の子ならば嫁せしむるのである。何れにしても結婚をさせ

る爲に、親は充分心を盡さなければならぬのである。若い男女が自ら配偶者を選むといふことが近頃では流行の一つになつて居るが、それは必ずしも安全な途ではない。思慮分別のまだ足らぬ者が、自分では正しく擇んだつもりでも、其の眼に狂ひが無いとはいはれぬ。親がそれを放任して置くといふのは、親としての責を盡さぬものである。釋尊が祇園精舎に居られた時に、多くの歸依者の中に滿財長者といふものがあつた。彼は其の長子の爲に妻を擇んで居たが、其の隣國なる阿那分邸長者の女が至極適當であると考へ釋尊の御指圖を乞うた。釋尊も之に賛成されたので、兩長者の間に婚約が整ひ、愈々阿氏の女が滿氏の家へ嫁入することになつた。然るに其の國の制度として、若し他國の人と結婚する時には六千人の婆羅門に饗應しなければならぬといふことになつて居た。是れは大概な人には出来ぬことである。詰り他國の人との結婚を禁止する目的で立てられたる制度である。併し滿財長者は

吾が家に良い嫁を迎へるためには如何に多くの費用が懸つても惜く無い

といふ考へであつたから、六千人の婆羅門を招いて饗應することに決定した。招かれたる人達は半身を露はして無作法な姿をして長者の所へ來た。長者は嫁に彼等を禮拜せよと命じたが、嫁は之を肯かなかつた。『私は佛の教へを信じて居る。佛は常に慚愧の心の無い者は人にして人

にあらずと仰せられた。彼の人々が見苦しい姿をして人の招待に應ずるといふは、慚愧の心の無いものといはなければならぬ。私には斯様な人を禮拜することは出来ぬ』と主張して、更に屈しなかつた。婆羅門の人達は之を聞いて大に怒り、盡く歸つてしまつた。長者は何か恐ろしい復讐がありはしまいかと心配して頻りに頭を悩まして居たが、其處へ須拔といふ婆羅門が尋ねて來た。彼は長者の話を聞いて『それは少しも心配するに及ばぬ。君の嫁が師として居る釋迦牟尼は大なる威徳を具へた方である。彼の六千人の者共が到底敵對することの出来るものではない』といつた。長者は之を聞いて大に喜び、嫁に向つて、

『汝の師とする佛を迎へ奉らうと思ふ、汝吾が爲に佛に御願ひ申せ』と命じた。斯くて釋尊は長者一家の懇請を容れて、阿若拘隣を左に、舍利弗を右に侍せしめ、阿難は鉢を取つて後に従ひ、大衆に圍繞せられて長者の家へ臨まれた。此事を傳へ聞いた六千人の婆羅門は沙門佛今此國に入れり。吾等速に此を去らざるべからず。

とて禽獸の如くに馳せて國外に通れた。釋尊は長者の家に止まり、多くの人々の爲に説法したまひ、此より佛法は盛に此の地方に弘まつたといふ。滿財長者は其の子の爲に良き嫁を擇み、之に依つて大なる功徳を積むことが出来た。此の長者の如きは良き親の模範ともいふべきもの

である。(此の話の大體は第一期の時にも述べた。)

終りに『家中の所有を興ふ』といふのは即ち財産を譲り興ふことである。親子は一の生命の連続と見るべきものであるから、親の努力の結果として、多少共に財産があれば之を其の子に譲るのは當然のことである。能く其の子を教へて之に家財を譲るのは申分の無いことである。若し

教へずして唯だ家財のみを譲るならば、其の子の一生を誤ることもある。それは慈悲ある親のすることでは無い。

財産があれば世の爲人の爲に盡すことも出来るが、又財産の爲に罪を作り惱みの種を増す場合も決して少くない。涅槃經の中に

一切の凡夫は衣食臥具に著し、身の爲にし心を樂ましむ。菩薩は若し衣を須ゆる時は身の爲にせずして但だ法の爲にす。……食に於ても同じ。

とあるが、法の爲にするといふのは法を弘むる爲に身を養ふので、身を養ふことが主では無いとの意である。若し一身の樂みの爲でなく、世を救ひ人を濟はんが爲に富を積むならば、富を積むも亦大善事である。若し専ら身を樂ましむる爲に財を貯ふるならば、それは怨恨と罪惡と

の種を積むに外ならぬものである。其の子に家財を譲るに當つても深く心を此の點に留めなければならぬ。法華玄贊に、

心平に性直に、語實にして行敦く、齒邁け財盈ちたるを名けて長者と爲す。

とあるが、其の人の品性と其の家財とが相伴つて世間の役にも立ち、人にも重んじ敬はるゝのである。眞に子孫のために謀る者は充分に思慮しなければならぬことである。

子として親に仕ふる道を説いた經文も夥しくあるが、其の一二の例を擧ぐるに止めて置かう。孝の第一は父母に累ひをかけず、常に其の心を悦ばすことである。併し日常の事に不自由をさせぬやうに心懸くることも亦肝要といはなければならぬ。されば長阿含經には

夫れ人の子たる者は當に五事を以て父母に敬順すべし。云何か五と爲す。一には供奉能く乏しきこと無からしむ。二には凡そ爲す所あれば先づ父母に白す。三には父母の爲す所に恭順して逆はず。四には父母の令に敢て違背せず。五には父母の爲す所の正業を斷たず。

とある。一に供奉乏しきこと無しといふのは、日々の衣食等に不自由をさせぬことである。孔子は『今の孝は是れ能く養ふを謂ふ。犬馬に至るまで皆能く養ふあり。敬せずんば何を以て別たんや』といはれたが如何にも尤もである。唯だ生活に不自由させぬといふだけでは親に奉ず

る道ではない。併し生活に不自由させぬやうに心懸くすることは兎も角も必要である。其の以上に尙ほ肝要なことが幾つもあるわけである。

第二に、爲す所のことを先づ父母に白すといふは即ち父母を敬する所以であると共に、又實に父母の心を安んずるの道である。父母は吾が子の身の上の上に就て絶えず心を勞して居るのであるから、子たる者は日々の行動を審かに父母に告げて其の心を安んぜしむることを忘れてはならぬ。又日々に吾が爲す所を父母に告げなければならぬと思へば、決して後暗い事は出来ぬ筈である。宋の司馬溫公は至誠の人として知られて居たが、曾て人に對して

吾人に過ぐるもの無し。但だ平生の爲す所、未だ曾て人に對して言ふ可き者あらざるのみ。

と語つたといふことである。若し吾等が日々の行動を一つも残さず父母に告げて、少しも隠さず欺かず、父母が之を聞いて安心するやうに、心懸くるならば、眞に模範的な生活が出来るわけである。是れは父母の生きて居る間のことであるが假令父母の亡き後と雖も、日々の吾が行動を父母の靈に告げて、日々に父母の靈を安んずるといふ心懸けがなければ孝子とはいはれぬ。

第三第四の箇條に就ては特に説明するにも及ばぬであらう。父母に違はず、父母の心に不安を起させぬことは、子として固より忘れてはならぬ筈である。但し是れは父母の言行が道に背かぬ場合のことである。若し父母にして正道に違背するやうな行のあつた場合には、之を諫めて其の過を除かしむるのが眞の孝子の道である。此の事に就ては別に經文を引いて説明しやう。又父母の意に背かぬといふは唯だ之に反對せぬといふことでは無く、『恭順』せよと教へてある。色を和げ禮を正しうして父母の言に従ひ、父母の心を安んずるのが即ち恭順である。孔子に門人の子夏が孝を問へるに對して、孔子は『色難し』と答へられた。唯だ父母に違はぬだけではないかぬ、常に色を和げて父母に對しなければならぬ。是れはむづかしい事であるから特に意を用ゐよと教へられたのである。朱子が之を説明して、

孝子の深愛有る者は必ず和氣有り。和氣有る者は必ず愉色有り、愉色有る者は必ず婉容有り故に親に事ふるの際唯だ色を難しと爲すのみ。

といつたが、能く之を悉せるものである。

最後に父母の正業を絶たぬといふは親の職業を相續することである。是れは當時の印度に於ける習慣によつて説かれたものであるから、必ずしも今日の吾等に適切とはいはれぬ。印度の

みならず支那でも日本でも、父子其の職業を同するものが古代の習慣であつたが、今日では全く變つてしまつた。時勢が變れば職業の種類も隨てかはる。又親と子とは必ずしも其の性質が同じくはないから、父に適した職業が子に適せぬことも稀ではない。其の性質に適せぬ職業に力を盡すことは勞多くして功少く、國家に貢獻する所も極めて少いことになるから、是れは昔の習慣を棄てた方が宜い。但し子たるものが何なりとも正しい職業に従事して、父母の心を安んずることは最も肝要である。されば六方禮經に子たる者の道を説かれたる中にも、
當に治生を念ふべし。

といふことが第一に擧げられてある。治生とは即ち或る職業によつて生計を立つることである。人々が其の業に勵むが故に、父母の心も安く、其の家も安く其の國も榮えて行くのである。國が安穩でなければ、たとへ貴い佛の敎へがあつても之を弘むべき所が無い。華嚴經には世道現に和平なれば佛法茲より始まる。

といつてある。若し人々が正しい心を以て其の職に従ひ其の業を勵むならば、佛の貴い敎へが初めて實世間に活現せられて來べきものである。法華經の法師功德品に
若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんに皆正法に順せん。

とあるは能く此の意を悉して居る。俗間の經書とは即ち世間普通に敎へらるゝ倫理道德のことである。治世の語言とは法律政治等に關する一切の事である。資生の業といふは即ち農工商等の業である。此等が凡て佛の正法に基いて行はるゝに至つて、佛の世に出て法を説きたまへる目的が初めて達せらるゝのである。

此の六方禮經にも子として守るべき五事が擧げられてあるけれども、大體は前の長阿含經のと同様である。善生子經にも五事を數へてある。それは

子の父母を見るに五事あり。一には家事を念ひ、二には負債を修め、三には誠を解へ、四には供養を爲し、五には父母を歡ばしむべし。

といふのである。是れも其の根本精神に於ては前の諸經に説かれたる所と異らぬのであるが、『負債を修め』といふ一項のあるのが特に注意すべきである。父子は元來一身同體なのであるから、父の負債は子が父に代つて之を償ふのが固より當然である。又それが父の心を安んずる所以でもある。獨逸のクルツプは製鐵事業に於て其の名を世界に知られて居るが、初代クルツプは事業を創めたばかりで死に、二代目のクルツプは僅かに十四歳にして父の後を嗣いだ。その時父の負債が夥しく残つて居たが、二代目クルツプは母と協力して其の事業を繼續し、種々

の困苦を凌いで終に世界に知られたるクルツプ製鐵事業の基礎を固めた。彼は後に至つて當時の事を追懐し

父の負債を是非とも返さなければならぬと思つて、自分は一生懸命に努力した。若しあの負債がなかつたら、自分の心はあれ程緊張して居なかつたかも知れぬ。今思へばあれが自分の事業の發展する元であつたのである。自分は父が負債を残して置いたことに對して感謝するより外はない。

といつたと傳へられて居るが、此人の如きを眞の孝子といふべきであらう。又此の經文に『供養を爲し』とあるは、父母に衣食等を供して不自由の無いやうにすることである。

以上擧げ來つた外に、特に子として大切なことが教へられてある。それは父を導いて正法に歸せしむることである。是れは前にも一度引用したと覺えて居るが、不思議光經に

飲食及び寶は未だ能く父母の恩を報ずるに足らず、引導して正法に向はしむるを便ち二親に報ずと爲す。

とあるが佛教に於ける孝道の特色を示したる語である。父母が正法に歸依し、種々の善根を積み種々の功德を爲すならば、父母はこゝに初めて眞に幸福な人となるのである。父母をして

眞に幸福な人と爲らしむることが即ち眞に父母の恩に報ずる道である。是れこそは眞の孝行である。釋尊は世間に比類の無い孝子といふのも實に之が爲である。釋尊は父の淨飯王が臨終に迫つた時に其の側に侍し、手を以て父の額に加へて

王は是れ淨戒の人、心垢已に離る。今應に歡喜して經法を誦思すべし。

といはれた。王は之を聞いて満足し、合掌して極めて安らかに死に就いた。此の時王は必ずや其の心に斯の如き善き子を持つたことを深く感謝したことであらう。是れが眞の孝行である。此より上の孝行は無い。

勿論子として父の過を匡すのには非常なる努力を要する。單に口を以て説くのみでは何の力も無い。必ずや其の身に行ふ所を以て其の範を示さなければならぬ。毘那耶律には報恩の道を説いて、

若し父母無信ならば信心を起さしめ、若し無戒ならば禁戒に住せしめ、若し性慳ならば惠施を行ぜしめ、若し智慧無ければ智慧を起さしむ。子能く是の如くにして方に恩に報ずといふを得べし。

とあるが、之を實行することは容易でない。法華經の妙莊嚴王本事品には王の二子が王を感化

して佛法に歸依せしめたる美談が記されてある。王の夫人を淨徳といひ、夫婦の間に二子があつて、一を淨藏といひ、二を淨眼といつた。夫人と二子とは雲雷音宿王華智佛に歸依して居たが、王のみは外道を信じて佛に歸依しなかつた。或時二子は母に向つて、共に佛の説法を聽聞するために佛の所へ詣らうと勧めたが、母は「父をも誘うて共に行くがよいではないか」といつた。二子は之を聞いて、斯る邪見の家に生れたことを共に歎いた。時に母は

汝等當に汝が父を憂念して爲に神變を現すべし。
 と勧めた。之を聽いて二子は必ず父を感化しやうと決心し、父の前へ行つて種々の神變を現じ、或は虚空に昇り、或は身の中より水火を出し、或は身を滅して又忽ち現はるゝ等、多くの不思議なことをして見せたので、父は驚いて

汝等が師は是れ誰と爲す、誰の弟子ぞ。

と問うた。二子は佛の弟子であることを告げた。之を聞いて王は初めて佛に歸依する心を起して、自分も共に佛の所へ詣りたいといつた。二子は大に喜んで、母の所へ來て父の王も共に發心したことを物語り、

佛には値ひたてまつること難し。優曇婆羅華の如く、又一眼の龜の浮木の孔に値ふが如し。

而るに我等宿福深厚にして、生れて佛法に値へり。
 といひ、父母と共に佛の所へ詣つて、共に佛の説法を聽聞した。時に王は佛に向つて、二子の功德を稱へ

此の二子は是れ我が善知識なり。宿世の善根を發起して我を饒益せんと欲するが爲の故に我が家に來生せり。

をいひ、佛も共に二子を稱讚して、
 大王當に知るべし、善知識は是れ大因縁なり。所謂化導して、佛を見ることを得しむ。
 と仰せられたと。まことに父の爲に善知識となることが出来れば、最上の孝子といふべきである。

此の二子が王の前へ行つて神變を現じたといふことを如何に解すべきであるか。或は天に昇り或は身より水火を出すといふやうなことは今の吾等の到底能くし難き所である。吾等が如何に望んでも出來ぬことならば、二子の爲したことが如何に貴くとも今の吾等の範とはならぬわけである。併し自分は

神變を現するといふことを尋常の人の爲し難き事を爲し得たといふ意に解釋して宜い

と思ふのである。信仰の力によつて通力が得られるといふことは、印度に於て佛教の起らぬ前から認められて居た所であるが、佛典の中には六種の通力が擧げられてある。即ち天眼通、天耳通、神足通、他心通、宿命通及び漏盡通である。而して釋尊は第六の通力を重んぜられ他
 の通力は之に比して遙かに價値の無いものとせられた。漏とは煩惱のことである。漏盡通といふは即ち有らゆる煩惱を除く力のことである。煩惱を除くことを最大の通力と見た所に佛教の特色がある。普通の人は煩惱に役せられて居る。若し煩惱を除くことが出来れば、普通の人の爲し得ぬことが易々と出来るのである。此より大なる通力は無い。彼の二子の事の如きも『信仰の力によつて普通の人の出来ぬことが出来たのである』と解釋すれば、今日の吾等の生活にも能く當て嵌るであらうと思ふ。豫言者は其の故郷に容れられぬといふことを前にもいつたが、たとへ如何なる名説を吐いても、稚い時からの事をよく知つて居る人の耳には、あまり名説とも響かぬものである。併し他の人の堪へ得ぬ困苦に堪へ、他の人の冒し難き艱難を冒して更に屈せぬならば、誰も之に對して驚歎の念を發せぬものは無い筈である。彼の妙莊嚴王の二子が父王を感化するのに
 言に依らずして行に依つたこと

は吾等に取つて誠に良い教訓である。

父子の道に就ては此邊に止め、次には師弟の道に就て佛の教へられた所の一斑を述ぶることにしやう。吾等が人の道を知ることが師の力に依るのである。唐の韓退之が『師説』を作つて、

師は道を傳へ業を受け惑を解く所以なり。人生れながらにして之を知る者にあらず、孰か能く惑無からん。惑ひて師に従はざれば其の惑たるや終に解けず、吾が前に生れて其の道を開くこと固に吾より先ならば、吾は從て之を師とせん。吾が後に生るゝも其の道を聞くこと亦吾より先ならば、吾は從て之を師とせん。吾は道を師とするなり。夫れ庸ぞ其の年の吾よりも先後生なるを知らんや。是故に貴と無く賤と無く長と無く少と無く、道の存する所は師の存する所なり。

といつたのは師道を説き盡して略ぼ遺憾なきものである。

吾等は共に同じ地上に生きて居るとはいふものゝ、其の性質といひ境遇といひ、それ〴〵に皆異つて居る。實に

天下の人心は流水の如し。中に草木あり各自ら流れ去りて相顧望せず。前なる者も亦後を

顧みず、後なる者も亦前を顧みず。人心も亦是の如し。一念來り一念去り、草木の相顧望せざるが如し。(阿含正行經)

とある通りである。而も共に佛性を具へて居る故に、正しい敎へを學べば共に正しい道に就くことが出来る。其の敎へを與ふるものは即ち師である。併しながら人の師となるは至難の事である。良き師を得ることも亦決して容易ではない。孔子の門に入つて敎へを受けた者は三千人を超え、皆孔子に心服して居た。其の門下に於て屈指の人として知られた有若の如きは、麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、泰山の丘垤に於ける、河海の行潦に於ける、類なり。聖人の民に於ける亦類なり。其の類より出て其の萃に抜く。生民ありてより以來未だ孔子より盛なるは有らざるなり。

とまで稱讚した。而して孔子が魯を去つて諸國を流浪した間には種々の艱苦を嘗めたので、孔子は隨行して居る弟子達に對して如何にも氣の毒に思はれたと見えて、『吾が道非なるか』とまでいはれたが、弟子の顔淵は之に答へて
夫子の道は至て大なり、天下能く容るゝなし。容れられざるも何ぞ病まん。容れられずして後に君子を見る。

といつたので、孔子も非常に悦んだといふ。師弟の間が此の如くであれば、如何なる艱苦を凌いでも其の心には何にも易へられぬ樂みがあつたことであらう。

昔の諺に『白頭も新なるが如く、蓋を傾けても故きが如し』といふのがある。互ひに青年の時から髮の毛が白くなるまで交際をして居ても、心と心が合はなければ、新に交りを結んだのと異なることはない。又往來で蓋を傾けて立ちながら極短い間語りあつても、心と心が一致すれば非常に久しく交つたと同様に許しあふことも出来るのである。若し同じ師に就て同じ道を學ぶものが、互ひに打解けて親しくなるならば是れ程愉快なことはあるまい。

若し人有智の善友に親近すれば、能く身心をして内外共に淨からしむ。是れを則ち名けて眞の善丈夫と爲す。(大莊嚴經論)

とあるが、孔子を繞つて集つたる諸弟子や釋尊を繞つて集つたる諸弟子はいつも此の如き悦びに充ちて居たことであらう。眞に羨むべきの至である。佛に値ひ奉ることは容易に出来ぬけれども、善き師に値つて敎へを受け得られたなら何にも換へられぬ有難い事であらう。併し人の師となるのは容易な業ではない。

勿論如何に言を巧にして道を説いても、自分で實行せずして口にのみ説くのでは、人の師た

る資格はないわけである。されば涅槃經の中には、

善知識とは法の如くに説き説くが如くに行ふをいふ。……善知識とは善法を有つが故なり。何等をか善法と爲す。所作の事に自ら樂を求めずして常に衆生の爲に樂を求め、他の過あるを見ては其の短を訟らずして、口常に純善の事を宣説す。是の義を以ての故に善知識と名く。

とあるが、眞に此の如き人があつたならば善き師として仰ぎ尊ぶべきであらう。さて此の『口常に純善の事を説く』といふことは頗る困難なものである。人は決して完全なものでは無く誰でも其の心は多少僻して居る。故に之に對して純善の事を説けば、自然其の缺點に當るから、宛も傷口に障つたやうで一種の苦痛を感じざるを得ぬ。それ故に之を聞くことを喜ばぬのである。併し苟くも人の師となつた以上は彼の意を迎へやうとか、彼を悦ばさうとかいふ考へが少しでもあつてはならぬ。されば禮記には

夫れ禮は親疏を定め嫌疑を決し、同異を別れ是非を明にする所以なり。禮は妄りに人を説ばしめず、辭を費さず。禮は節を踰えず、侵侮せず、好んで狎れず。身を修め言を踐む之を善行といふ。行修まり言道あるは禮の質なり。

といつてある。人に對して道を説かんとする者は是れ程の心得がなければならぬ筈である。其の覺悟がなくして好んで人の師となるのは大なる罪である。

人として人の道を學ばず、人の道を知らずして終るは、全く生きたかひの無いことである。如何なる苦みを冒してなりとも善き師を求めて道を聽かなければならぬ。前にも無量壽經の中に、

設ひ大火の三千大千世界に充滿すること有りともし、要らず當に之を過ぎて此の經法を聞き、歡喜信樂し受持讀誦し、説の如くに修行すべし。

とあることを述べたが、是れ程の熱心があつてこそ、凡夫の境界を脱することも出来るわけである。されば又華嚴經には師を求むるに最も熱心なるべきことを勸めて、

善知識を求めて身心に疲勞を生ずることなかれ。善知識を見て厭足することなかれ。善知識に問ふに勞苦を憚ることなかれ。善知識に親みて退轉することなかれ。善知識を供養して間斷あることなかれ。善知識の誨へに隨ひて違ふことなかれ。善知識の所有の功德を疑ふことなかれ。

といつてある。但し正しい道を學んだからとて、直に世間に立つのに都合がよくなるものでは

無い。道を學ぶのは永遠の爲である。それ故に佛本行經には

若し人善知識に親近して、其の所業の行に隨順すれば、現に世間の利を證せずと雖も、未來に當に苦因を盡すことを得べし。

と説いてある。是れは師弟共に先づ能く明にして置かなければならぬことである。道を學んで樂みが得られるといふのは、道を學ぶことによつて、如何なる窮地に在つても心は悠々として餘裕があるやうになり得ることをいつたので、必ずしも世間的の樂みが即坐に得らるゝことではない。學ぶ者は固より此處の區別をよく心得て置いて學ばなければならぬ。教ゆる者も先づ此の點を明白にして置かなければならぬ筈である。

世間はいつも變化して休まぬものである。如何に周到なる計畫を立て世間に處する人でも、思ひがけぬ事の起つて來るのを避け得られぬのである。若し順境に在れば心驕り、逆境に在れば勇氣を失ふといふやうな、未練な心持を改むることが出來ぬならば、如何に多くの事を知つて居ても物の用には立たぬであらう。二千數百年のむかし孔子が學問をする者の根本の心得を説いて

君子は食に飽くことを求むる無く、居に安きことを求むる無く、事に敏にして言を慎み、有

道に就きて正す。學を好むと謂ふ可きのみ。

といはれたのは今日の時代に最も適切なる訓戒である。門人の子張が祿を干めんが爲の道を問へるに對して孔子の答へは、

多く聞きて疑はしきを闕き、慎みて其の餘を言へば則ち尤寡し。多く見て殆きを闕き、慎みて其の餘を行へば則ち悔寡し。言に尤寡く行に悔寡ければ祿其の中に在り。

とあつた。併し是れは子張の人物に相應した答へを與へられたので、實際言行に缺點がなくても祿の得られぬ場合は少くない。されば宋の程子は之を説明して、

天爵を修むれば則ち人爵至る。君子言行に能く慎むは祿を得るの道なり。子張祿を干むることを學ばんとす。故に之に告ぐるに此を以てし、其の心を定めて利祿の爲に動かざらしめん

とするなり。顔閔の若きは則ち此の問無し。或は疑ふ、此の如きも亦祿を得ざる者有らん。孔子蓋し曰く、耕すも餒其の中に在り。惟だ理の爲すべきもの之を爲すのみ。

といつた。世間に用ゐらるべき實力を貯ふことは固より必要であるが、その實力があつても世間が用ゐぬならば據ないことである。孔子が其の志を語つて、

之を用ゆれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち藏る。

といひ、或は又

疏食を飯ひ水を飲み、脰を曲げて之を枕とす、樂み亦其中に在り。不義にして富み且貴きは我に於て浮雲の如し。

といひ、又

士にして道に志し、惡衣惡食を恥づる者は未だ與に議るに足らざるなり。

といはれたのは何人にも適切なる教へと稱すべきである。

但し惡衣惡食を恥ぢてはならぬといふのは、惡衣惡食を誇りとせよといふことではない。不義にして富み且貴きを望まぬといふのは、如何なる時代でも貧賤を喜びとせよといふことではない。之を用ゆれば則ち行ふのである。決して用ゐらるゝことを望まぬのではない。唯だ道を擧げてまでも用ゐられやうとはせぬのである。即ち

富と貴とは是れ人の欲する所なり。其の道を以て之を得ざれば處らざるなり。

といふ如き心をもつて居るべきである。世を避けてたゞ己を潔くし、世間の凡ての人を俗物と罵つて居るやうなひねくれ者になつてはならぬ。孔子は其の第一の高弟たる顔淵が陋巷に在つて其の樂みを改めぬのを稱揚せられたけれども、其の他の高弟の人物に就て人の問へる

に對して、それ〴〵に其の長所を擧げ、「政に従ふに於て何かあらん」といつて居らるゝのである。即ち充分世の中の役に立つ人物を養成して居られたことを知るべきである。

釋尊が「如何なる境遇に在つても心に自在を得る人」を養成するために常に力を用ゐられたことは今までに度々説いた通りである。釋尊の御教へによつて修行を重ねる人は、順境に在つても心驕らず、逆境に陥つても心挫けず、常に能く其の責を全うし得るのである。大乘起信論には、

十方に徧くして一切の諸善功德を修行し、其の未來を盡して、無量の方便を以て一切苦惱の衆生を救拔し、涅槃第一義の樂を得しめんと。是の如き願を起すを以ての故に、一切の時一切の處に於て己の堪るに隨ひて、所有の衆善を修學することを捨てず。

とあるが、能く佛弟子の態度を説明したる語である。此の如き人であれば、世間に用ゐらるゝ時には充分役に立つて充分に其の職責を果し、又世間に用ゐられぬ時には、たとへ微賤の身であつても獨り其の道を楽しんで居られる筈である。よし佛ほどの智慧もなく、又佛ほどの慈悲心もなく、兎も角も人の師となつて道を説くものは、佛の御心に背かぬやうにして、其の師たるの大任を全うせんことに努めなければならぬのである。中心經には

師の恩を知る者は、師を見れば則ち承事し、見ざれば則ち教誨を思惟す。孝子の父母を念ふが如く、人の飲食を念ふが如し。

とあるが、此の如くに其の弟子に慕はるゝは其の師の徳の至て高きが爲である。

人の師たる者は固より其の任の極めて重きことを思つて、自己の修養を怠つてはならぬのである。孔子の門人の中に於ても曾子は殊に徳望が高かつたので、其の徳を慕うて教へを受くる者も極めて多かつたと思はれるが、其の死に臨んで門人等に語つたことが論語に記されてある。

曾子疾あり、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、吾が手を啓け、詩に云く、戦々競々として深淵に臨むが如く薄氷を履むが如しと。今よりして後吾免るゝことを知るかな小子。

此の語の表面の意味は、自身が父母より受けたる身體を更に傷けずして終つたのを喜んだのであるが、それは單に身體のみのことでは無い。朱子の集註に、

范氏曰く、身體猶ほ缺くべからず、況んや其の行を缺きて以て其の親を辱むべけんや。

とあるのが能く其の意を悉して居る。人に教ゆるは實に自ら反省して足らざる所を知る所以であると思へば、教ゆるといふは貴いことである。されば禮記には

嘉肴有りと雖も食はざれば其の旨きを知らず。至道有りと雖も學ばざれば其の善きを知らず。是故に學びて然して後に足らざるを知り、教へて然して後に困むを知る。足らざるを知りて然して後に能く自ら反す。困むを知りて然して後に能く自ら強む。故に曰く教と學とは相長すと。説命に曰く、教ゆるは學ぶの半なりと。其れ此の謂か。

とあるが、此の心を忘れぬ師弟は共に幸である。

釋尊は其の亡き後に師道の衰へて尊き佛法の廢れ果てんことを憂へられて、屢々師たる者の心得に就て説かれたが、長阿含經には

師長五事を以て弟子を視る。一には法に順ひて調御す。二には其の未だ聞かざる所を誨ゆ。三には其の聞く所に隨ひて善義を解せしむ。四には其に善友を示す。五には己の知る所を悉して誨へ授けて惜まず。

とある。是れは何れも師として心得なければならぬ大切の箇條と思はれる。先づ第一に調御といふのは前にもある通り、巧なる御者が荒馬を訓練して馴らすことで、之を以て師たる者の訓育に譬へたのである。而して其の訓育は佛の遺したまへる正しい法によつて與へられなければならぬのである。兎角弟子といふものは先生の癖のみを真似る様になるものであるから、教ゆ

る方で充分に注意しなければならぬ。文政の頃に江戸に小鼓の上手な幸某といふ人があつた。此の人は片目見えなかつたので、鼓を打つ時に顔を少し曲げる癖があつた。それで此の人の弟子は皆顔を少し曲げて鼓を打つたと、或る隨筆に見えた。何事を習ふのでも斯ういふ癖は免れ難いものである。されば師たる者は充分慎んで、自分の性僻を弟子に傳ふるこのないやうに意を用ゐなければならぬ。

第二に弟子の未だ知らぬことを教ゆるといふのは別に説明を要せぬ事であるが。第三に善義を解せしむとあるは極めて大切なことである。善とは即ち完全の義である。弟子たる者が自分では充分に分つて居るつもりでも、未だ足らぬ所が多いにちがひ無い。仍て更に精しく教へて完全を期せしむるやうにするのが、師たる者の責任である。

學ばざるあり、之を學びて能くせざれば措かず、問はざるあり、之を問ひて知らざれば措かず。思はざるあり。之を思ひて得ざれば措かず。辨ぜざるあり、之を辨じて明ならざれば措かず。行はざるあり、之を行ひて篤からざれば措かず。

とは『中庸』にある語で、如何にも能く學問をする者の心得を説き悉してあるが、師たる者も斯ういふ點に注意して其の弟子を教へ導くならば、間違ひが無いであらう。

第四に弟子の爲に善き友を擇んでやることも師としては甚だ大切なことである。殊に年の若い時は思慮分別の定まらぬものであるから、人に欺かれ易くてツイ惡友にも近づくことが屢々ある。師たる者は之に注意を與へて、その一身を誤らせぬやうにしなければならぬ。涅槃經には惡い者に交ることを極端に戒めて、

菩薩摩訶薩は惡象等に於ては心に怖懼なきも、惡知識に於ては怖畏の心を生ず。何を以ての故に。是の惡象等は唯だ能く身を壞るも心を壞ること能はず、惡知識は二を俱に壞る。是の惡象等は唯だ一身を壞る。惡知識は無量の善身無量の善心を壞る。……是の惡象等は但だ身の怨たり。惡知識は善法の怨たり。

とある。又善生子經には善き友の利益を説いて、
教へ勸めて信を成じ、戒を成じ、聞を成じ、施を成ぜしむ。

とある。友の善惡は其の身の生涯の幸不幸の分るゝ所といふも過言ではあるまい。師たる者は特に此の點に注意してやらなければならぬのである。

終りに吾が知る所を盡く教へて惜まぬといふのは、凡夫には容易に出來ぬことで、特に意を用ゐなければならぬ點である。眞に善き師であれば其の弟子が自分よりも優れた者になるのを

満足に思ふ筈であるが、凡夫の習ひとして、人の己に勝るのを妬ましく思ふものである。それ故に自分が今まで苦心努力して學び得た所を容易に人に教へたくない、何時までも自分を他人よりも優越の地位に置きたいと思ふのが常である。併し大乘佛敎の精神からいへば、たとへ一藝一技たりとも長ずる所のある者は、其の長ずる所の事を『自分のため』とは思はず、『世のため人のために役立てたい』と考へなければならぬ筈である。前にも殷の忠臣たる伊尹の事を引いたが、伊尹が出て仕ふる際に

天の此の民を生ずるや、先知をして後知を覺さしめ、先覺をして後覺を覺さしむ。予は夫の民の先覺なる者なり。予將に斯の道を以て斯の民を覺さんとす。予が之を覺すにあらずして誰ぞや

といつたと傳へられて居る。大乘の敎へを學ぶ者は誰も是れ程の大決心をもつべきである。されば自分に少しでも長ずる所があれば、喜んで之を人に傳へ、少しでもそれが人の役に立つならば深く之に満足すべきである。言ふまでも無いことであるが、佛は常に大慈悲を以て一切衆生に接したまひ、一切衆生をして悉く佛と等しき智慧を具ふるに至らしめんことを目的として敎へを説かれたのである。されば自ら其の志を述べられて、

毎に自らは是の念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成ずることを得しめんと。(法華經壽量品)

と仰せられた。一切衆生を皆佛としやうといふのであるから、之に對して敎へを興ふことを惜まれやう筈はない。若し佛の御心を以て吾が心とする人ならば、師として人に敎ゆることを惜まうとは決して思はぬであらう。

又六方禮經にも師として心得べき條項が五つに分けて説いてある。大體の精神は前の長阿含經のとかはらぬけれども、彼と相對照して見て一層師道が明になると思ふから次に掲げやう。

それは
師の弟子に敎ゆるに五事あり。一には當に疾く知らしむべし。二には當に他人の弟子よりも勝れしむべし。三には當に知りて忘れざらしむべし。四には諸の疑難は悉く爲に之を解説す。五には弟子の智慧をして師よりも勝れしめんと欲す。

といふのである。弟子が師よりも勝れた者になるといふことは困難であるが、師としては之を以て其の敎育の目的としなければならぬ。苟子の勸學篇に
學は以て已む可からず。青は之を藍より取りて藍よりも青し。氷は水之を爲して水よりも寒

とある。學んで怠らなければ弟子にして師に勝ることも出来ぬ筈はない。弟子をして學んで怠らぬ心を起させるのは、師たる者の誘掖の力に依るより外にない。清朝の初期に於て畫家として名ある人も多かつた中で、三王の名は殊に高かつた。即ち王時敏と王鑑と王石谷とである。此の中で王石谷は最も年少であつて、二十歳の時に王鑑の門人となつた。王鑑は極めて懇ろに之を教へ導いたので、久しからずして石谷の技は大に進んだが、公務によつて遠方へ行かなければならぬことになつたので、石谷を自分の親戚の王時敏に托した。時敏は石谷と語りあつて、「此の人は至て年少であるけれども、吾が師ともなるべき人である」といひ、彼を自分の家に寄寓せしめ、平生蒐集して置いた古今の名畫を自由に見ることが許し、又多くの蒐集家の所へ伴つて行つて出来る丈多く諸家の秘藏を見させた。王石谷の非凡なる天分は之によつて大に啓發せられ、後には人をして「天分人功俱に絶頂に至る」とまで稱揚せしむるやうになつた。三人中の最後輩たる王石谷の名が他の二王を壓するやうになつた時に、

吾が眼は狂はなかつたといつて大に悦んだのは王時敏であつた。

此の人の如きは眞に人の師たる道を盡した者といふべきであらう。

さて弟子たる者が常に師の教へを守つて過が無ければ申分はないが、若し過があつた時には其の反省を促すために之に相當の制裁を與ふることが必要となる。之に就ては弟子に五事あらば方に教誨すべし。一には不信。二には懈怠。三には惡口。四には情に羞恥無し。五には惡知識に近づくなり。(有部根本毘奈耶)

と定めてある。先づ第一に如何に多くの事を學んでも、篤く之を信ずる心の無いものは赦して置くことは出来ぬ。第二に其の熱心が足らずして、懈怠の習はしの著いた者は赦して置かれぬ。第三に他人の惡事を世間に吹聴する者は、假令それが事實であつても赦され難き罪である。況して虚構であつた場合は更に重い罪である。第四に自己の過に就て羞づるといふ念のないものは殊に排斥すべきである。

慚は鐵鈎の如く、能く人の非法を制す。若し慚愧を離るれば則ち諸の功德を失ふ。愧ある人は則ち善法あり。愧なき者は諸の禽獸と相異なること無きなり。

とまで遺教經には説いてある。終りに惡友に近づくの恐るべきことは前にも述べた通りである。

然らば之に對して如何なる制裁を加ふべきかといふに、凡そ五通りの制裁方法が定められて

ある。其の五といふのは、

一には共に語らず。二には教授せず。三には同じく受用せず。(同じく受用するといふのは共に生活することである。)四には善事に興することを許さず。五には共に室を同じくせず。此の五を以て隨宜に教誨すべし。

とある。勿論此の五通りの制裁を一度に盡く加へよといふのでは無い。其の過の大小輕重により、又其の時の事情をも充分參酌して五つの中の一つか二つか、適當に之を實行して宜いので「隨宜」にと斷つてあるのは之が爲である。さて斯る制裁を興ふるのは、彼に反省を促し、彼が一日も早く其の過を改むることを望むの慈悲心に出るものであるから、彼が眞に其の過を改むる時には赦して故の如く弟子の列に加ふべきは勿論である。

弟子の中から排斥して、之に教へを興へぬのは其の反省を促す所以で即ち教へざるを以て教ゆるのである。彼を憎むが爲でなく、彼を愛するが爲である。

教ゆるの道も亦種々ありといふべきである。佐藤一齋の言志録に、
誘掖して之を導くは教の常なり。警戒して之を諭すは教の時なり。躬行以て之を率ゆるは教の本なり。言はずして之を化すは教の神なり。抑へて之を揚げ、激して之を進むるは教の

權にして變なり。教にも亦術多し。

とあるが、頗る味ふべき言である。

法華經の方便品を讀むと、舍利弗等の熱心に說法を請へるに動されて、愈々釋尊も佛の智慧とは如何なるものなるか、佛の世に出られたのは何の爲であるか等の大問題に就て説きたまふ順序となり、「汝已に懇懃に三たび請じつ、豈に説かざるを得んや。汝今諦かに聽き善く之を思念せよ。吾當に汝が爲に分別し解説すべし」と仰せられた。此時に釋尊の說法を聽くことを喜ばぬ者が五千人あつて、其の坐を立てて退いた。彼等が何故退いたかといふと、經文には「此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂へり。此の如き失有り、是を以て住まらず」とある。彼等が立去るのを釋尊は制止したまはず、其の立去つて後に舍利弗に向つて、

是の如き増上慢の人は退くも亦佳し。

と仰せられた。是れは決して釋尊が彼等を見放して、どうなつても構はぬと思はれた爲では無い。一切衆生を平等に見たまふ佛は、彼等増上慢の者共をも決して憎み給はぬのである。彼等の退坐を止められなかつたのは、彼等を見放されたのではなく、彼等が自ら反省してまた教へ

を求めて来るまで待たうと思はれたからである。久しく佛の御敎へを聽いて居た者が佛門を去つて、何時まで平和な心で居られるものではない。久しからずして其の心に種々の疑惑が起り、種々の苦悶が生じて来て、自ら之を解決することが出来なくなる。其の時になつて初めて氣がつく。未だ得ずして得たりと思ひ、未だ悟らずして悟つたと思つて居たのは誠に濟まぬことであつたと氣のつく日が必ず来る。釋尊はその日の來ることを期待して居られたのである。即ち釋尊は

今に戻つて來いと、心の中で彼等の爲に祈りながら

彼等の立去るのを許されたのである。是れこそは眞に弟子に對する尊き師の慈悲と申すべきである。

勿論師が弟子に對して責むる所は、師その人の實行し得ることではなければならぬ。釋尊が多くの御弟子を戒めて、

人自ら意を伏すること能はず、反りて他の意を伏せんと欲す。能く自意を伏せば、他人の意は伏すべし。(三慧經)

と仰せられた所は、凡ての師たる者の共に嚴しく守らなければならぬ所であらう。阿難が釋尊

に向つて「師は弟子を如何に責むるも自由であるが、弟子を責むるのみで自ら反省する所がなくしてはなりません」と問うたのに對して、釋尊は「それは固より不可なり」と仰せられ、道を以て感ずること自然にして、當に相信すること厚く、彼を視ること己の如くすべし。己の行はざる所は人に責むること勿れ。

と敎へ、更に重ねて

弟子と師の二道は眞誠にして、師は當に師の如くすべく、弟子は當に弟子の如くすべし。

(阿難問事佛吉凶經)

と敎へられた。此等の敎訓を讀んで、現代に於ける師弟の關係に思ひ到れば、唯だ感慨無量といふより外はない。人の師たる地位に在るものが先づ深く自ら反省しなければならぬ。

師として當に守るべき所の道は固より守らなければならぬが、弟子は弟子として亦其の道を守らなければならぬ。自分の實行し得ぬことを弟子に強めてはならぬといふのは、師として當然の心得である。併し弟子としては師の過を求むることをせず、たとへ師が自ら實行せぬ所でも、その説く所に道理があれば謹んで之を聽き、厚く之を行はうといふ心得を持たなければならぬ。何となれば自ら正しく道を行ふのは、實に自ら其の生涯を幸福にする基を作るものである。

るからである。未曾有經には帝釋天が狐を拜して師としたといふことが出て居る。獅子に追はれた狐が井の中に落ち、命の將に終らんとするに臨んで、今まで自分の爲し來つたことを懺悔した。帝釋天は遙かに其の聲を聞いて、天上から降りて來て彼の狐を助け、改めて自分の爲に道を説かんことを請うた。時にその狐が『教を請ふ者が禮を守らなければなるまい』といつたので、帝釋天は恭しく狐を拜し、自ら下座に就いて狐の偈を説くのを聞いたといふ。尊い帝釋天が賤しい狐に敬禮を表したのは、

唯だ道を貴ぶ心より出るものである。

たとへ其の人の行ひに缺點があつても、道を傳ふる人は師として之を敬ひ、之に禮を盡すといふのが眞實に道を求むる者の態度でなければならぬ。

禮記の中には大學の制度に就て委しく記してある。周の時代に於ては國立の大學があつたのである。禮記には青年の人が必ず學に就くべきことを説いて『時過ぎて然して學べば則ち勤苦して成り難し』といひ、又『獨學にして友無ければ則ち孤陋にして寡聞なり』といひ、天子と雖も師を敬うて學に勤めたことを述べて、

凡そ學の道は師を嚴にするを難しと爲す。師嚴にして然して後に道尊し。道尊くして然して

後に民學を敬するを知る。是故に君の其の臣を臣とせざるもの二あり。其の尸たるに當りては則ち臣とせざるなり。其の師たるに當りては則ち臣とせざるなり。大學の禮は天子に詔くと雖も北面すること無し。師を尊ぶ所以なり。

とある。尸となるといふのは祖先の祭をする時に其の祭主となることである。之を敬ふのは即ち祖先を敬ふの道である。又師として教へを説く時に之を敬ふのは即ち教へを貴ぶの意に出るものである。天子は南面し臣下は北面するのが禮であるけれども、大學に於ては師たる者が南面し、天子と雖も北面して其の説く所を聽くのである。吾が國でも昔の賢明なる諸侯の中には、自ら下座に就いて其の儒臣の講義を聽いた人があつたさうである。師を敬するは即ち道を敬する所以である。主君が自ら道を敬するの範を示せば、臣下は皆學を好むやうになるに極めて居る。

淺野家に於ける山鹿素行の待遇の如きは其の著しき一例である。素行は承應二年、三十二歳にして千石の高祿を以て淺野家に招聘せられ、三十九歳にして祿を辭するまで非常なる優遇を受けて居た。素行自ら其の『配所殘筆』に當時の様子を記して、

辰の年淺野内匠頭拙者へ直に約束せられ候て色々念頃の上、知行千石宛行はれ候。拙者儀相

應の奉公申付けられ候様に達て頼み申し候へども、いかゞ存ぜられ候や、番並に使者等一度も申付けられず候。定めて拙者不調法者故にてこれある可く候。稽古日を定め置き、我等罷出候時分は馳走せられ候て浪人分にせられ候。

といつて居る。而して其の仕を辭して赤穂から江戸へ歸る時に淺野侯は懇ろに謝辭を述べて、聖學の筋目發明仕り候事、異朝にさへこれ無く候間、古今に其方一人に候。我等事十二歳より兵學稽古仕り候て、畠山殿弟子に相成り其の流を極め、上泉流を習ひ上泉治部右衛門相傳を極め、其後尾畑勘兵衛殿弟子に相成り印可迄取り候。北條安房守殿は猶以て心安く晝夜仰せ談ぜられ候。然るに其方の蔭故、兵學の筋目初めて能く得心仕り、有難く思召され候故、其方へ別に誓紙を遣し置き候。

といつたと素行自身に書いて居る。實に比類なき優待といふべきである。斯くまで禮を盡して賢士を待つたことは決して無益ではなかつた。此の時の赤穂の城主は淺野長直であつたが、其の後素行四十五歳の時幕府の忌諱に觸れて赤穂へ配流の身となつた。淺野家では前からの特別の關係もあるので非常な素行を厚遇し、彼は配所に在つた十年の間、罪人といふは名のみで實は賓客の待遇を受け、淺野家の若侍の教育に大に力を盡した。淺野家は長直の孫長矩の代に至

り殿中で刃傷した廉を以て切腹を命ぜられ、その家は潰れてしまつたが、其の臣下たる大石内藏助始め四十六人が復讐の目的を遂げて永く義士の名を謳はると共に、主家の譽ともなつたのは人の能く知る所である。此の大石始め所謂義士の人々は皆直接若くは間接に山鹿素行の感化を受けた者である。若し素行の前後兩回、併せて十九年間の努力が無かつたら、恐らく義士も出なかつたことであらう。長直が素行を優遇し自ら弟子の禮を執つたことが、まことに大なる効果を後に遺したものと見るべきである。

世に師弟の道が亡びたなら、學問も教育も一切力の無いものになつてしまふであらう。釋尊が常に師弟の道の重んずべきことを教へられたのは、前に説いた大乘戒の中に於て屢々之を繰返されたのを見ても充分に之を知るべきである。阿難の問に答へられた中には、決して師を輕んずべからざることを力説せられて、

寧ろ身を火中に投じ、利刀を以て肉を割くとも、慎んで是の善人を妬み誘ふことを得る勿れ。其の罪小ならず。(阿難問事佛吉凶經)

とまでいつてある。又

弟子師に従ひて行くに、足を以て師の影を踏むことを得ず。(沙彌威儀經)

といふは人の能く知る所の訓戒である。師は斯くまでに敬ひ重んぜらるべきものである。又法華經の中に説かれたる檀王が阿私仙人に事へたる事實は、師に事ふる範として能く知られて居る。王は

願を發して無上菩提を求むるに心退轉せざりき。

といふやうに道を求むるに熱心な人であつたが、終に鼓を撃つて四方に宣令し、

誰か能く我が爲に大乘を説かん者なる。我當に身を終るまで供給し走使すべし。

といつた。而して阿私仙人が王の所へ來て『若し我に違はずんば當に爲に宣説すべし』といふ

を聞いて王は非常に喜び、心を盡して之に事へたとある。其の有様を經文には、

王は仙の言を聞きて歡喜踊躍し、即ち仙人に隨ひて所須を供給し、果を採り水を汲み、薪を

拾ひ食を設け、乃至身を以て牀座と作せしに、身心倦むこと無かりき。

といつてある。王が斯くまでに身を苦めて師に事へたのは、決して自己一身のことを思つての

爲ではなかつた。自ら覺を得た後には汎く之を世の人に傳へて、共に意義ある生を送らうとの

考へからであつた。されば經文に

普く諸の衆生の爲に大法を勤求し、亦己が身及び五欲の樂の爲にせず。故に大國の王と爲り

勤求して此の法を獲て、遂に成佛を得ることを致せり。

とある。此の心さへあれば如何なる苦みにも堪へられる筈である。自分が覺を得れば、人を救ふことも必ず出来る。自分が生涯を意義あるやうに送り得るやうになれば、多くの人をして自分と同様に意義ある一生を送らせることが出来るのである。師に事ふることに依つて斯る大なる幸が得らるゝのであると思へば、喜んで多くの勞苦に服し得べきである。

釋尊が弟子の心得を説かれた言も多くあるが、凡ての人に適切と見らるゝのは長阿含經の中に示されたる五事である。それは

弟子の師長に敬奉するに五事あり。云何か五と爲す。一には所須を給侍す。二には禮敬供養す。三には尊重戴仰す。四には師の教勅に恭順して違ふこと無し。五には師に従ひて法を聞き善く持ちて忘れず。

といふのである。此の中に所須とあるのは飲食物のことである。その他は別に説明を要せぬであらうが、特に大切なのは『善く持つ』といふことである。教へを聞いた時に貴いと思つても、之を久しく心に信ずることが出来なければ聽いたかひは無い。久しく信じて居て初めて之を身に實行することにもなるのである。されば智度論には、

信力の故に受け念力の故に持つ。

とあり、勝鬘寶窟には

始めは則ち領受して心に在るを受といふ。終は則ち憶ひて忘れざるを持つといふ。

とある。又之を憶持ともいふ。觀無量壽經の中には、

汝等憶持して廣く大衆の爲に分別し解説せよ。

とある。能く憶持する者には、之を多くの人に傳ふる力も自ら具はるわけである。是れが道を學ぶ者に取つて特に大切なることである。

又善生子經に説かれたる五事は、師に事ふる道を悉されてあると共に、凡て學問をする者の心得として忘れてならぬ事と思はれる。其の文には

聞を審にし、學を愛し、事に敏にして、過行なく、師を供養す。是れ弟子の師を見るの五事なり。

とある。先づ第一に聞を審にするといふのは出来る丈精密に注意して、少しの疑問も心に残らぬやうに、師に就て問ひ質すのである。勿論實行が大切であるけれども、疑はしい點があつては、之を實行しやうといふ熱心は起らぬものである。天台大師の法華玄義の語は前にも幾度か

引いたと思ふが、その中に

行は衆多なりと雖も智を以て本と爲す。

とある。智の方が行よりも大切だといふ意味ではない。智が明になれば自ら實行が之に伴つて來るから、智を本とするといつたのである。されば又之を説明して、

智は導主の如く行は商人の如く、智は利き針の如く行は長き線の如し。

とある。導主といふのは商人が他國へ貿易に行く時の案内者のことである。その案内者が地理に明であれば商人は其の取引が安全に出来るのである。又物を縫ふ時に針が真直で鋭ければ糸がスラ／＼と運ばれるのである。智と行との關係も亦此の如くである。

次には學を愛することである。勿論此處に學といふのは單に知ることばかりでなく、其の實行に努力することも含まれて居るのである。即ち廣い意味でいふ一切の修行であるが、最初は「修行しなければならぬ」といふことを理解して、能く勤めて怠らぬならばそれで上乗である。併し是れが最上乘ではない。次第に興味が生じて來て、止めやうとしても止められぬといふやうになるならば、それは單に勤めて怠らぬといふよりは更に優れたものである。孔子の言に、

之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を樂む者に如かず。

とあるが、安井息軒が之を説明して、
之を知るとは道の當に學ぶべきことを知るなり。之を飲食に譬ふれば、之を知る者は其の以て生を養ふ可きを知る者なり。之を好む者は之を嗜む者なり。之を樂む者は得ざれば則ち憂ふる者なり。

といつたのは能く其の義を悉して居る。得ざれば則ち憂ふるといふ程度になつて、初めて眞に學を愛するものといふべきである。華嚴經に、

若し樂みて法を聞きて厭足することなければ不可思議の法を悟る。

とあるのも、學を愛するの効果をいつたものであらう。

次に『事に敏にして』といふは、努めて善事を行つて怠らぬことである。言ひ換へれば、善と信じた事は必ず即坐に之を斷行し、惡を覺つた事は必ず即坐に之を止め、躊躇逡巡せぬことである。それには非常なる勇氣を要するものである。孔子は固より天性非凡の人であつたのであらうが自身には

我生れながらにして之を知る者にあらず、古を好み、敏にして以て之を求めたる者なり。

といひ、其の弟子達を勵まされた。朱子は之に註して『敏とは速なり、汲々たるを謂ふなり』といつた。孔子はいつも善を爲すに汲々として、寸時と雖も空しく過されたことはなかつた。兼好法師の徒然草の一段に、

或者子を法師になして、因果の道理をも知り説經などして、世を渡るたつきにせよといひければ、教へのまゝに説經師にならん爲に先づ馬に乗りならひけり。輿車もたぬ身の導師に請ぜられん時、馬など迎へにおこせたらんにも、しりにて落なんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後酒などすゝむる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの技やう／＼界に入りければ、いよ／＼能くしたく覺えて、嗜みける程に、説經習ふべき暇なくて年寄りにけり。此の法師のみにもあらず、世間の人なべて此事あり。……されば一生のうち、むねと有らまほしからん事の中に、いづれか勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすて、一事を勵むべし。とあるが如何にも道理ある言である。人生の大事に就ては少しも考へず、役にも立たぬことに暇を費す人が何時の世にも多いのである。兼好はなほ之に續けて

たとへば碁を打つ人、一手もいたづらにせず人に先だちて、小をすて大に就くが如し。それ

にとりて三の石をすて、十の石につく事はやすし。十をすて、十一につく事は難し。一つなりとも勝らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜く覺えて、多くまさらぬ石にはかへ悪し。是をも捨てず彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず是をも失ふべき道なり。

といつたが、是れもよく人情を察した言である。更に進んで、

京に住む人急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行き其の益まさるべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。こゝ迄來つれば此事をば先づいひてん、日をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。

とあるが、是れは殊に吾等の身に適切である。尙又一の例を出して、

人のあまたありける中に、或者ますほのすゝきまそほのすゝきなどいふ事あり、渡邊の聖此ことを傳へ知りたりと語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが聞きて、雨のふりけるに蓑笠やある、貸したまへ、かの薄のこと習ひに渡邊のひじりのがり尋ねまからんといひけるを、あまりに物騒がし、雨やみてこそ人のいひければ、無下の事を仰せらるゝものかな、人の命は雨のはれ間を待つものかは、我も死に聖も失せなば、尋ね聞きてんやとて、走り出

て行きつゝ習ひ侍りにけりと申傳へたるこそ、ゆゝしく有難う覺ゆれ。敏きときは則ち功ありとぞ、論語といふ書にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

とあるが、能く事に敏なることの必要を説き盡して、まことに有益なる教訓である。

弟子としての心得の第四には『過行なく』とあるが、是れは日毎に反省して自己の身に過のないやうに努むることである。たとへ善事を爲して世を益しても、一面に又多くの過失によつて世間に累ひを及ぼすやうなことがあつてはならぬから、深く此の點に留意すべきである。曾子が

吾日に吾が身を三省す。人の爲に謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信あらざるか。習はざるを傳ふるか。

といつたのは即ち其の身に過の無からんことを期したのであるが、苟くも學に志す者は此の如くに常に反省すべきである。朱子は之を評して、

曾子此の三者を以て日に其の身を省み、有れば則ち之を改め、無ければ則ち加す勉む。其の自ら治めて誠切なること此の如し。學を爲すの本を得たりと謂つべし。

といつて居る。勿論大乘の教へを學ぶものは他日佛の正法を世間に弘めて多くの人を濟ふことを志とするものであるから、常に自ら省ること曾子の如くでなければならぬ。若し自分の行に過があれば、周圍の人にも悪い感化が及ぶに極つて居る。那先比丘經の中に那先比丘が彌蘭陀王に語つた所に

譬へば人あり燈火を持して屋上に至り、其の火藁に點じて家を焼き、遂に村を焼くに至りぬ時に村人此の人を捕へて責めて曰く、汝何が故に我が村を焼ける。その人答へて曰く、我は村を焼かず、我は藁に火したるのみと。

とあるが、誠に適切なる譬喩である。自分の家を焼いた火はやがて其の村を焼く火となるのである。我は村を焼かずといつても言譯にはならぬ。吾等が行を愼まなければならぬのも全く之と同じ道理である。

終りに師を供養するといふことが擧げてあるが、供養は即ち感謝の意を形に現はすものである。されば如何に多くの物を以て供養しても、誠心が之に伴はなければ供養とはならぬのである。師の教へられた所を必ず實行しやうといふ心があつて、初めて其の供養が供養たる意義をもつ。法華經の中には迦葉等が釋尊の大恩を感謝し、種々の美膳、種々の寶衣その他種々の物

を以て恒沙劫の久しきに亘つて供養しても此の恩に報ずることは出来ぬといつて居る。斯くまでに深く師恩を感じたる迦葉等は、此の大恩に報ぜんが爲に、佛法を世に弘むることに全力を盡さうと決心したのである。釋尊は能く彼等の心を知らしめすが故に、彼等が後に至つて必ず皆佛と成るべきことを告げられ、其の感化の最も大なるべきことを説いて、
魔及び魔民有りと雖も皆佛法を護らん。

といつて居らるのである。此の如くにして初めて眞に頼もしい弟子といはるべきものである。

又六方禮經にも五事が説いてある。大體は善生子經の一致して居るが、少しく異同があるから次に之を擧げやう。

弟子の師に事ふる當に五事あるべし。一には當に之を敬ひ難るべし。二には當に其の恩を念ふべし。三には教ゆる所は之に隨ふ。四には思念して厭はず。五には當に後より之を稱譽すべし。

之に就て一々説明することは略して置からうが、師を稱譽するといふ事は特に注意しなければならぬ。何人に就ても其の美點を擧げて之を稱揚するのは良いことである。況して教へを受けた

師に對しては固より斯くあるべき筈である。希臘のアリストテレスはプラトーンの門に入つて、二十年の久しい間其の敎へを受けたが、後に自ら書を著はして古來の學者の說を批判した際に、師たるプラトーンの說に對して随分嚴しい非難攻撃を加へた。勿論彼は之を辨解して「師のプラトーンを愛せぬのではないが、眞理を愛するの念が更に強いのである」といつて居る。それは學者として眞理を愛するの念の強いのは貴ぶべき事である。又眞理を明にするに當つて師の說に批判を加ふるのも據ない事でもあらう。併し其の態度には弟子としての恭敬の念を示して居なければならぬ。アリストテレスの如くに無遠慮なる非難を加ふることは、決して許さるべきで無い。アリストテレスは賢人の聞えの高い人であるが、此の點は範とすべからざるものである。

孔子の弟子の子夏は其の子が死んだ時に泣き悲しんで、終に盲目となつた。曾子は其の友人であつたので之を訪うて懇に慰めた。時に子夏は「天なるかな予は罪無し」といつた。曾子は之を聞いて怒つて彼を責め「吾も汝も共に孔子に事へたものである。然るに汝は西河の邊に居た時に、孔子と優劣なき賢人であるといはれて、得意然として居たではないか。是れ汝の罪の一である。又汝は親に死別れた時に、深き哀悼の様子もなかつたといふではないか。是れ汝の

罪の二である。而して今は子を失つたのを悲しんで失明するに至つた。是れ汝の罪の三である」といつた。子夏は之を聞いて、其の杖を投じて曾子を拜し、

吾過てり、吾過てり、吾羣を離れて索居せること亦已に久し。

といひ、久しく友人の忠告を聞かずに居た爲に行に過失の多くなつたことを悔み、曾子の忠告を心から感謝した。此の曾子の忠告の言はまことに道理に叶つて居る。孔子の弟子の子貢も亦賢人の聞えが高く、叔孫武叔は多くの人に向つて「子貢は孔子よりも賢れり」といつた。然るに子貢は之を聞いて、

之を宮牆に譬ふれば、賜(子貢の名である)の牆は肩に及べり、室家の好きを窺ひ見るべし。夫子の牆は數仞なり。其の門を得て入らざれば、宗廟の美百官の富を見るべからず。其の門を得る者或は寡し。夫子の云ふこと(此の夫子は武叔を指す)亦宜ならずや。

といつた。子貢の如きは眞に弟子たる道を能く辨へた者である。釋尊の御弟子達も常に言を盡して其の徳を稱へて居た。それは釋尊の徳の洪大無邊なるに因ること勿論であるが、御弟子達も皆能く師弟の道を辨へて居たものと思はれる。

師弟に關することは此邊に止め、次には夫婦の道に關して釋尊の敎へられた所を少しく述べ

やう。釋尊は妻が其の妻としての責を盡すべきことを懇に教へらるゝと共に、又夫が常に其の妻を敬ひ、妻をして安んじて其の力を家事に盡さしむべきことを教へられた。釋尊は充分に婦人の力を認めて居られたのである。尤も佛經の中には屢々婦人の恐るべきことを説き、宛ら婦人が凡ての罪惡の元であるかの如き事さへもいつてあるが、それは主として年の若い出家の人々を戒めて、過を犯させまい爲であつた。涅槃經に

一切の女人は皆是れ衆惡の住する所の處なり。

とある如きは其の一例である。又華嚴經に『女人は地獄の使』とあるなど、言ひ傳へて居るが、實際華嚴經に左様な語はない。誰か後世の人の作つたものであらう。其の他『外面如菩薩内心如夜叉』といふのも有名な語になつて居るが、經典には更に根據がない。後世の人が宛ら經典の語の如くに作り上げたものと思はれる。佛教の精神を正しく理解するならば、特に婦人を卑むべき道理はない筈である。

佛教に於て家庭生活を否定せぬことは今までも度々述べた。出家の弟子は佛を賛けて、佛法の流布に力を致すものであるが、社會一般の人が此の貴い佛法を信じて、佛法の精神に基いて日常の業を勵むやうになるのが佛の世に出て教へを説かれた目的である。決して凡ての人に

出家を勤められたわけでは無い。例へば無量壽經の如きは専ら阿彌陀如來の徳を稱へ、極樂淨土の貴い有様を具さに述べたものであるが、決して現世に於ける生活を一切無意味なものと思はれたのでは無く、

世間の人民、父子兄弟夫婦、家室中外の親屬、當に相敬愛して、相憎嫉すること無く、有無相通じて貪惜するを得ること無く、言色常に和して相違戻すること無かるべし。

といふが如くに教訓してある。既に家庭生活の大切なことを認めらるゝ以上は、家庭を掌る婦人の貴いことを認められぬ筈はない。殊に母として子を養ふことは最も大切なる務めで、慈父

悲母といふ中にも、悲母の恩は殊更重いと説かれてある。例へば心地觀經には
母の悲恩は我一劫の間世に住して説くとも説き盡し難し。……百人の淨行の婆羅門と百人の神仙と、百人の友とを七寶の堂内に請じ、百千種の上妙の珍膳を供養し、瓔珞を垂れ百寶を以て牀臥具を莊嚴し、百藥を以て病を治療して百千劫に満つるとも、一念孝順の心を起して、微少の物を以て悲母に供養し、隨從供侍せんには若かず……若し悲母の教に順隨して違ふことなければ、諸天之を護念し福德盡ること無かるべし。

とまでいつてある。

人々の皆佛性を具へて居ることは佛の明かに認めたまへる所である。されば婦人と雖も修行次第で佛の境界に到達し得らるべきは勿論のことである。法華經の提婆品には龍王の女が成佛したことが記されてあるが、其の成佛に先つて舍利弗は「女身は垢穢にして、是れ法器に非ず、云何ぞ能く無上菩提を得ん」といひ、且昔から言ひ傳へられたる女人の五障を擧げた。それは梵天王となることを得ず、帝釋となることを得ず、魔王となることを得ず、轉輪聖王となることを得ず、佛と成ることを得ずといふのである。然るに龍王の女は佛と成ることが出来たのである。其の有様を經文に記して、

當時の衆會皆龍女が忽然の間に變じて男子と成り、菩薩行を具して、即ち南方の無垢世界に往き、寶蓮華に坐して、等正覺を成じ、三十二相八十種好ありて、普く十方の一切衆生の爲に妙法を演説するを見る。

とある。婦人が變じて男子と成るといふのは奇異のこのやうであるが、其の意義を深く味つて見れば少しも怪むべき事ではない。婦人が男子になつたといふは要するに「男女の差別を超越してしまつたこと」である。菩薩の行といふは要するに大乘の敎への實行に外ならぬのであるが、大乘の敎へを修行するに當つて男女の區別はないのである。誠心を以て修行さへすれば、

ば、人によつて遲速の別はあつても、皆共に其の具有する佛性を開發せしむることが出来て、終には佛の境界に到達し得らるべきである。世間普通の習はしとしては婦人の方が男子よりも地位が卑い。又其の敎育の程度も概して男子よりも低く、又社會の重要な地位に立つて大なる責任を果すといふやうな場合も少いから、概して其の實力は男子に劣つて居る。舍利弗の擧げたる五障の如きも、斯る事情に基いて考へられたものであらう。併し佛の

大乘の敎へを學んで怠らなければ男女の差別を超越して、共に佛と成ることが出来るのである。斯く解して來ると此の提婆品の記事は頗る意義深きものである。

又前にも擧げたが、優陀近王が讒言を信じて舍摩夫人を射殺さうとした時に、夫人は王の心の昏きことを哀愍し、慈愛三昧に入つて居た爲に其の箭は夫人の身に中らず、王は自身の不明を悔いて夫人と共に佛門に入つたといふ。此の慈愛三昧といふは慈愛の念が胸に充ちて、身心共に動せざる状態に在ることである。斯る貴い念をもてる者を誰も害することは出来ぬのである。老子の中に「慈なるが故に能く勇なり」とあることは前にも述べたが、韓非子の解老篇に之を説明して、

慈母の弱子に於けるや、其の福を致すを務め、則ち其の禍を除くを事とす。其の禍を除くを事とすれば則ち思慮熟す。思慮熟すれば則ち事理を得。事理を得れば則ち必ず功を爲す。功を成せば則ち其の之を行ふや疑はず。疑はざる之を勇といふ。聖人の萬事に於けるや、盡く慈母の弱子の爲に慮るが如し。故に必ず行はるゝの道を見る。必ず行はるゝの道を見れば則ち明なり。其の事に従ふ亦疑はず。疑はざる之を勇と謂ふ。疑はざるは慈よりして生ず。故に曰く、慈なるが故に能く勇なりと。

といつてあるが、彼の舎摩夫人の事も亦此の理であらう。

其の他にも信仰の力の勝れた婦人は多くあつたが、勝鬘夫人の如きは其の尤なるものといふべきである。夫人の父たる波斯匿王と、其の母たる末利夫人とは共に深く釋尊に歸依して居た。勝鬘夫人も両親の感化を受けて佛法を學び、其の神髓を捉へることが出来たので、釋尊の前に立つて、其の解し得たる所を述べて教へを乞うた。夫人は先づ十大受を説いた。十大受とは自分が佛の大乗の教へを學ぶに當つて、必ず實行しやうと志す所の十箇條である。其の第一は次の如くである。

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、受くる所の戒に於て犯さんと心の起さじ。

菩提に至るまでといふのは「佛と同じ智慧を具ふるに至るまで」といふ意である。第二には

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、諸の尊長に於て慢心を起さじ。

といふのである。尊長とは父母師長先輩等のことである。第三には

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、諸の衆生に於て恚心を起さじ。

といふのである。諸の衆生といふは道も教へも辨へぬ世俗の人のことである。其等の人々が如何に間違つたことをしても、唯だ之を哀愍するのみにして、之に對して瞋恚の心は起すまいといふのである。第四には

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、他の身色及び外の衆具に於て嫉心を起さじ。

といふのである。凡て其の生活状態に於て自分より勝つたものを見ても、之を嫉妬することは慎まうとの意である。第五には

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、内外の法に於て慳心を起さじ

といふのである。内とは心をいひ、外とは物質的の事をいふので、要するに世間の哀れな人を救ふ爲には物をも惜まず、又心を勞することを厭ふまいとの意である。第六には

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、自ら己の爲に財物を受畜せず、凡そ受くる所有るは、

悉く貧苦の衆生を成熟するが爲にせん。

といふのである。成熟するとは其の生活の立行くやうにしてやることである。第七には

一切衆生の爲の故に無愛染心、無厭足心、無聖礙心を以て衆生を攝受せん。

といふのである。無愛染心といふのは一切の物に對する執着の無いことである。無厭足心とい

ふのは今迄自分の行つたことに満足せず、善を求めて止まぬ心である。無聖礙心といふのは一

切の障礙を離れ、如何なる境遇に在つても心に自在を得ることである。此の如くに寛く裕なる

心を以て、一切衆生を救ふために力を盡さうとの意である。第八には

若し孤獨幽繫疾病、種々厄難困苦の衆生を見れば終に暫くも捨てず、必ず安穩ならしめんと欲

し、義を以て饒益し、衆苦を脱せしめて然る後に捨てん。

といふのである。義を以て饒益するといふは正しき道によつて之に助けを與ふることである。

第九には

諸の犯戒の者を見ては終に棄捨せず。我力を得ん時は彼々の處に於て此の衆生を見て、折伏

すべき者は之を折伏し、攝受すべき者は之を攝受せん。何を以ての故に。折伏攝受を以ての

故に法をして久住ならしむ。

といふのである。前にもいつたことであるが、折伏とは他の人の行の誤れるを見て、之を責め
て其の過を改めしめ、正しい道に導き入るゝことである。攝受とは他の人の行の道に合せるを
見て、之を勵まして愈々其の善を積ましむることである。攝受と折伏とが誤り無く行はれて、
佛法は永く榮えて行くのである。第十には

世尊我今日より乃し菩提に至るまで、正法を攝受して終に忘失せじ。

といふのである。此の十箇條を正しく實行するならば、菩薩道を遺憾なく其の身に行へる者と
稱せらるべきである。

勝鬘夫人は以上の十大受を説き終つて後、更に進んで大乘の教へのみが眞の佛法と稱せらる
べきものなることを詳説し、吾等は皆自性清淨心（佛性といふも同じことである）を具有せる
が故に、皆大乘を學ぶことによつて一切の煩惱を離るゝことを得べきよしを述べた。釋尊は之
を聞き終つて『善哉』と稱せられたので、勝鬘夫人は非常に喜んで其の國に歸り、夫の友稱王
に向つて自分の信ずる所を語つた。友稱王は之を聞て大に感じ入り、共に力を協せて大乘の教
へを弘めた。之に依つて

國を擧げて人民皆大乘に向ひき。

といふほどの成績を擧げた。その時に釋尊は祇園精舎に在して長老阿難及び帝釋天を召され、勝鬘夫人の述べた所を繰返して語られ、帝釋天には

三十三天の爲に分別し廣説すべし。

と命ぜられ、阿難には

汝も亦受持讀誦し、四衆の爲に廣く説くべし。

と命ぜられた。以上は勝鬘經に記されたる所の大意であるが、勝鬘夫人はまだ年の若い一婦人にすぎぬけれども、心に深く大乘の教へを信じたるが故に佛の歎稱する所となり、又其の夫たる友稱王を感化し、其の國內の人民をも感化することが出来た。釋尊はなほ長老阿難及び帝釋の如き有力なる人々に對して、夫人の所説を廣く宣説せよと命ぜられた。其の具有する所の佛性が光りを發し來る時には、老少を問はず男女を論ぜず、共に大なる功德を積み得べきである。大乘の教へに於ては斯く「男女の間に高下の別のない」ことを明かにしてあるのである。但し「高下の別がない」といふ事と「同じ業をしなければならぬ」といふ事とを混同するのは誤つて居る。同じやうに美しいが梅の花には梅の特色があり。櫻の花には櫻の特色がある。同じやうに佳い景色ではあるが、山の景色と海の景色とはそれ／＼に異つて居る。男女共に修

行次第で共に菩薩となり、結局は共に佛と成れるのではあるが、男は男らしく優れ、女は女らしく優れ、それ／＼に其の特色を持つて行くものである。前にいつた龍王の女のことを文殊師利菩薩が稱めた語に、

衆生を慈念すること猶ほ赤子の如く、功德具足して心に念ひ口に演ぶること微妙廣大なり。慈悲仁讓志意和雅にして能く菩提に至れり。

とある。是れは菩薩として徳を積んで、終に佛の境界に到達し得たことをいつたのであるが、如來にも婦人らしい優しさを具へて居ることが想像せらるべき語である。斯く男女各その性質を異にするが故に、互に相扶け相補つて社會の健全なる發達を圖るのが男子の幸福でもあり、又婦人の幸福でもある。婦人が男子の職業を奪はなければ其の社會的地位を高め得られぬやうに思ふのは非常なる間違ひといはなければならぬ。

何事にも例外といふものは認められなければならぬのであるから、婦人の中にも他の婦人と全く別の生活をして行く人があつても、それは少しも差支へはない。併しそれは最も少數でなければならぬ。即ち或る特殊の婦人は自分の最も得意とする道に一身を捧げて、家庭の生活をなさず、獨身で生涯を送つてもよいであらう。併し大多數の婦人は人の妻として活きなければ

ならぬ。男女は其の性質を異にし、互ひに長ずる所もあり、又足らぬ所もある。それが互ひに扶けあひ補いあふことに依つて社會は健全に發達を遂げる。社會の基本となるものは即ち家庭である。斯う考へて來ると、

性質の異ふ男と女とが相集つて家庭を作ることには深き意義がある。

夫婦の生活といふものは、血統を絶やさぬといふことも一目的ではあるが、それが家庭を作ることの目的の全部ではない。夫婦が互ひに他の足らぬ所を補ひあつて、完全なる生活を營むといふことが家庭生活の重大なる意義と考へられなければならぬ。

人と人と共に住んで居れば、自然互ひに感化を與へあふものである。夫婦が共に住んで居る間に自然と夫は其の妻に感化を及ぼし、妻は其の夫に感化を及ぼすのである。若し世の中に家庭生活といふものが無かつたなら、男も女も共に極めて不完全なる性格をのみ持つて居たとであらう。西洋の學者の中には、東洋の古代の風俗は非常なる男尊女卑であつて、婦人が極度まで輕んぜられて居たなど、論ずる人もあるが、それは深く究めぬ者の説である。支那の如きも古代に於ては決して婦人を輕んじては居なかつた。先づ妻といふのは『齊しい』といふ義である。それで説文には

妻とは婦の己と齊しき者なり。

といつてある。されば周の時代の習はしとしては、妻を娶るに先つて必ず親迎をしたのである。即ち正式の媒人が中に立つて婚約が成立つて後、夫たるべき者は妻たるべき者の家を訪問し、其の親に逢つて禮物を呈し、婚約の成立つたことを謝して歸るので、此の事が無ければ正式の結婚とはいはれぬのである。斯く禮を盡して迎へた妻は『聘せられた』といふので、若し此の禮が整はずして結婚したものは『奔つた』といふのである。聘せられた者は妻と呼ばれ奔つた者は妾である。白樂天の作つた樂府の中にも、

聘せらるれば則ち妻たり奔れば是れ妾。祀を主りて蘋蘩を奉ずるに堪へず。

とある。決して妻を輕んじたといふことは無いのである。

詩經の始めに關雎の篇といふのがある。これは周の文王の妃たる大姒の徳を稱へた詩である。其の詩の句に

窈窕たる淑女は君子の好述。

とある。此處に淑女といふは大姒を指し、君子といふは文王を指したのであるが、述とは匹の意と解釋してある。匹とは『並ぶ者』といふ意である。大姒は文王と相並んで國民の尊敬を受

けたのである。即ち妃たる者は王と同等に尊ばれたのである。然るに後世になると婦人が輕侮せらるゝやうな間違つた習はしが出来て、之が爲に孔子の語たる「唯だ女子と小人とは養ひ難しと爲す。之を近づければ則ち不孫なり。之を遠ざければ則ち怨む。」

といふのも一般に曲解せられて、孔子は婦人を小人と同様なものに思つたといふ風に言ひ傳へられた。併し此處にいふ女子とは諸侯の奥向などで召使ふ女中のこと、小人とは卑い地位に在る僕のことである。斯ういふ輩は兎角心が僻んで居るのである。孔子は斯ういふ輩に對しての戒めを説かれたので、朱子が之を解釋して、

君子の臣妾に於ける、莊以て之に臨み、慈以て之を畜へば則ち二者の患無し。

といつたのは能く其の意を悉して居る。孔子は決して凡ての婦人を輕んぜられたのではない。若し孔子が婦人を輕んぜられたならば、其の詩經を刪定する時に關雎の篇を最初に置かれやう筈がない。

國家の繁榮といふのも其の元は各自の家の能く齊つて居るか否かに在る。家が亂れて國が榮えやう筈はない。されば『大學』にも

其の家教ゆ可からずして能く人を教ゆる者はこれ無し。故に君子は家を出ずして教へを國に成す。

といひ、又

一家仁なれば一國仁に興り、一家讓なれば一國讓に興る。……詩に云く、桃の天々たる其の葉秦々たり。之子于に歸ぐ其の家人に宜しと。其の家人に宜しくして而して後に以て國人に教ゆ可し。

といつてある。家庭生活の重んずべきこと此の如くであるとすれば、家庭の中心たる婦人の責任の重いことはいふ迄もない。随つて斯る重大なる責任を有する婦人を輕んじ侮つて濟む筈はない。唯だ其の國に戰亂でも起る時には、男の方が女よりも多く役に立つものであるから、戰亂續きの場合には婦人が輕んぜらるゝやうになるのも據ない次第である。

吾が國に於ても決して婦人が輕んぜられて居たわけでは無いが、戰國の時代に於ける婦人はまことに氣の毒なものであつた。群雄割據といふ有様であると、互ひに自分の勢力を擴張することにのみ熱中する。その爲に婦人が利用されるといふやうな場合も随分あつた。例へば美濃に齋藤氏があり、尾張に織田氏があつて、互ひに其の隙を窺つて居た。そこで齋藤の方では

織田に油断をさせて尾張を取りたいと思つて、自分の娘を織田氏へ嫁がせる。織田の方では又齋藤に油断をさせて美濃を取りたいと思つて、その方便として齋藤氏の娘を貰ふ。斯ういふことの爲に利用せられた婦人こそは、全く其の人格を無視されたものといはなければならぬ。徳川氏の娘が豊臣秀頼の妻となつたのも之と同様のことで、實に人道を無視すること甚しきものである。

如何なる方法を用ゐても勝利を得たいといふのは、人の心ではなくて虎狼の心である。

虎狼の心が其の力を逞うする時には、婦人が其の犠牲となるのも已むを得ぬ次第である。人が皆人らしい心をもつて居れば、家庭の中心たるべき家人が軽んぜられ侮られやう筈はないのである。

佛教に於ては固より人を人として敬ふことを根本義として居る。『衆生元より佛性有り、他より得べきにあらず』とは首楞嚴經にある。『一切衆生の心性は本清し』とは大集經にある。又心地觀經には心を名けて

諸佛の功德を生ずる本源なり。

といひ、又

心は猶ほ大地の五穀を生ずるが如く、菩薩及び佛位を生ず。故に三界は唯心のみ、故に心地と名く。

といつてある。されば夫婦の間に於ても互ひに相愛し相敬すべきは勿論である。相敬するといふのは其の具有せる佛性を敬ひあふことである。姿の美しいのは久しく續くものではない。それは宛も美しく咲いた花が忽ちに凋んでしまふのと同様である。併し心の美しさは決して衰へたり枯れたりするものではない。拘留國に摩訶密といふ者があつて其の家は富み榮え、七人の美しい娘をもつて居た。彼は九十日の間其の娘達を連れて國中を巡つたが、誰も皆其の美を褒め稱へた。摩訶密は非常に得意になり、その時釋尊が祇園精舎に居られたところへ七人の娘を連れて行き、『佛は諸國を遊行したまふ間に此の如き端正なる女を見たまひしや』と問うたが、釋尊は其の七人の娘を見て『一も好き處なし』と仰せられた。摩訶密が意外に感じて其の理由を問うたのに對して、釋尊は

我は身に細滑を貪らず、口に惡を説かず、意に惡を思はざるを好と爲す。

と答へられた。細滑とは細かに滑なる良き絹のことで、細滑を貪らぬといふは美服を求めぬことである。釋尊は姿の美に誇らずして、心の美を求めよといふことを教訓せられたのである。

此の祇園精舎を作るに就ては給孤獨長者が非常に力を盡したのであるが、此の長者の息子の妻を玉耶女といつた。玉耶女は美人の聞えの高い人であつたので、其の美貌に心驕り、兩親や夫に事ふることが甚だ足りなかつた。それで長者は大に心を痛め、「何を以てか之に教へん。杖を以て打つは善き法にあらず。恣にせしめて教へざれば其の罪日々に増長す。たゞ佛に請ひて教へを祈らんのみ」と決心した。それで一日釋尊を其の家に請じ、嫁に教戒を與へられんことを願つた。釋尊は玉耶女に向つて懇に婦人として守るべき所の道を説かれ、

女人の法は端正によつて嬌慢を生ずること勿れ。形貌の端正は眞の端正にあらず。たゞ心端正なれば人皆愛敬す。是れ實の端正なり。

と教へられたので、玉耶女も終に改悟して、此より良き妻となつたといふ。妻としては勿論その妻たる責任を果さなければならぬのであるが、其の夫たる者が妻の責任の重大なることを能く理解し、之を敬ふことを忘れてはならぬ。夫婦互ひに敬ひあふことに依つて、健全なる家庭が成立つのである。

然らば夫婦は如何にして其の家庭生活を圓滿ならしむべきかといふに、先づ夫の妻に對する心得として善生子經には五事が擧げてある。即ち

夫は當に五事を以て其の婦を養ひ安んぜしむべし。五事とは正しき心をもて之を敬ひ、其の意を恨まず、他情あらず、時に衣食を興へ、時に寶飾を興ふるをいふ。

とある。「養ひ安んぜしむ」といふ考へが尤も大切である。妻たる者が其の心に不安があつては、忠實に家事に當ることは出来ぬ。夫としては此處に深く意を注がなければならぬのである。妻をして心を安んじて家事に當らしむる爲には、先づ第一に之を敬ふべきである。敬ふといふは必ずしも言語應待を慇懃鄭重にすることではない。其の人格を認むることである。表に立つて働く人の努力は目立ち易いが、蔭に隠れた人の努力は殆んど目立たぬ。目立たぬ事は多く酬わられずして終るものである。家の中に於ける婦人の働きの如きは即ちそれである。併し家の中が能く齊つて居なければ、外へ出て充分の働きの出来るものではない。日蓮上人が

箭の走ることは弓の力、雲の行くことは龍の力、男の仕業は女の力なり。

といつたのは能く此間の消息を傳ふるものである。若し夫たる者が家を預る妻の努力の一通りでないことを認めて、之を尊重するならば妻は安んじて家事を引受けることが出来るのである。

次に『其の意を恨まず』といふのは、妻の爲すことに不足を感じぬことである。人は誰でも

完全なものではないから、毎日の行ひに就ても其の缺點を探すならば缺點は限りなくある。若し互ひに其の缺點を數へて非難しあふならば、世の中に満足なものは何も無くなつてしまふであらう。殊に家の中を平和に、又愉快にするためには互ひに其の長所を認めて之に感謝し、其の短所は出来るだけ赦しあふといふことが尤も必要である。又次に『他情あらず』といふは妻より外の女に心を移さぬことである。

身は是れ機關の主、塵の風に隨ひて轉ずるが如し。六賊中に遊戯して、自在にして罣礙なし。

と觀普賢經にある。六賊とは眼耳鼻舌身意に受くる種々の感覺に伴つて起る所の煩惱のことである。凡夫の生活は此の如きものであるから美しい姿、好い聲その他種々の誘惑に連れて、心の絶えず動搖するを免れぬ。常に深く自ら戒めなければならぬ事である。若し夫たる者が此等の點に絶えず意を用ゐて居れば、たとへ毎日の生活に物質的の缺乏があつても、妻は唯だ夫の頼もしい心を頼りとして、忠實に家事を處理し得らるゝものである。

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

といふは紀友則の歌であるが、妻の其の夫を頼りとする心は正しく此の如きものである。

次には『時に衣食を興ふること』及び『時に寶飾を興ふること』が擧げてある。時にといふのは即ち適當なる時にといふ意である。奢侈は固より慎むべきであるが、あまりに吝嗇なのは人たるの道に背いて居る。

奢淫と吝嗇とは神の福せざる所なり。(易林)

といふは能く當れる語である。若し一家の主たる者があまりに奢侈を好めば、其の家の風儀は全く亂れてしまふ。若し又主たる者があまりに吝嗇であれば、家の中には少しも明るい朗かな氣分が無くなつて、其の家は決して繁昌せぬものである。若し其の家が貧しければ強いて服裝を飾るには及ばぬけれども、相當な暮しをして居る以上は、婦人が身のまはりを見苦しからぬやうに整へることは當然である。若し夫たる者が其の家を愛し又其の妻を愛するならば、之に適當なる裝飾を興へることも固より缺くべからざる事である。

六方禮經にも夫の妻に對する心得が五項に分けて説いてある。其の大體に於ては善生子經のと異らぬが、多少の異同がある。即ち次の如くにいつてある。

夫の婦を視るに五事あり。一には出入當に婦を敬ふべし。二には之に飯食せしめ、時節を以て衣被を興ふべし。三には當に金銀珠璣を給すべし。四には家中の所有の多少は悉く用て之

に付すべし。五には外に於て邪に傳御を畜ふことを得ず。之に就て一々説明する必要もあるまいが、其の第四項は特に注意すべきである。即ち一家の經濟を妻に任せて妄りに干渉せぬことである。是れは妻に對する夫の信用を示す所以である。若し家の中の經濟を妻に任せず、事毎に夫が干渉する時には妻たる者は「それ程に自分に信用が置けぬのか」と悲觀して、毎日の自分の努力が殆んど無意味なことのやうに思ふに違ひない。それでは一家の繁昌して行かう筈がない。禮記には

信は婦の徳なり。一たび之と齊うすれば身を終るまで改めず。

とある。之と齊うするとは夫と共に住むことである。斯くまで信を守るのは夫が自分を充分に信用し、自分の努力を認めて居ると思ふからである。夫が恣に内事に干渉すれば、内外の別といふものは全く亂れてしまふ。同じく禮記に

夫れ婚禮は萬世の始なり。……摯を執りて以て相見る、敬んで別を章にするなり。

とある。夫も妻も互ひに敬重しあつて、互ひに其の責を充分に盡さなければならぬのである。終りに「邪に傳御を畜ふ」といふは、妻に隠して外に別の婦人を養つて置くことで、それが一家不和の元となるべきは勿論である。

夫としての心得は先づ此邊に止めて、此より妻として守るべき道に就て述べやう。一家の榮ゆるも衰ふるも主として妻の心得如何に依ることである。子孫の賢なるも愚なるも亦主として妻の心得如何に依ることである。妻たる者の責はまことに重い。隨て其の責を遺憾なく果し得たる妻は眞に貴ぶべく敬ぶべき者である。大樹緊那羅王の夫人の問へるに對して、釋尊は先づ佛に親近すること。邪見を離るゝこと。

の最も大切なるを説かれた。邪見とは前にも屢々いつた通り、因果の理を無視することである。次には身と口と意とに於て固く佛の戒を守るべきことを教へられ、次に無爲の心を以て布施すること。其の行に於て詐のないこと。恭敬の心を以て賢聖に向ふこと。常に正法を聽くこと。

が大切であると教へられた。無爲の心といふは即ち求むる所のない心をいふのである。人に惠を施すに當つて其の報を求むる心があつてはならぬ。若し其の報を求むる心があれば、其の報を得られぬ時に必ず怒り恨むことになるから、切角の善事が却て禍の元になる場合が少くない。

勞を人に施して祐を蒙らんと欲すれば、殃其の身に及び自ら怨を受く。(孝經)

とまで強くいはれたのは之が爲である。若し一家の妻たる者が恵を人に施して其の報を求めぬ心であれば、其の家の者は自ら皆篤實敦厚の氣風になるであらう。次に妻たる者が其の日常の行に於て詐り飾ることが少しも無いならば、一家盡く相信じて、まことに善い家風が出来上るであらう。又賢人とか聖人とか稱せらるゝ人々を常に敬ひ尊ぶことは、即ち自己の向上發展を來す所以である。之を敬ひ尊ぶの念はやがて、自分も之を學び之に近づきたいといふ念を生むものである。荀子が

學は其の人に近づくより便なるはなく、學の經は其の人を好むより速なるは莫し。

といつたのは至言である。一家の妻たる者が常に賢聖を敬ふことは、即ち一家の人々を盡く向上せしむる因となるのである。又婦人が率先して佛の正法を聽くならば、一家擧つて正しき信仰をもつやうになり、子孫に至るまで永く其の慶を受くるであらう。然るに今までの婦人は概して男子よりも教育の程度も低く、動もすれば感情に動されて健全なる判斷を缺くやうになり、誤れる信仰に入つた者も少くなかつた。是れは大に戒むべき所である。其の誤れる信仰にも種々あるが、自己の行を慎むことを忘れ、たゞ福を求むるが爲に信を凝すといふ點に於ては殆んど皆一致して居る。

佛の正法は吾等の心を正しうすることを目的として説かれたもので、若し心を正しうすることに努めずして、自己の欲望を達せんが爲に神佛の助けを求むる者は、皆正法に背反せる者といふべきである。此の如くに誤れる信仰をもつ者が一家の中心となつて居れば、一家盡く其の害を受けなければならぬ。大に戒むべき所である。

善生子經に夫の妻に對する心得が説かれてあることは前にいつたが同じ經には又妻の夫に對する心得が十四項に分けて説いてある。即ち

婦は又當に十四事を以て夫に事ふべし。何をか十四と謂ふ。善く作爲し。善く爲に成し。受付審に。晨に起き。夜く息み。事は必ず學び。門を闔ちて君子を待ち。君子歸れば問訊し。辭氣和に。言語順に。几席を正しくし。飲食を潔くし。布施を念ひ。夫に供養するなり。

とあつて、此の如き家には必ず『善法衰へず』といつてある。此の中の最初の三事は、前に主從の道の所で擧げたのと同様であるが、第一に『善く作爲し』といふは其の妻として爲すべき業を出来るだけ完全にするやうに常に努力することである。第二に『善く爲に成し』といふは夫の爲す所に缺點があれば傍より之を補つて、出来るだけ完全ならしむるやうに努むることである。成すとは即ち成就せしむるの意である。第三に『受付審に』といふは自分に任されたこ

とに就て、夫に少しも疑念を挾ませぬやうに常に心を用ゐることである。特に一家の經濟上のことは一切妻に任せるのが本意であるから、前に説いた夫の心得の項參照) 任された妻の方では何時でも夫に明白に報告の出来るやうにして置くことが必要である。其處に疑惑を生ぜしむるやうな點があつては切角信用して任されたかひの無いわけで、夫婦間の感情を阻隔せしむる元ともなるであらう。

次に『晨に起き夜く息む』とあるは勤勉の重んずべきことをいつたので、別に説明の必要はあるまいが、『事は必ず學ぶ』といふ一項に特に注意すべきである。如何に微細の事でも完全に爲し遂げるのは容易でない。必ず何處かに手落ちの出来るものである。併し完全に出来ないでも平氣で居るといふのは、忠實なる妻の心懸けではない。そこで何事を爲すにも充分に研究し、出来るだけ多くの人の説を聞いて、出来るだけ完全を期するのである。是れが『必ず學ぶ』といふ語の意義である。

絶えざる修養、絶えざる研究は何人にも必要であるが、殊に人の妻たり、人の母たる者には必要である。

次に『門を闔ぢて君子を待つ』とあり、又『君子歸れば問訊す』とあるが、此處に君子といふ

のは即ち夫のことである。夫の家に居らぬ間は家の中の取締りを嚴重にして夫の歸るを待ち、歸つて來れば外出中に何の障りも無かつたかと問ひ訊ねて其の勞を慰むるのである。家に此の如き優しい妻があれば、外に在つて如何に多くの難事を處理しても、家に歸つて其の勞を醫することが出来るから、元氣を失はずして其の責を果すことが必ず出来るのである。

次には『辭氣和に』とあるが、言語の柔和温順にして聞く者に少しも不快の感を與へぬやうに努むることは、婦人に取つて殊に肝要である。次に『言語順に』といふは語る所がよく道に叶ひ、繁簡宜しきを得ることである。多辯なのは兎角間違ひを起し易いが、さりとして餘り言葉數が少くて相手の手に手持無沙汰な思ひをさせるのも禮に叶つたことではない。中庸を得るやうに意を用ゆべきである。妻たる人が常に此邊の注意を怠らなければ、其の家の中はいつも明るく、穏かな氣分に充されて居るから、自ら好い事も集つて來るものである。宋の名臣言行錄に、

朱光庭、明道先生に汝州に見ゆ。歸りて人に語りて曰く、某春風の中に在りて坐了すると一月なりき。

とある。温厚なる程明道と一月共に居たことを回想して、『春風の中に坐して居た』といつたの